茨城県教育財団文化財調査報告第418集

釈迦新田遺跡２

首都圏氾濫区域堤防強化対策
事業地内埋蔵文化財調査報告書4

平成29年３月

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所
公益財団法人茨城県教育財団

茨城県教育財団文化財調査報告第418集

釈迦新田遺跡２

しゃかしんでん

首都圏氾濫区域堤防強化対策
事業地内埋蔵文化財調査報告書4

平成29年3月

国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所
公益財団法人茨城県教育財団

序

公益財団法人茨城県教育財団は，国や県などの各事業者から委託を受けて，埋蔵文化財の発掘調査と整理業務を実施することを主な目的として，昭和52年に調査課が設置されて以来，数多くの遺跡の発掘調査を実施し，その成果として発掘調査報告書を刊行してきました。

この度，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所による首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴って実施した，茨城県猿島郡五霞町釈迦新田遺跡の発掘調査報告書を刊行する運びとなりました。

今回の調査によって，平成21・22年度の調査に引き続き，縄文時代の遺物包含層，中世の墓域に関連する遺構が明らかになりました。これらの成果は，当地域の社会の成り立ちや歴史を知るうえで，欠くことのできない貴重な資料となります。

本書が，歴史研究の学術資料としてはもとより，郷土の歴史に対する理解を深め，教育・文化の向上のための資料として広く御活用いただければ幸いです。

最後になりますが，発掘調査から本書の刊行に至るまで，多大な御協力を賜りました委託者であります国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所に厚く御礼申し上げますとともに，茨城県教育委員会，五霞町教育委員会をはじめ，御指導，御協力をいただきました関係各位に対し，深く感謝申し上げます。

平成29年 3月

公益財団法人茨城県教育財団

理事長　野　口　　通

例　　言

1　本書は，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所の委託により，公益財団法人茨城県教育財団が平成27年度に発掘調査を実施した，茨城県猿島郡五霞町大字釈迦字地蔵前2411－1番地ほかに所在する釈迦新田遺跡の発掘調査報告書である。

2　発掘調査期間及び整理期間は以下のとおりである。

調査　平成27年9月1日～平成27年10月31日

整理　平成28年9月1日～平成28年11月30日

3　発掘調査は，調査課長白田正子のもと，以下の者が担当した。

首席調査員兼班長　　駒澤　悦郎

次　席　調　査　員　　作山　智彦

調　　査　　員　　大久保芳紀

4　整理及び本書の編集・執筆は，整理課長後藤一成のもと，調査員大久保芳紀が担当した。

凡　　例

1　当遺跡の地区設定は，日本平面直角座標第Ⅸ系座標に準拠し，X＝＋14,160 m，Y＝－8,240 mの交点を基準点（A 1 a1）とした。なお，この原点は，世界測地系による基準点である。

この基準点を基に遺跡範囲内を東西・南北各々40 m四方の大調査区に分割し，さらに，この大調査区を東西・南北に各々10等分し，4 m四方の小調査区を設定した。

大調査区の名称は，アルファベットと算用数字を用い，北から南へA，B，C…，西から東へ1，2，3…とし，「A 1 区」のように呼称した。さらに小調査区は，北から南へa，b，c…j，西から東へ 1，2，3…0と小文字を付し，名称は，大調査区の名称を冠して「A 1 a1 区」のように呼称した。

2　実測図・一覧表・遺物観察表等で使用した記号は次のとおりである。

遺構　　P－ピット　PG－ピット群　SA－柱穴列　SB－掘立柱建物跡　SD－溝跡　SE－井戸跡
　　SK－土坑　HG－遺物包含層

遺物　　DP－土製品　Q－石器・石製品

土層　　K－撹乱

3　遺構・遺物実測図の作成方法については，次のとおりである。

(1) 遺構全体図は400分の1，各遺構の実測図は原則として60分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(2) 遺物実測図は，原則として3分の1の縮尺とした。種類や大きさにより異なる場合は，個々に縮尺をスケールで表示した。

(3) 遺構・遺物実測図中の表示は，次のとおりである。

施釉　　溶着材　　炭化材

●土器　　□石器・石製品

4　土層観察と遺物における色調の判定は，『新版標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄編著　日本色研事業株式会社）を使用した。また，土層解説中の含有物については，各々総量を記述した。

5　遺構一覧表・遺物観察表の表記は，次のとおりである。

(1) 計測値の単位はm，cm，gで示した。なお，現存値は（　）を，推定値は［　］を付して示した。

(2) 遺物観察表の備考の欄は，残存率，写真図版番号及びその他必要と思われる事項を記した。

(3) 遺物番号は通し番号とし，本文，挿図，観察表，写真図版に記した番号と同一とした。

6　遺構の主軸は，長軸（径）方向とみなした。長軸・長径方向は，座標北からみて，どの方向にどれだけ振れているかを角度で表示した（例　N－10°－E）。

7　今回の報告分で，整理段階で遺構名を変更したものは以下のとおりである。

変更　SK241→SK327，SK242→SK328，SK248→SA 3 P 2，SK311→第5号火葬施設，SD24→SD 1，PG 6 P 85→SB 2 P 1，PG 6 P 93→SB 2 P 2，PG 6 P 89→SB 2 P 3，PG 6 P 97→SB 2 P 4，PG 6 P 90→SB 2 P 5，PG 6 P 84→SB 3 P 1，PG 6 P 86→SB 3 P 2，PG 6 P 92→SB 3 P 3，PG 6 P 88→SB 3 P 4，PG 6 P 95→SB 3 P 5，PG 6 P 90→SB 3 P 6，PG 6 P 96→SB 3 P 7

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
釈迦新田遺跡の概要 …… 1
第１章　調査経緯 …… 3
　第１節　調査に至る経緯 …… 3
　第２節　調査経過 …… 3
第２章　位置と環境 …… 4
　第１節　位置と地形 …… 4
　第２節　歴史的環境 …… 4
第３章　調査の成果 …… 10
　第１節　調査の概要 …… 10
　第２節　基本層序 …… 10
　第３節　遺構と遺物 …… 11
　　１　縄文時代の遺構と遺物 …… 11
　　⑴　土坑 …… 11
　　⑵　遺物包含層 …… 16
　　２　中世の遺構と遺物 …… 21
　　⑴　火葬施設 …… 21
　　⑵　土坑 …… 22
　　３　近世の遺構と遺物 …… 28
　　⑴　土坑 …… 28
　　⑵　溝跡 …… 28
　　４　その他の遺構と遺物 …… 33
　　⑴　掘立柱建物跡 …… 33
　　⑵　井戸跡 …… 36
　　⑶　土坑 …… 36
　　⑷　溝跡 …… 41
　　⑸　柱穴列 …… 41
　　⑹　ピット群 …… 45
　　⑺　遺構外出土遺物 …… 47
　第４節　まとめ …… 51
写真図版 …… PL １～PL ６
抄　録
奥　付
付　図

釈迦新田遺跡の概要

遺跡の位置と調査の目的

釈迦新田遺跡は，猿島郡五霞町の北部に位置し，利根川右岸の標高 10 mほどの低台地上に立地しています。首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に先立ち，遺跡の内容を図や写真に記録して保存するため，茨城県教育財団が平成 27 年度に，遺跡の中央部にあたる 1,351㎡について発掘調査を行いました。

調査の内容

平成 21・22 年度に引き続き３回目の調査になります。調査の結果，縄文時代（約 4,500 ～ 4,000 年前）の土坑８基，遺物包含層１か所，中世（約 700 ～ 400 年前）の火葬施設１基，土坑 30 基，近世（約 400 ～ 150 年前）の溝跡４条などを確認しました。主な出土遺物は縄文土器（深鉢），土師質土器（小皿），陶器（皿・卸皿・天目茶碗・擂鉢・瓶ヵ），瓦質土器（焙烙・火鉢），石器（鏃・石皿・磨石・凹石・砥石・剥片），土製品（円筒埴輪・羽口）などです。

調査区遠景（東上空から）

調査区全景

中世の土坑

縄文時代の土坑から遺物が出土した様子

縄文時代の土坑から出土した土器

調査の成果

縄文時代の遺物包含層からは，多くの縄文土器が出土しました。土器片を観察すると，角が取れたものや表面が磨滅したものが多く，出土している土器から中期末葉に斜面に遺物を含んだ土が流れ込んで形成されたと考えられます。

中世の遺構は，墓坑と考えられる長方形の土坑や火葬施設を確認し，前回の調査と同様に，墓域として利用されていたことが分かりました。

近世には耕作地になっていたと考えられ，地割を目的とした溝跡を確認することができました。

また，円筒埴輪の破片が１点見つかりました。小さな破片ですが，近くに古墳が存在していた可能性があります。

第１章　調　査　経　緯

第１節　調査に至る経緯

平成 16 年 12 月 15 日，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに，首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内における埋蔵文化財の所在の有無，及びその取扱いについて照会した。これを受けて茨城県教育委員会は，平成 17 年２月 28 日に現地踏査を，平成 26 年８月 21 日及び 10 月９日に試掘調査を実施し，遺跡の所在を確認した。平成 26 年 10 月 29 日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長あてに，事業地内に釈迦新田遺跡が所在すること，及びその取扱いについて別途協議が必要であることを回答した。

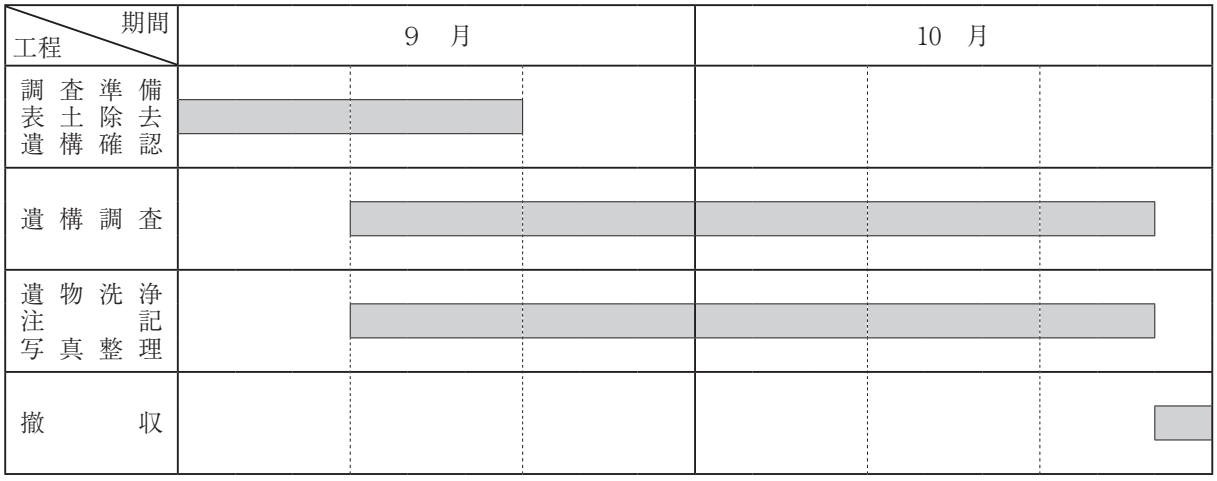
平成 26 年 12 月 25 日，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに，文化財保護法第 94 条に基づく，土木工事のための埋蔵文化財包蔵地の発掘について通知した。平成 27 年１月 15 日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長あてに現状保存が困難であることから，記録保存のための発掘調査が必要であると決定し，工事着手前に発掘調査を実施するよう通知した。

平成 27 年２月 27 日，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長は，茨城県教育委員会教育長あてに，首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に係る埋蔵文化財発掘調査の実施についての協議書を提出した。平成 27 年３月６日，茨城県教育委員会教育長は，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長あてに，釈迦新田遺跡について発掘調査の範囲及び面積等について回答し，併せて調査機関として公益財団法人茨城県教育財団を紹介した。

公益財団法人茨城県教育財団は，国土交通省関東地方整備局利根川上流河川事務所長から埋蔵文化財発掘調査事業について委託を受け，平成 27 年９月１日から平成 27 年 10 月 31 日まで発掘調査を実施した。

第２節　調　査　経　過

釈迦新田遺跡の調査は，平成 27 年９月１日から 10 月 31 日までの２か月間にわたって実施した。以下，その概要を表で記載する。



第2章　位　置　と　環　境

第1節　位　置　と　地　形

釈迦新田遺跡は，茨城県猿島郡五霞町大字釈迦字地蔵前 2411 － 1 番地ほかに所在している。

五霞町は，茨城県の南西部，利根川以南に位置しており，北を利根川，東を江戸川，西から南にかけてを権現堂川によって南北約 4.3㎞，東西約 5.0㎞に区画されている。町域の地形は，利根川及び中・小河川によって開析された低地と五霞台地と呼ばれる低位段丘群によって構成されている。五霞台地は，猿島台地の南西部が江戸時代の利根川東遷により，切り離されたことで形成された低位段丘群である。町内の標高は，おおむね北西部から南東方向に標高が低下する。最高標高は 17.5 m，最低標高は 9 mで，平均標高は約 12 mである。

利根川流域に広がる低台地の地質は，新生代第四紀沖積層が中心で，約 1 万年前までの新しい時代の堆積層によって形成されている。また，この沖積層の下には第四紀洪積層後期に形成された洪積層が堆積しており，下層から竜ケ崎砂礫層，常総粘土層，関東ローム層に分層される[1)]。

五霞町周辺の現在の利根川流域には，沖積低地と洪積台地が広がっている。利根川の北側では，利根川の支流によって開析された谷津が広がり，谷津から洪積台地にかけて遺跡が存在している。また，利根川の南側は，広大な沖積低地が広がり，その中に点在する標高 10 ～ 13 mほどの低台地上に遺跡が確認されている。当遺跡は，現在の利根川が流れる低地に面した標高 10 mほどの低台地上に位置している。

遺跡周辺の土地利用状況は主に耕作地と宅地であり，遺跡の現況は宅地，山林及び地蔵堂跡であった。

第2節　歴　史　的　環　境

ここでは，釈迦新田遺跡が所在する五霞町域周辺の遺跡[2)]を中心に概要を述べる。

旧石器時代は，土塔貝塚（江川貝塚）〈18〉で石器集中地点が確認され，ナイフ形石器などが確認されている[3)]。現在の利根川以北では，羽黒遺跡〈65〉や日下部遺跡〈67〉で細石刃核や剥片が確認されている[4)]。

縄文時代の五霞町周辺は，縄文海進により南から奥東京湾が，東から古鬼怒湾が奥深く浸入して，当時の海域に半島状に延びる猿島台地（五霞台地）の先端部に位置している。町内では，台地縁辺部に多くの遺跡や貝塚が分布している[5)]。

これまでの調査により，寺山遺跡〈51〉，宿北遺跡〈58〉で早期の土器を伴う土坑が確認されている[6)]。海進が最も進んだ前期は，遺跡数が多くなる時期で，居住に適した環境であったと想定される。当期の遺跡は，町域の東側に遺跡の集中が見られ，山王山貝塚〈16〉，土塔貝塚（江川貝塚）〈18〉，山王裏Ｂ遺跡[7)]などが確認されている。土塔貝塚（江川貝塚）で確認された黒浜・諸磯ａ式期の地点貝塚は鹹水種によって構成され，奥東京湾沿岸地域であったと考えられる[8)]。その他に，坂間遺跡〈34〉，石畑遺跡〈40〉[9)]，宿東遺跡〈59〉[10)]などが確認されている。中期は，町域の北部に遺跡が多く立地する傾向が見られる。これは，海退により，干潟域が広がったために，居住域が移動したことに伴うと考えられている。本遺跡のほかに，榎戸遺跡〈２〉，小手指貝塚〈42〉，上原遺跡〈47〉[11)]などが確認されている。後期には，海退が進み，周辺海域は汽水域に変化したことが，冬木Ａ貝塚〈22〉[12)]や土塔貝塚（江川貝塚）[13)]の調査から判明している。遺跡の立地も海岸線を追うように，南側に移動し，石畑遺跡[14)]や土塔貝塚（江川貝塚）など前期の遺跡と同じ地域に多く見ら

れるようになる。晩期に入ると，冬木B貝塚〈21〉では，汽水種とともに淡水種も確認されており[15]，さらに海岸線は後退し，河川の下流域の三角州が出現する地形に変化し，淡水化していったと考えられる。

古墳時代の遺跡は，同所新田遺跡〈13〉で前期の方形周溝墓１基[16]，寺山遺跡で中期の竪穴建物跡５棟や後期の古墳１基，瀬沼遺跡で後期の竪穴建物跡１棟[17]を確認している[18]。また，元栗橋地区の三島神社古墳〈28〉，痕泉塚古墳〈35〉と，川妻・小手指地区の伊勢塚古墳〈46〉，上原古墳〈48〉，穴薬師古墳〈54〉の二つの大きな古墳の分布のまとまりが見られる[19]。

中世に入り，五霞町を含めた古利根川，太日川流域には，下河辺荘が成立する。現在の古河市から越谷市北部まで南北に長い領域を含む下河辺荘は，野方・河辺・新方の三地域に区分されていたことが知られ，当町域はこのうちの河辺に属していた。領主として，当初は秀郷流小山氏の庶流下河辺氏が，宝治合戦（1247 年）以降には北条氏一族が支配していた。室町時代に入ると，鎌倉府の御料所の一つとして支配される[20]。足利成氏が古河に移座すると，鎌倉から奥州へ延びる奥大道が通過し，古利根川・常陸川の水上交通の要所でもあるこの地域を治める重要性は高まるようになる。五霞町には野田氏の居城である城山城跡（栗橋城跡）〈30〉，古河市には簗田氏一族の居城である水海城跡〈70〉，千葉県野田市には簗田氏嫡流家の居城である関宿城跡，埼玉県幸手市には一色氏の居城と考えられる陣屋（幸手市№３遺跡）など，古河公方の重臣による城館が設けられたことが知られている。また，町内で発掘調査が行われた当期の遺跡としては，石畑遺跡で方形竪穴遺構 14 基などが[21]，新田遺跡〈15〉で堀跡１条や方形竪穴遺構８基，地下式坑３基が[22]，瀬沼遺跡で墓坑 11 基や火葬施設 41 基が[23]，桜井前遺跡で火葬施設４基や方形竪穴遺構９基，地下式坑４基などが[24]それぞれ確認され，中世の集落や墓域が明らかになっている。また，羽黒遺跡では河川工事の工事分担を示した表示札と考えられる木簡が出土している[25]。

江戸時代初頭，「利根川東遷」と呼ばれる大規模な河川改修工事の一環で元和７年（1621 年）から三度にわたる赤堀川開削により，奥州から鬼怒川を下り，さらに利根川や江戸川を下って江戸へと至る輸送ルートが成立した。経由地としての役割を担うようになる対岸の境町に位置する境河岸は，正保期（1644 ～ 1647 年）に関宿城の城下町として機能するようになった[26]。一方，五霞町周辺では，洪水被害が頻発するようになった[27]。町内の当期の遺跡として，新田遺跡で水塚を配置した屋敷跡が，上原遺跡で輪宝墨書土器が出土した掘込地業遺構などが，殿山塚〈６〉で塚が調査されている[28]。江戸時代後期では，同所新田遺跡において製鉄関連遺構が確認され，製鉄もしくは鉄製品の再加工を行っていた工人集団の存在が推測される[29]。さらに，瀬沼遺跡からは江戸時代後期の船着場が確認され[30]，水上交通が日常生活や経済活動の中で重要な位置をしめていたことが推測される。

※　文中の〈 〉内の番号は，第１図及び表１の当該番号と同じである。なお，本章は，既刊の『茨城県教育財団文化財調査報告』第 352 集をもとに，改編したものである。

註

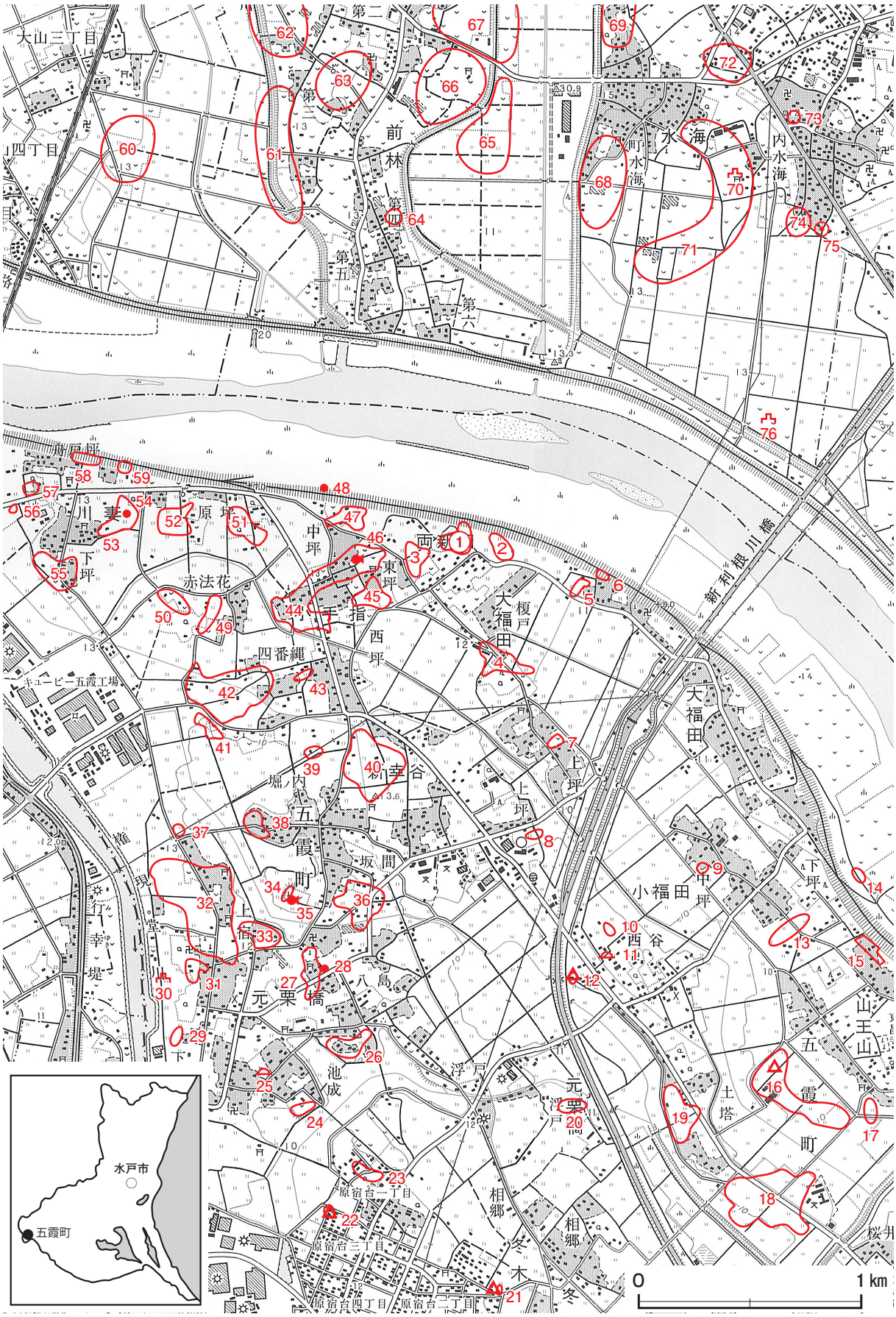
１）成島一也「石畑遺跡　12 県単道改第 12 － 03 － 261 － 0 － 052 号埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 192 集　2002 年３月

２）茨城県教育庁文化課編『茨城県遺跡地図（地名編・地図編）』茨城県教育委員会　2001 年３月

３）須藤正美「土塔貝塚　瀬沼遺跡　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 289 集　2008 年３月

４）総和町史編さん委員会『総和町史　通史編　原始・古代・中世』 2005 年７月

５）五霞町史編さん委員会『町史　五霞の生活史　水と五霞』 2010 年３月
６）近江屋成陽「宿北遺跡　宿東遺跡　寺山遺跡　首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 383 集　2014 年３月
７）佐々木守・小林正紀「山王裏Ｂ遺跡　町道 55 号線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書」五霞町教育委員会　2003 年９月
８）註３に同じ
９）ａ　瓦吹堅・橋本勉・藤原均「石畑遺跡－Ｉ地区発掘調査報告－」茨城県猿島郡五霞村教育委員会　1977 年３月
ｂ　註１に同じ
10）註６に同じ
11）佐藤一也「新田遺跡　上原遺跡　殿山塚　首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 395 集　2015 年３月
12）高村勇　根本康弘「冬木地区土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査報告書　冬木Ａ貝塚　冬木Ｂ貝塚」『茨城県教育財団文化財調査報告』 第Ⅸ集　1981 年３月
13）註３に同じ
14）註９に同じ
15）註 12 に同じ
16）桑村裕「同所新田遺跡　清水遺跡　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 290 集　2008 年３月
17）註３に同じ
18）註６に同じ
19）五霞町史編さん委員会『町史　五霞の生活史　地誌』 2013 年３月
20）註５に同じ
21）註９に同じ
22）註 11 に同じ
23）ａ　註３に同じ
ｂ　本橋弘巳「同所新田遺跡２　瀬沼遺跡２　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 312 集　2009 年３月
24）桑村裕「桜井前遺跡　一般国道 468 号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 288 集　2008 年３月
25）駒澤悦郎「羽黒遺跡　一級河川女沼川河川改修工事事業地内埋蔵文化財調査報告書１」『茨城県教育財団文化財調査報告』第 202 集　2003 年３月
26）ａ　註５に同じ
ｂ　境町史編さん委員会『下総　境の生活史　図説・境の歴史』 2005 年３月
27）註５に同じ
28）註 11 に同じ
29）ａ　註 16 に同じ
ｂ　註 23 ｂに同じ
30）註３に同じ

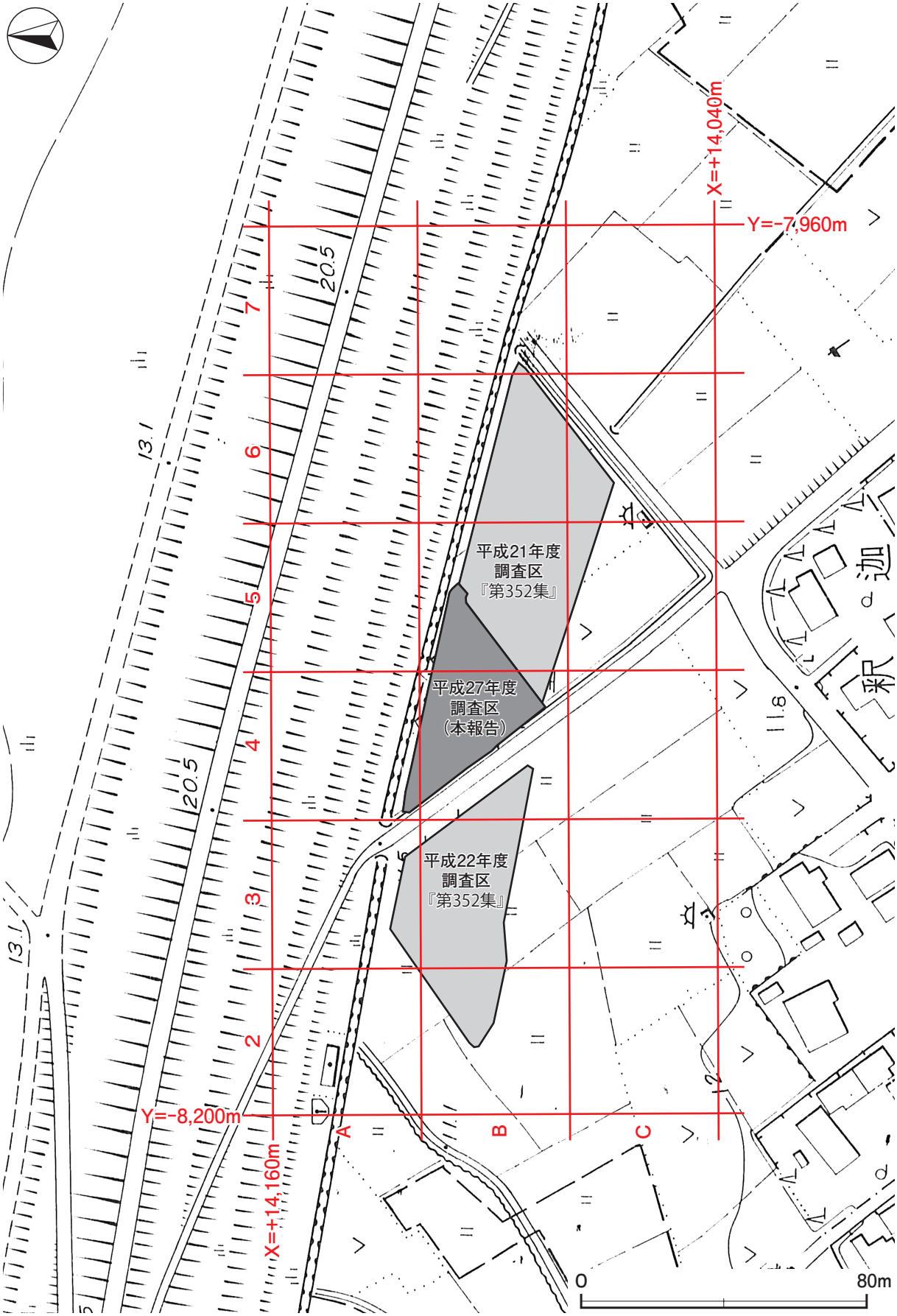


第１図　釈迦新田遺跡周辺遺跡分布図（国土地理院 25,000 分の１「境」・「鴻巣」）

表１　釈迦新田遺跡周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
①	釈迦新田遺跡		○				○	
2	榎戸遺跡		○					
3	元宿遺跡		○			○		
4	稲荷原遺跡		○					
5	殿山遺跡		○		○			
6	殿山塚							○
7	東中村遺跡		○					
8	福田遺跡		○					
9	西上手遺跡							○
10	八幡西遺跡		○					
11	土塔塚遺跡						○	
12	診療所前貝塚		○					
13	同所新田遺跡		○		○	○	○	
14	原山遺跡		○					
15	新田遺跡		○				○	
16	山王山貝塚		○					
17	西新畑遺跡		○					
18	土塔貝塚(江川貝塚)	○	○			○		
19	土塔遺跡		○					
20	浮戸遺跡		○					
21	冬木B貝塚		○					
22	冬木A貝塚		○					
23	丸池台遺跡		○					
24	池成遺跡		○			○		
25	池成塚		○		○		○	
26	田端遺跡					○	○	
27	三島神社遺跡		○		○		○	
28	三島神社古墳				○			
29	仲町遺跡				○	○		
30	城山城跡(栗橋城跡)						○	
31	城山遺跡					○		
32	上船戸遺跡		○		○	○	○	
33	切通遺跡		○		○			
34	坂間遺跡		○		○	○		
35	痕泉塚古墳				○			
36	橋向遺跡		○			○	○	
37	古樋遺跡		○		○	○	○	
38	堀の内遺跡						○	

番号	遺跡名	時代						
		旧石器	縄文	弥生	古墳	奈良・平安	鎌倉・室町	江戸
39	狢塚遺跡		○					
40	石畑遺跡		○				○	○
41	内肥土遺跡		○					
42	小手指貝塚		○					
43	小手指下宿		○		○			
44	台遺跡		○		○	○	○	
45	小手指上宿		○			○		
46	伊勢塚古墳				○			
47	上原遺跡		○					○
48	上原古墳				○			
49	赤法花遺跡		○					
50	新久遺跡		○					
51	寺山遺跡		○		○			○
52	大崎遺跡		○					○
53	大崎穴薬師遺跡		○					○
54	穴薬師古墳				○			
55	堤外遺跡		○		○			○
56	沼ノ台遺跡					○		
57	墓化遺跡							○
58	宿北遺跡		○				○	○
59	宿東遺跡		○				○	○
60	宮前遺跡		○		○			
61	小台山遺跡		○	○	○	○		
62	磯ノ井遺跡		○		○	○		
63	大道北遺跡				○	○		
64	台古墳群				○			
65	羽黒遺跡	○	○	○	○	○	○	○
66	笹山遺跡		○		○	○		
67	日下部遺跡	○	○	○	○	○	○	
68	三島前遺跡			○	○	○		
69	住吉遺跡		○		○	○		
70	水海城跡					○	○	
71	神明西遺跡				○	○		
72	白山台遺跡				○	○		
73	道場女遺跡		○		○	○		
74	表ノ前遺跡		○		○	○		
75	表ノ前経塚							○
76	伝水海城跡						○	



第２図　釈迦新田遺跡調査区設定図（五霞町都市計画図 2,500 分の１）

第3章　調 査 の 成 果

第1節 調 査 の 概 要

釈迦新田遺跡は，五霞町の北部に位置し，利根川右岸の標高10ｍほどの低台地上に立地している。平成21･22年度の調査では，縄文時代の竪穴建物跡２棟，中世の方形竪穴遺構や火葬施設など墓域に関連する遺構，近世の堀跡などが調査されている。今回の調査区は，平成21年度調査区と平成22年度調査区の間で，調査面積は1,351㎡である。調査前の現況は，宅地・森林・地蔵堂跡であった。

調査の結果，掘立柱建物跡３棟（時期不明），井戸跡１基（時期不明），火葬施設１基（中世），土坑76基（縄文時代８・中世30・近世１・時期不明37），溝跡７条（近世４・時期不明３），柱穴列４条（時期不明），ピット群１か所（時期不明），遺物包含層１か所（縄文時代）を確認した。

遺物は，遺物収納コンテナ（60 × 40 × 20㎝）に７箱出土している。主な遺物は，縄文土器（深鉢），土師質土器（小皿），陶器（皿・卸皿・天目茶碗・擂鉢・瓶ヵ），瓦質土器（焙烙・火鉢），石器（鏃・石皿・磨石・凹石・砥石・剥片），土製品（円筒埴輪・羽口）などである。

第2節 基 本 層 序

調査区東北端のＢ５c６区北壁にテストピットを設定し，深さ1.3ｍまで掘り下げて基本土層の観察を行った。以下，観察結果から層序を説明する。

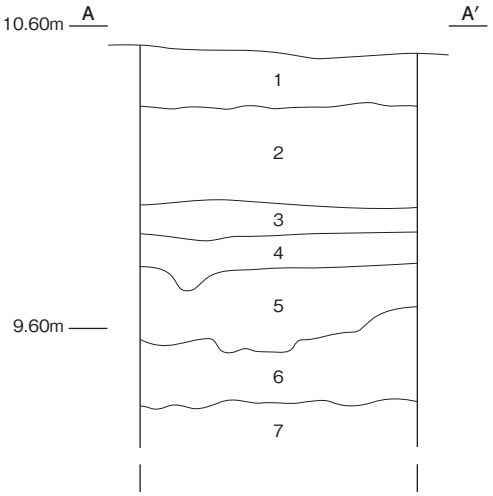
第１層から第３層までは現代の造成土である。

第１層は，灰褐色を呈し，粘性は弱く，締まりは強い。層厚は15 ～ 20㎝である。

第２層は，灰褐色を呈し，粘性は普通で，締まりは強い。層厚は30 ～ 35㎝である。

第３層は，褐灰色を呈し，灰褐色の粘土ブロックを少量含み，粘性・締まりとも普通である。層厚は８～13㎝である。

第４層は，黒褐色を呈する旧表土である。前回調査の第２層に相当し，シルト粒子を少量含み，粘性は普通で，締まりは弱い。層厚は10 ～ 17㎝である。



第３図　基本土層図

第５層は，暗褐色を呈したシルト粒子を多量に含んだ暗褐色の層で，粘性，締まりとも普通である。前回調査の第３層に相当すると見られ，今回調査では，層中から縄文時代中期の土器や石鏃などが出土し，遺物包含層として報告している。層厚は15 ～ 28㎝である。

第６層は，明褐色のシルト質層である。粘性は極めて強く，締まりは普通である。層厚は16 ～ 31cm である。

第７層は，褐色の粘土層である。粘性・締まりとも極めて強い。層厚は18㎝まで確認したが，それ以下は未掘のため不明である。

遺構は第５層の上面で確認した。

第３節 遺 構 と 遺 物

１　縄文時代の遺構と遺物

当時代の遺構は，土坑８基，遺物包含層１か所を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

⑴　土坑

今回の調査で，出土遺物や重複関係から，縄文時代と見られる土坑８基を確認した。以下，遺構の形状や特色のある遺物が出土している５基について，本文と実測図で解説する。その他の土坑については，実測図と土層解説，一覧表で掲載する。

第 281 号土坑（第４・５図　PL １）

位置　調査区中央部のＢ５b1 区，標高 9.7 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込み，第 26 号溝に掘り込まれている。

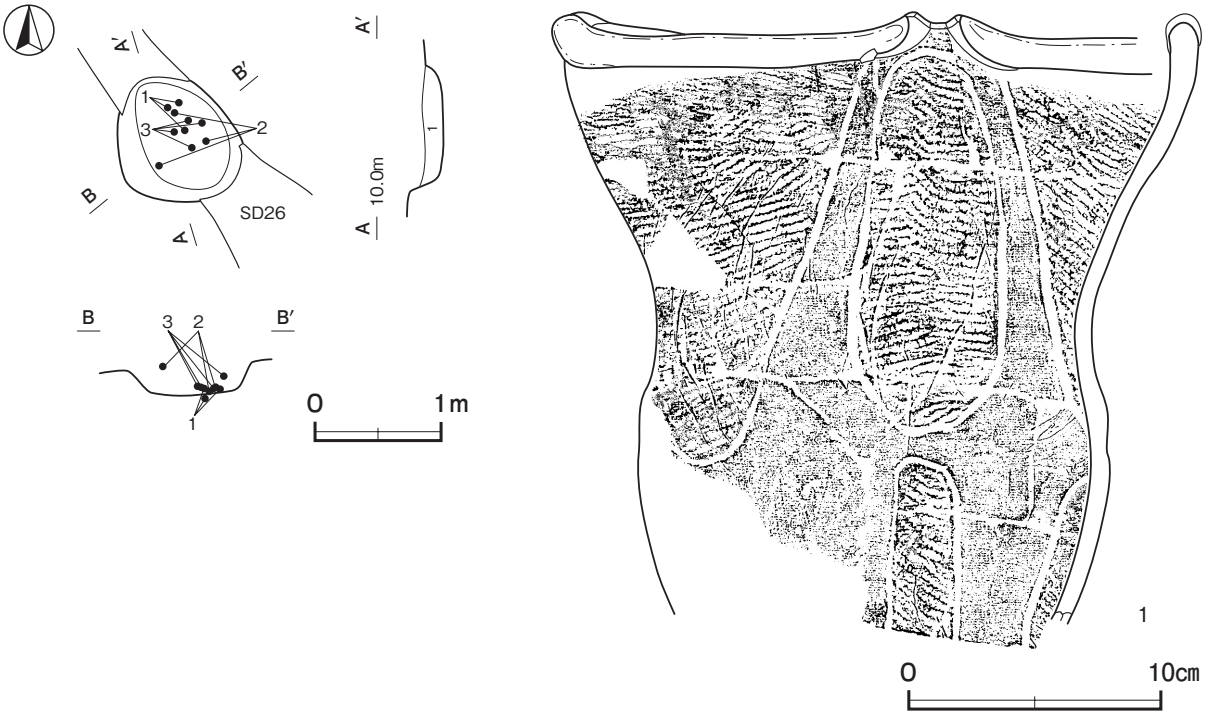
規模と形状　長径 1.11 m，短径 0.95 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 38°－Ｗである。深さは 24cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　単一層である。多量の遺物とともに，埋め戻されている。

土層解説
１　黒　褐　色　シルト粒子多量

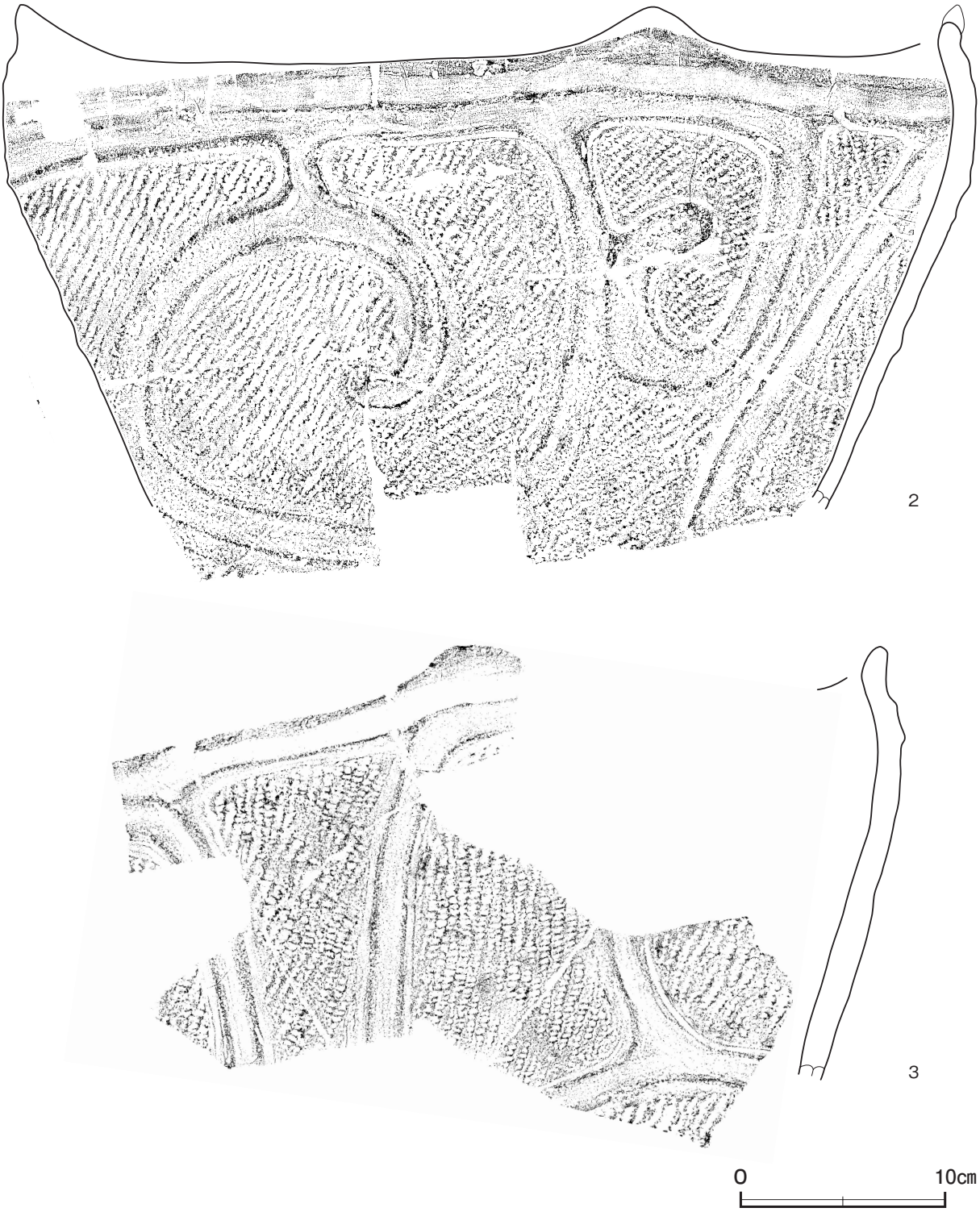
遺物出土状況　縄文土器 86 点(深鉢)が出土している。１～３は，覆土上層から底面で出土した破片がそれぞれ接合したものである。また，１・３は，第 322 号土坑と第１号遺物包含層から出土した遺物と接合している。

所見　時期は，出土土器から中期末葉に比定できる。覆土中から多量の遺物が出土し，接合関係が認められた



第４図　第 281 号土坑・出土遺物実測図

ことから，廃棄土坑として使われたと考えられる。



第５図　第 281 号土坑出土遺物実測図

第 281 号土坑出土遺物観察表（第４・５図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
1	縄文土器	深鉢	24.5	(24.2)	－	長石・石英	橙	普通	沈線によるＨ字状文→単節縄文 RL を充填→沈線内を磨消 口縁部隆起線による無文帯	覆土中層～底面	中期末葉　加曾利ＥⅣ式期　PL 4
2	縄文土器	深鉢	[50.0]	(25.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	隆線による渦巻文→単節縄文 RL を充填→隆線内を磨消 口縁部隆起線による無文帯	覆土上層～底面	中期末葉　加曾利ＥⅣ式期　PL 4
3	縄文土器	深鉢	－	(21.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線を伴う隆線による区画→単節縄文 RL を充填→隆線内を磨消　口縁部隆起線による無文帯	覆土中層～下層	中期末葉　加曾利ＥⅣ式期　PL 4

第 313 号土坑（第６図　PL １）

位置　調査区中央部のＢ 4b0 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

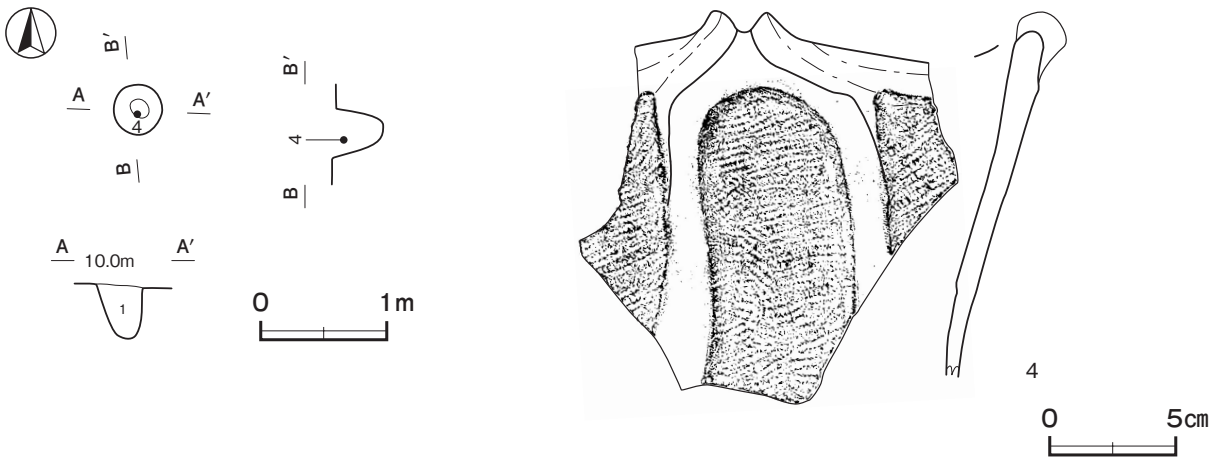
規模と形状　長径 0.39 m，短径 0.37 mの円形である。深さは 20㎝で，底面は皿状を呈している。壁はほぼ直立している。

覆土　単一層である。シルトブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

遺物出土状況　縄文土器１点（深鉢）が出土している。４は，覆土中層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期末葉に比定できる。



第６図　第 313 号土坑・出土遺物実測図

第 313 号土坑出土遺物観察表（第６図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
4	縄文土器	深鉢	－	(14.7)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい褐	普通	隆線による逆Ｕ字状文→単節縄文 RL を充填→隆線内を磨消　口縁部隆帯による無文帯	覆土中層	加曾利ＥⅣ式期中期末葉　PL 4

第 314 号土坑（第７図）

位置　調査区中央部のＢ５b1 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

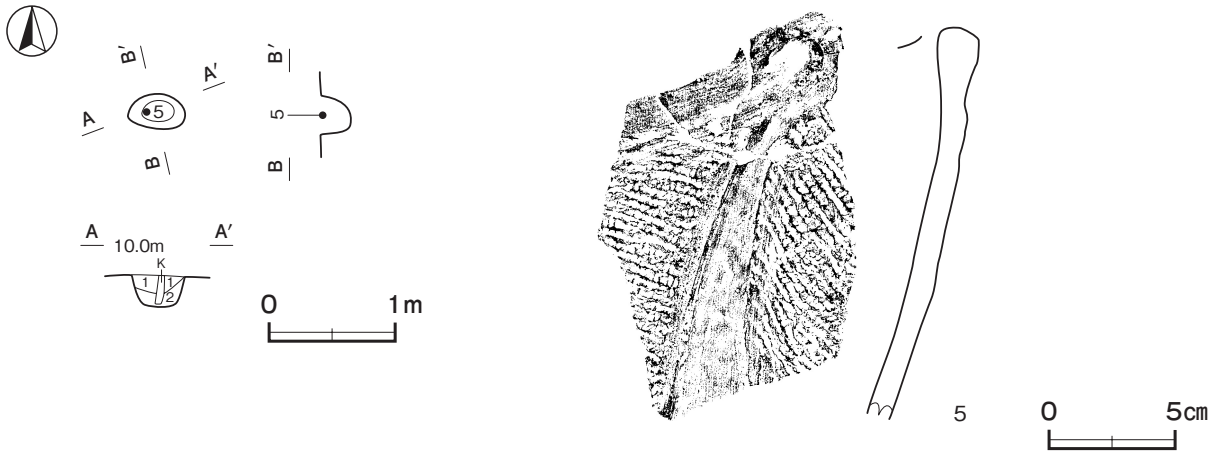
規模と形状　長径 0.45 m，短径 0.27 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 85°－Ｗである。深さは 22㎝で，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　２層に分層できる。シルトブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　シルト小ブロック微量
2　暗　褐　色　シルト粒子多量

遺物出土状況　縄文土器４点（深鉢）が出土している。５は，覆土上層から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期末葉に比定できる。



第７図　第 314 号土坑・出土遺物実測図

第 314 号土坑出土遺物観察表（第７図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
5	縄文土器	深鉢	－	(15.6)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆線による区画→単節縄文 LR を充填→隆線内磨消 口縁部隆線による無文帯	覆土上層	加曾利ＥⅣ式期 中期末葉　PL 4

第 321 号土坑（第８図）

位置　調査区東部のＢ５c2 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 0.94 m，短径 0.79 mの楕円形で，長径方向はＮ－ 26°－ Ｅである。深さは 48cmで，底面は平坦である。壁は北壁と西壁がほぼ直立しており，他は外傾している。

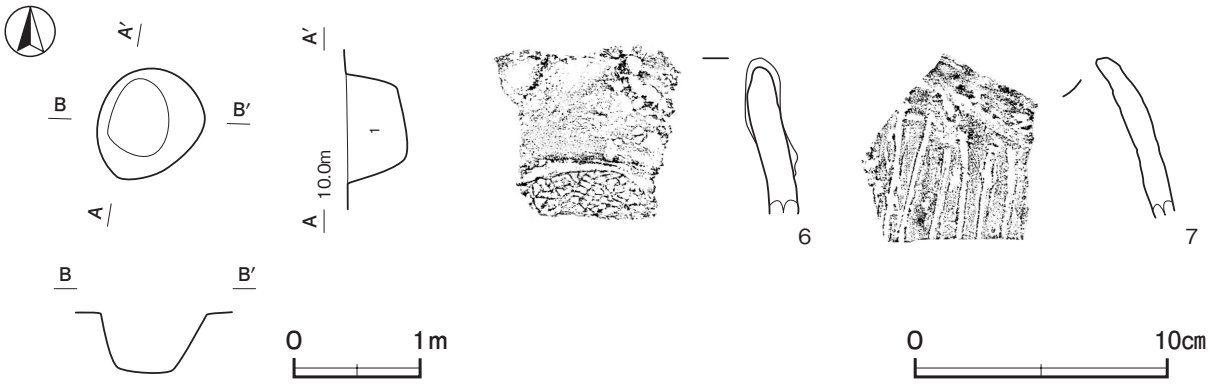
覆土　単一層である。シルトブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

1　黒　褐　色　シルトブロック少量

遺物出土状況　縄文土器 17 点（深鉢），自然礫１点が覆土中から出土している。

所見　時期は，出土土器から中期末葉に比定できる。



第８図　第 321 号土坑・出土遺物実測図

第 321 号土坑出土遺物観察表（第８図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
6	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	灰黄褐	普通	口縁部隆線による区画→単節縄文 RL を充填→隆線内を磨消　口縁部隆帯による無文帯	覆土中	中期末葉 PL 4
7	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英	橙	普通	縦位の条線文　口縁部無文帯	覆土中	

第 322 号土坑（第９図）

位置　調査区東部のＢ 4b2 区，標高 9.8 ｍほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　長径 1.47 ｍ，短径 0.99 ｍの楕円形で，長径方向はＮ－ 85゜－Ｗである。深さは 41㎝で，底面は平坦である。壁は外傾している。

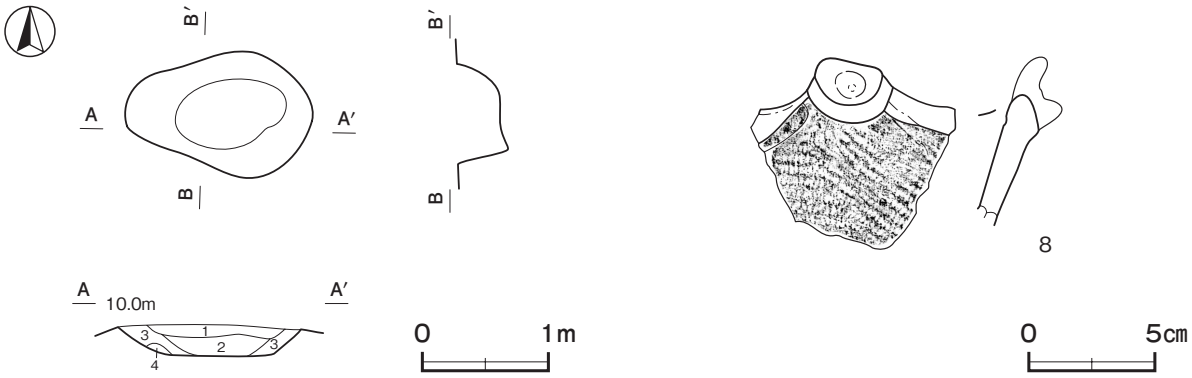
覆土　４層に分層できる。シルトブロックが含まれ，不規則な堆積状況から，埋め戻されている。

土層解説

１　黒　褐　色　シルトブロック中量
２　黒　褐　色　シルトブロック少量
３　黒　褐　色　シルト粒子中量
４　暗　褐　色　シルト粒子中量

遺物出土状況　縄文土器 44 点（深鉢），剥片１点が出土している。８は，覆土中から出土している。また，出土した破片が，第 281 号土坑の１・３と接合している。

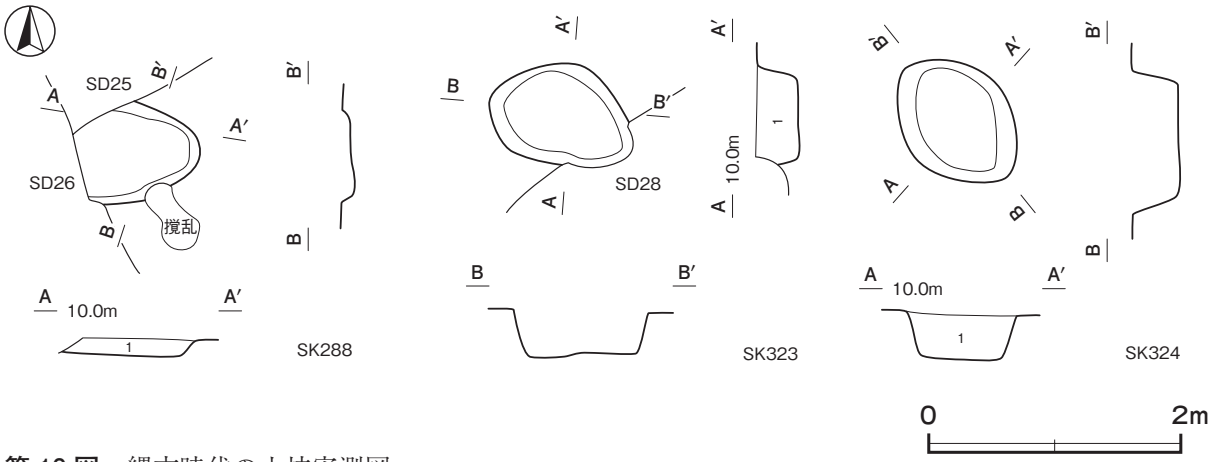
所見　時期は，出土土器から中期末葉と考えられる。



第９図　第 322 号土坑・出土遺物実測図

第 322 号土坑出土遺物観察表（第９図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
8	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	単節縄文 LR を斜位・縦位に施文→口縁部隆線による区画　波頭部に隆帯による円弧文を貼付	覆土中	中期末葉 PL 4



第 10 図　縄文時代の土坑実測図

第 288 号土坑土層解説

１　黒　褐　色　シルト粒子多量

第 323 号土坑土層解説

１　黒　褐　色　（シルト質）

第 324 号土坑土層解説

１　黒　褐　色　（シルト質）

表２　縄文時代土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
281	Ｂ５b1	N－38°－W	楕円形	1.11 × 0.95	24	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡→SD26
288	Ｂ５b1	N－88°－W	［楕円形］	(1.00) × 0.80	10	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡→SD25・26
313	Ｂ４b0	－	円形	0.39 × 0.37	20	ほぼ直立	皿状	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡
314	Ｂ５b1	N－85°－W	楕円形	0.45 × 0.27	22	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡
321	Ｂ５c2	N－26°－E	楕円形	0.94 × 0.79	48	ほぼ直立外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），礫	HG 1→本跡
322	Ｂ５b2	N－85°－W	楕円形	1.47 × 0.99	41	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），石器（剥片）	HG 1→本跡
323	Ｂ５c3	N－69°－W	楕円形	1.23 × 0.81	34	緩斜	平坦	自然		HG 1→本跡→SD28
324	Ｂ４c0	N－43°－W	楕円形	1.18 × 0.87	38	緩斜	平坦	自然		HG 1→本跡

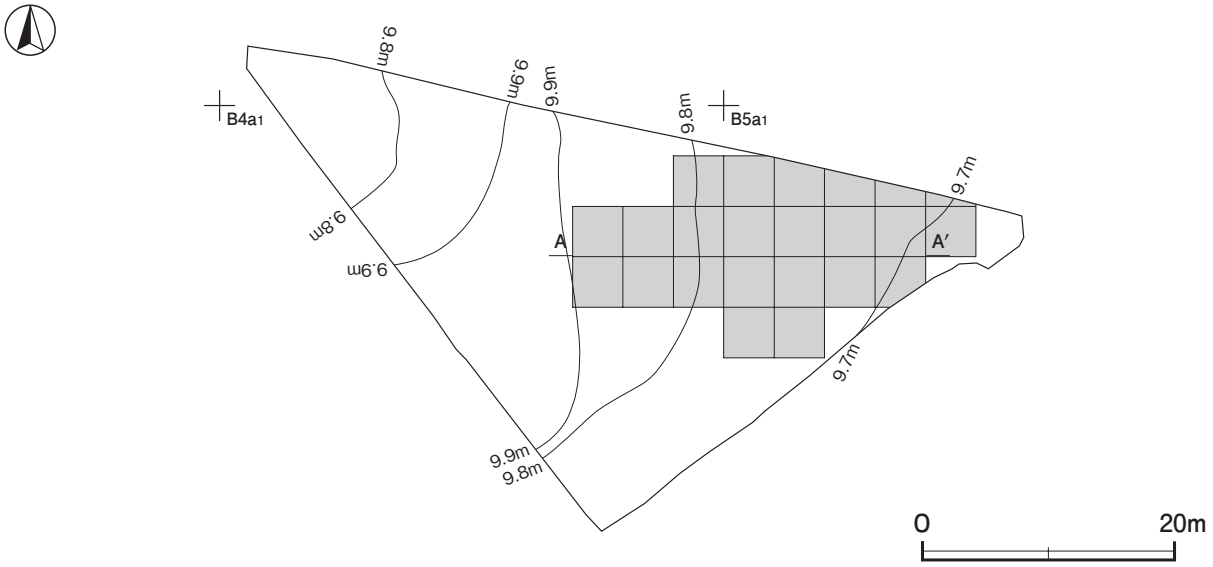
(2)　遺物包含層

第１号遺物包含層（第 11 ～ 15 図　PL ２）

位置　調査区中央部から東部にかけてのＢ４b8 ～Ｂ５e5 区，東側に向かって緩やかに傾斜する標高 9.9 ～ 9.6 mほどの低台地緩斜面に位置している。

確認状況　調査区中央部から東部にかけての確認面から，縄文土器が多く出土したために，４m四方のグリッド毎に掘り下げを行った。遺物は，器形がわかるものや比較的大きな破片，石器について，座標値に記録を行い，それ以外の破片についてはグリッド毎に一括で取り上げた。

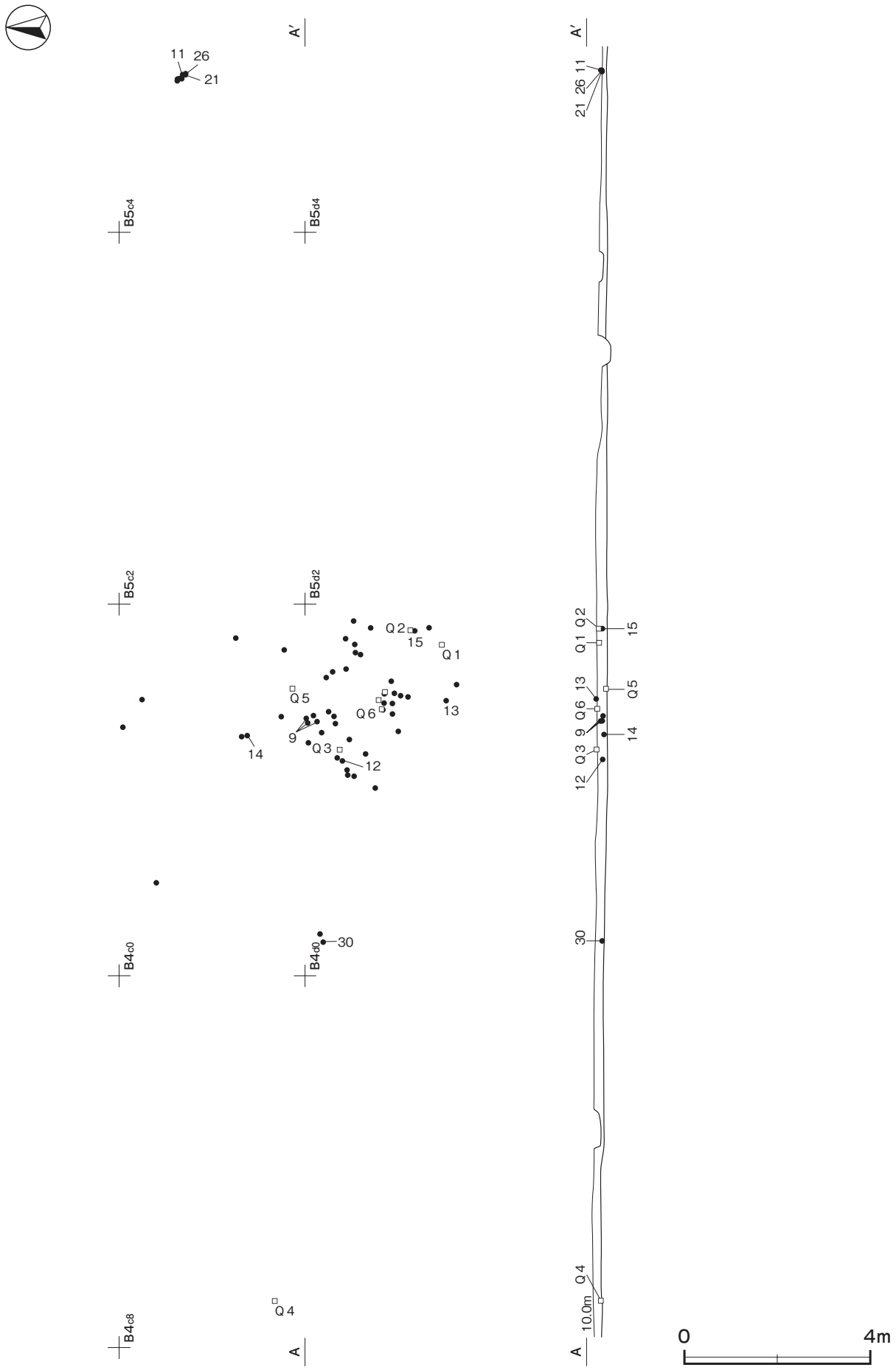
調査範囲　調査を行ったグリッドは，Ｂ４b0 ～Ｂ５b5，Ｂ４c8 ～Ｂ５c5，Ｂ４d8 ～Ｂ５d4，Ｂ５e1・Ｂ５e2 で，面積は約 800㎡である。第 11 図に調査区設定図を掲載する。



第 11 図　第１号遺物包含層調査区設定図

重複関係　第２・３号掘立柱建物跡，第 265・268 ～ 270・272・273・276 ～ 279・281・283 ～ 285・287 ～ 290・313 ～ 316・318・321 ～ 324 号土坑，第 24 ～ 30 号溝，第１号柱穴列，第６号ピット群に掘り込まれている。

堆積状況　単一層である。基本層序第５層に対応する。土質はシルト質を示し，分層することができないこと



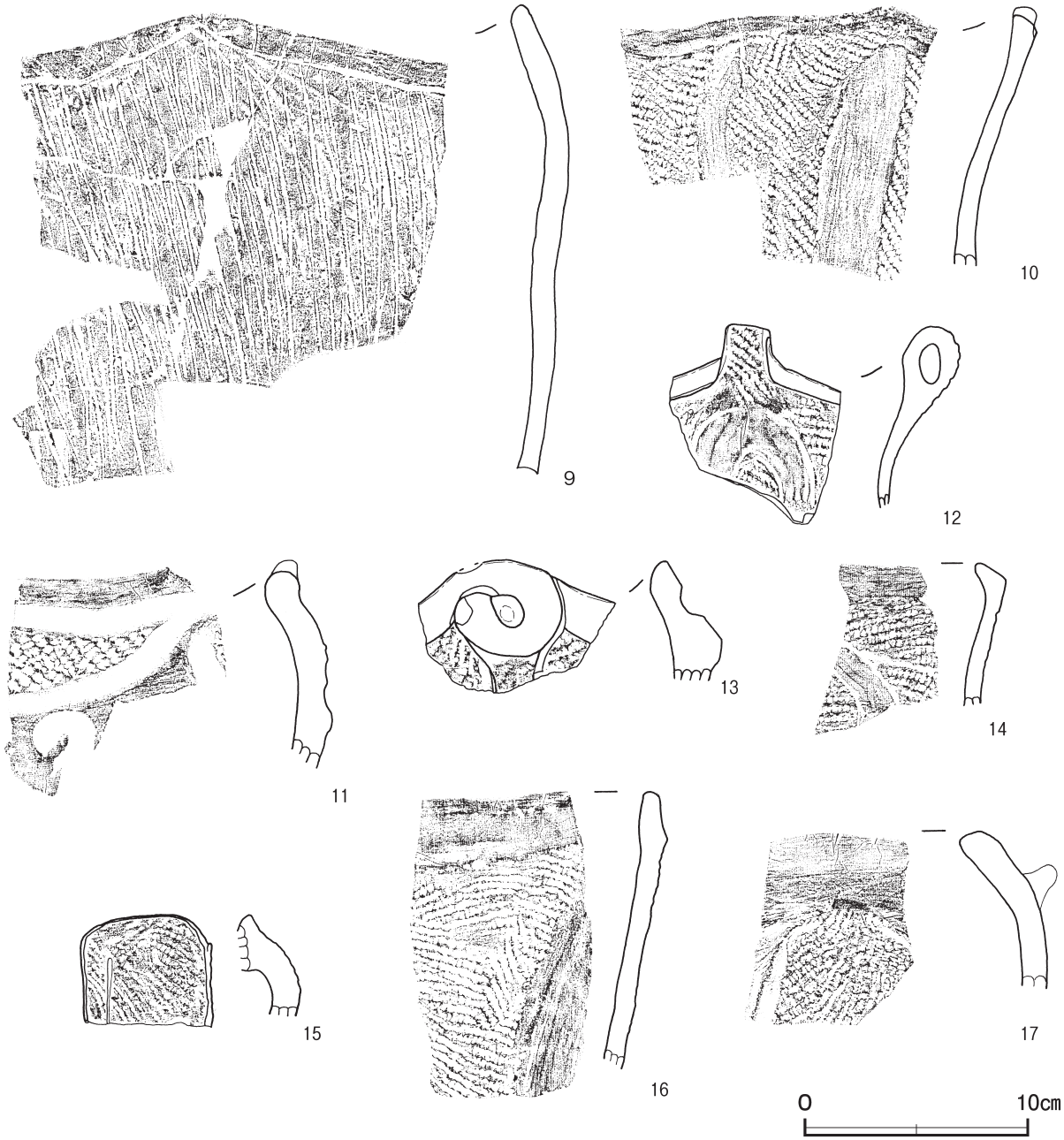
第 12 図　第 1 号遺物包含層実測図

から，短期間に遺物を含んだ土が流れ込んで形成されたと考えられる。

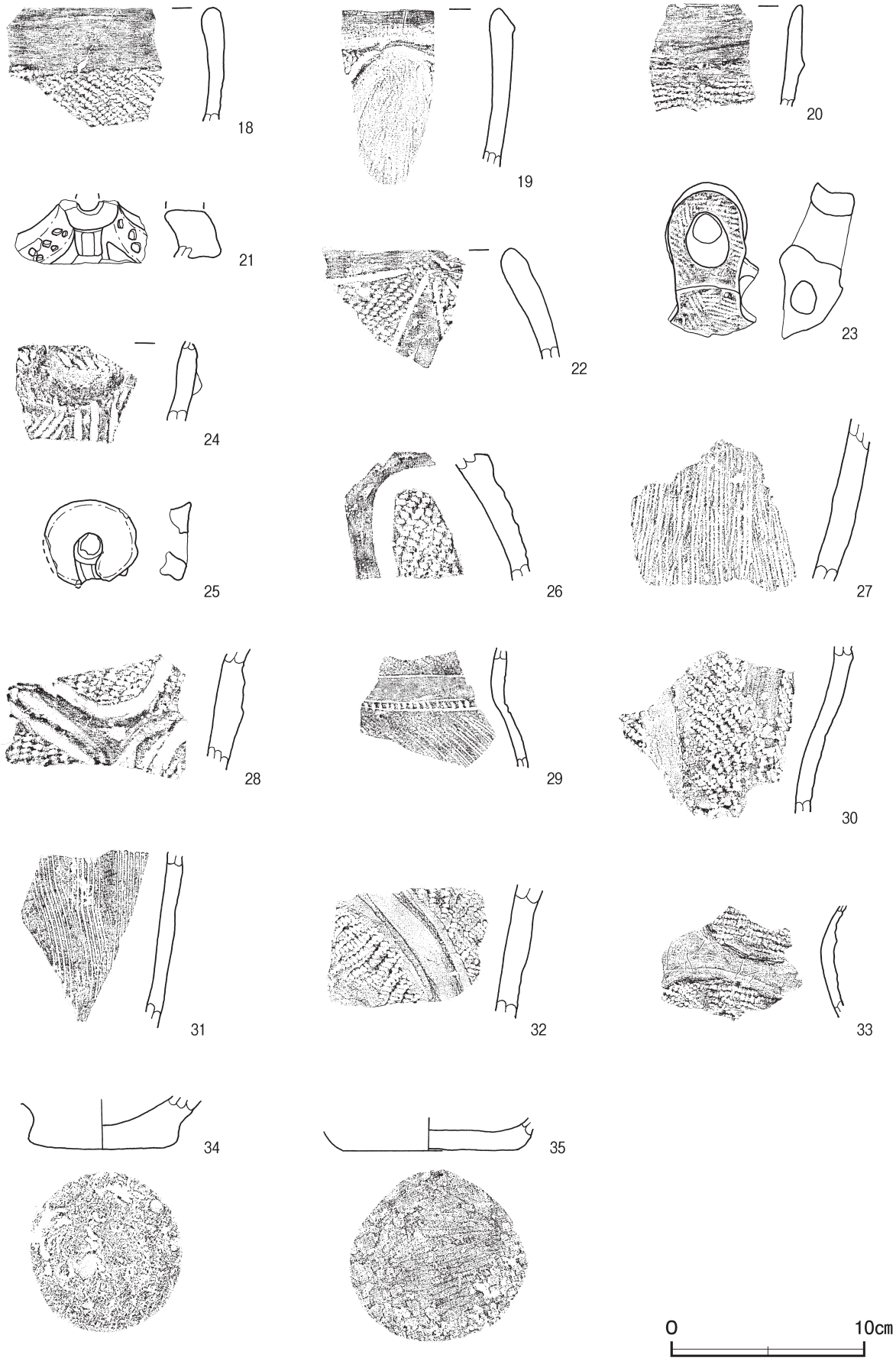
土層解説
1　暗　褐　色　明褐色シルトブロック中量

遺物出土状況　縄文土器862点（深鉢），土製品１点（粘土塊），石器12点（剥片８，鏃３，磨石１），自然礫５点が出土している。層位的な出土状況は確認できず，散在して出土しているが，Ｂ４c0区～Ｂ５d1区に比較的集中して確認された。

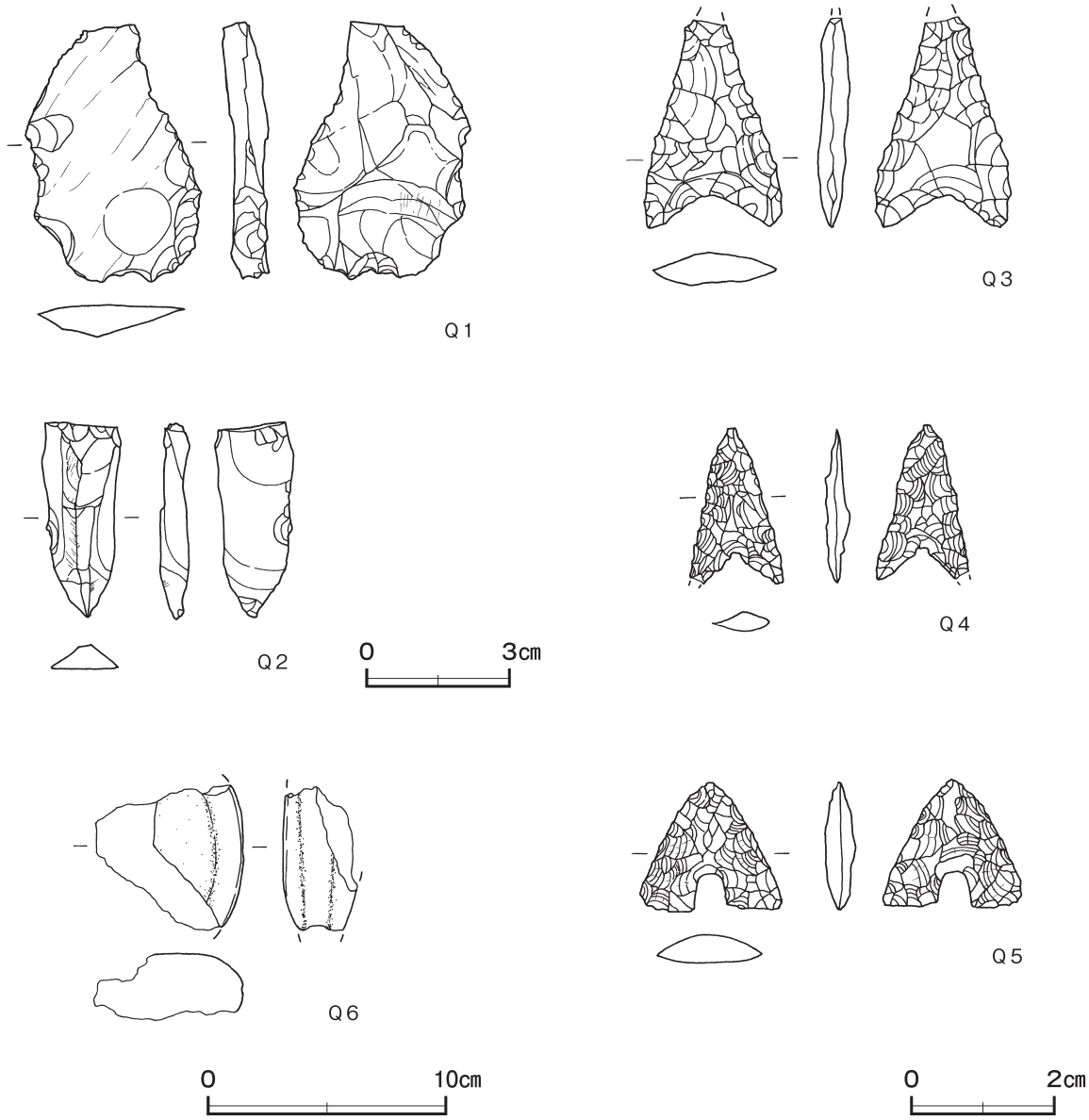
所見　出土土器は，後期に位置付けられる土器が少量出土しているが，多くは中期後半から末葉（加曾利ＥⅢ～Ⅳ式）に比定されることから，主な形成時期は中期末葉とみられる。堆積土はシルト質で，出土遺物の角や文様に摩耗が確認されるものもあることから，周辺の集落の遺物が，西傾斜の斜面に流れ込んで短期間に堆積したとみられる。



第13図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（１）



第 14 図　第１号遺物包含層出土遺物実測図（２）



第 15 図　第 1 号遺物包含層出土遺物実測図（3）

第 1 号遺物包含層出土遺物観察表（第 13 ～ 15 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
9	縄文土器	深鉢	－	(21.1)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	斜位の条線文→縦位の条線文　口縁部横位の沈線による区画	B 5 d1	PL 5
10	縄文土器	深鉢	－	(11.8)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文 LR →磨消による懸垂文　口縁部隆線による無文帯	B 5 b1	PL 5
11	縄文土器	深鉢	－	(9.4)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	太い沈線による区画→複節縄文 RLL を充填→沈線内を磨消　口縁部無文	B 4 c0	加曾利ＥⅢ式期 PL 5
12	縄文土器	深鉢	－	(8.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線による逆Ｕ字状文→単節縄文 LR を充填→把手部貼付→逆Ｕ字文内を磨消　口縁部隆線による無文帯	B 5 d1	中期末葉 PL 5
13	縄文土器	深鉢	－	(5.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	単節縄文 RL →渦巻状の突起貼付　口縁部隆線による区画	B 5 c1	中期末葉 PL 5
14	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	沈線による区画→単節 LR を充填→→沈線内を磨消	B 5 d1	中期末葉 PL 5
15	縄文土器	深鉢	－	(4.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	把手部　単節縄文 RL　側面磨き	B 5 b1	
16	縄文土器	深鉢	－	(12.5)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	隆線による懸垂文→単節縄文 RL を充填→懸垂文内を磨消　口縁部隆線による区画文　口縁部無文	B 5 e1	中期末葉 PL 5
17	縄文土器	深鉢	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	斜位の単節縄文 RL →縦位の単節縄文 RL →隆帯による区画　口縁部隆線による無文帯	B 5 e1	中期末葉 PL 5
18	縄文土器	深鉢	－	(6.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	単節縄文 RL　口縁部隆線による無文帯	B 5 d1	PL 5
19	縄文土器	深鉢	－	(8.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	隆線による懸垂文→複節縄文 LRL →懸垂文内磨消　口縁部隆線による無文帯	B 4 d0	中期末葉

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
20	縄文土器	深鉢	－	(5.3)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	黒褐	普通	単節縄文LR　口縁部隆線による無文帯	B 5 d1	
21	縄文土器	深鉢	－	(2.6)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	円状の突起貼付　隆帯による懸垂文　中央に縦位の沈線　口縁部隆帯による区画文　隆帯に２条の刺突文　口縁部無文帯	B 5 c4	称名寺式期後期初頭
22	縄文土器	深鉢	－	(5.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線による懸垂文→単節縄文LRを充填→懸垂文内を磨消　口縁部沈線による無文帯	B 5 e2	中期末葉 PL 5
23	縄文土器	把手	－	(8.2)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	把手部　無節縄文L　段による区画　側面ナデ　裏面下部剥離痕	B 5 b2	PL 5
24	縄文土器	深鉢	－	(4.0)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	斜位の条線文→縦位の条線文→口縁部斜位の刻み目→隆線による区画文	B 5 e2	中期後半
25	縄文土器	把手	－	(4.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	把手部　渦巻状の突起　裏面剥離痕	B 5 d1	中期末葉
26	縄文土器	深鉢	－	(6.6)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	太い沈線による区画→縦位の単節縄文LRを充填→沈線を磨消	B 5 c4	中期末葉
27	縄文土器	深鉢	－	(8.6)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	櫛歯状工具による条線文	B 5 c4	
28	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英	にぶい橙	普通	複節縄文LRL→沈線を伴う隆線によるＹ字状文→Ｙ字状文内を磨消	B 4 c8	中期末葉
29	縄文土器	深鉢	－	(6.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	斜位の条線文→横位の沈線による区画→沈線内を磨消　区画内下部に２条の沈線の区画内に斜位の刺突文	B 4 d8	加曽利B～曽谷式期 PL 5
30	縄文土器	深鉢	－	(8.6)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	隆線によるＵ字状文→縦位の単節縄文LRを充填→Ｕ字状文内を磨消	B 4 d0	中期末葉 PL 5
31	縄文土器	深鉢	－	(9.0)	－	長石・石英	灰褐	普通	櫛歯状工具による縦位の条線文	B 5 d1	
32	縄文土器	深鉢	－	(6.7)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	０段多条の縄文RL→沈線を伴う隆線による弧状文→弧状文内を磨消	B 5 d3	加曽利ＥⅢ式期
33	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	単節縄文LR→横位に隆線による区画→隆線内を磨消　内面磨き	B 5 e1	中期末葉～後期初頭 PL 5
34	縄文土器	深鉢	－	(2.8)	7.7	長石・石英・雲母・赤色粒子	橙	普通	底部外面ヘラ削り　指頭圧痕１か所　ナデ調整	B 5 b1	
35	縄文土器	深鉢	－	(1.6)	9.1	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	底部外面ヘラ削り	B 5 c1	

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　質	特　徴	出土位置	備　考
Q 1	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	5.4	3.8	0.9	14.89	チャート	片面縁刃部加工	B 5 d1	PL 6
Q 2	剥片	4.1	1.7	0.6	4.23	チャート	打面は単剥離面　裏面に同一方向からの剥離痕	B 5 d1	
Q 3	鏃	(3.0)	1.9	0.5	(1.98)	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　先端部破損	B 5 d1	PL 6
Q 4	鏃	2.2	1.3	0.4	0.64	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離　片側脚部破損	B 4 c8	PL 6
Q 5	鏃	1.8	2.0	0.4	1.10	チャート	凹基無茎鏃　両面押圧剥離	B 5 c1	PL 6
Q 6	磨石	(6.1)	(6.2)	(3.3)	(116.09)	安山岩	側縁部使用痕	B 5 d1	

2　中世の遺構と遺物

当時代の遺構は，火葬施設１基，土坑 30 基を確認した。以下，遺構及び遺物について記述する。

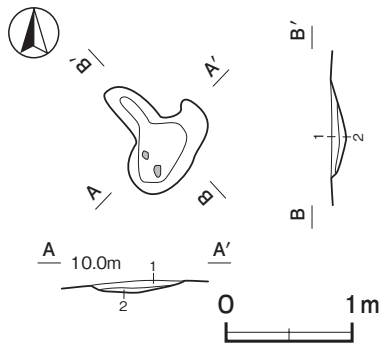
(1)　火葬施設

『当財団調査報告』第 352 集では，火葬土坑として4基が報告されているが，今回の報告では，火葬施設と名称を変更する。

第５号火葬施設（第 16 図）

位置　調査区中央部のＢ 4e0 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

規模と形状　平面形はＴ字形で，主軸方向はＮ－ 45°－Ｗである。通風溝は，長さ 0.89 m，上幅 0.26 m，下幅 0.08 mである。確認面からの深さは 41cmで，底面は皿状を呈し，燃焼部に向かって傾斜している。燃焼部は横幅 0.79 m，奥行 0.47 mの不整長方形で，主軸と直交している。確認面からの深さは 10cmで，底面は皿状を呈し，壁は緩やかに立ち上がっている。燃焼部の南西部から炭化材と骨片が確認できた。



第 16 図　第５号火葬施設実測図

覆土　２層に分層である。いずれも炭化粒子や骨粉が含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　　色　炭化粒子中量，シルトブロック・骨粉少量　　2　黒　褐　色　炭化粒子・シルト粒子中量，骨粉少量

遺物出土状況　燃焼部から炭化材，骨片及び骨粉が出土している。

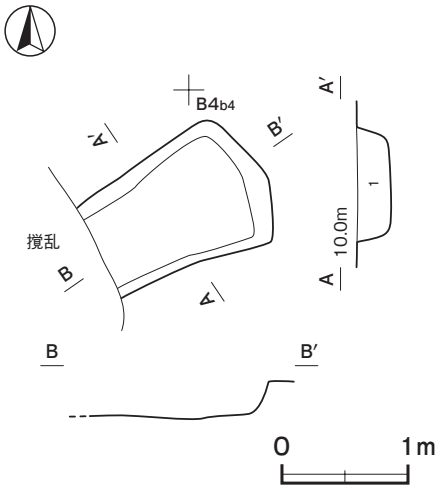
所見　炭化粒子，骨片及び骨粉が出土していることや，Ｔ字状の形態，及び調査区内に同時期の墓坑と見られる土坑が存在することから，葬送にかかわる火葬施設と考えられる。遺骸を火葬し，収骨したのちに埋め戻されている。時期は，周辺の遺構との関連から中世と考えられる。

(2)　土坑

今回の調査で，出土遺物，形状，重複関係から，中世と見られる土坑 30 基を確認した。以下，遺構の形状や遺物が特徴的な３基について本文と実測図で解説する。その他の土坑については，実測図と土層解説，一覧表で掲載する。

第 245 号土坑（第 17 図）

位置　調査区東部のＢ４b3 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。



第 17 図　第 245 号土坑実測図

規模と形状　西部が撹乱により壊されているため，長軸方向は 1.46 mしか確認できなかった。短軸方向は 0.90 mで，平面形は長方形と推定される。長軸方向はＮ－ 55 °－Ｅである。深さは 23㎝で，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　単一層である。シルトブロックを含んでいることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

遺物出土状況　土師質土器１点（小皿）のほか，縄文土器２点（深鉢）が出土している。土師質土器は細片のため，図示できなかった。

所見　形状や覆土の状況から墓坑の可能性がある。時期は，出土土器から中世と考えられる。

第 279 号土坑（第 18 図）

位置　調査区西部のＢ４c0 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

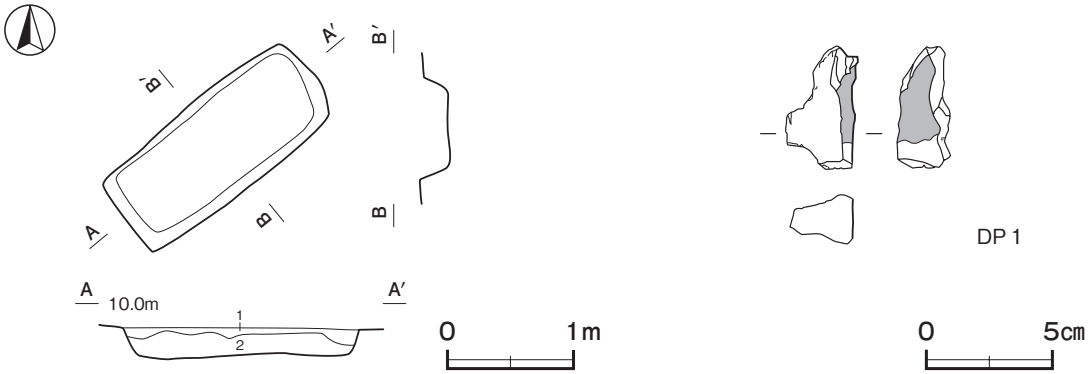
規模と形状　長軸 1.88 m，短軸 0.82 mの長方形で，長軸方向はＮ－ 51 °－Ｅである。深さは 23㎝で，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　２層に分層できる。シルトブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量　　2　黒　　色　シルトブロック中量

遺物出土状況　土製品１点（羽口）のほかに，縄文土器７点（深鉢）が出土している。

所見　形状や覆土の状況から，墓坑の可能性がある。時期は，周囲の遺構との関係から中世と考えられる。



第 18 図　第 279 号土坑・出土遺物実測図

第 279 号土坑出土遺物観察表（第 18 図）

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 1	羽口	(2.8)	(4.9)	(1.8)	(15.74)	粘土・スサ	にぶい橙	先端部片　先端部灰赤色に変色　火熱によって溶解しており，青灰色の溶着材が付着	覆土中	

第 283 号土坑（第 19 図）

位置　調査区西部のＢ４d9 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込み，第６号ピット群のＰ 98・Ｐ 99 に掘り込まれている。

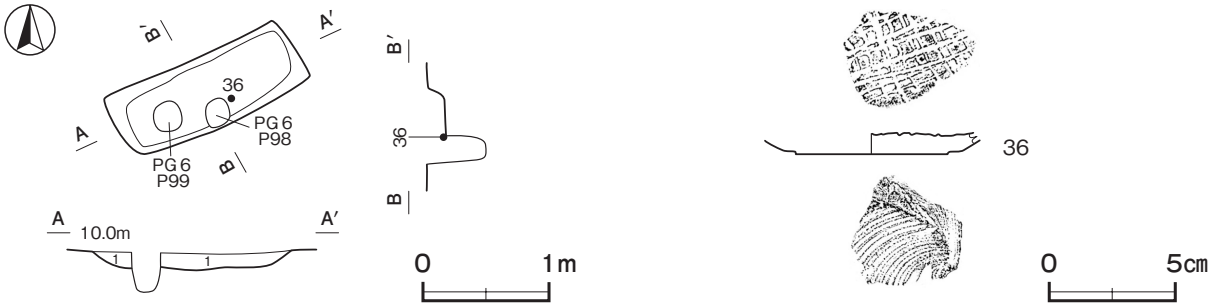
規模と形状　長軸 1.53 m，短軸 0.59 mの長方形で，長軸方向はＮ－ 67°－Ｅである。深さは 30cmで，底面は平坦である。壁は緩やかに立ち上がっている。

覆土　単一層である。シルトブロックを含んでいることから，埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック・灰褐色粘土ブロック少量

遺物出土状況　陶器１点（卸皿）のほか，縄文土器３点（深鉢）が出土している。36 は，底面から出土している。

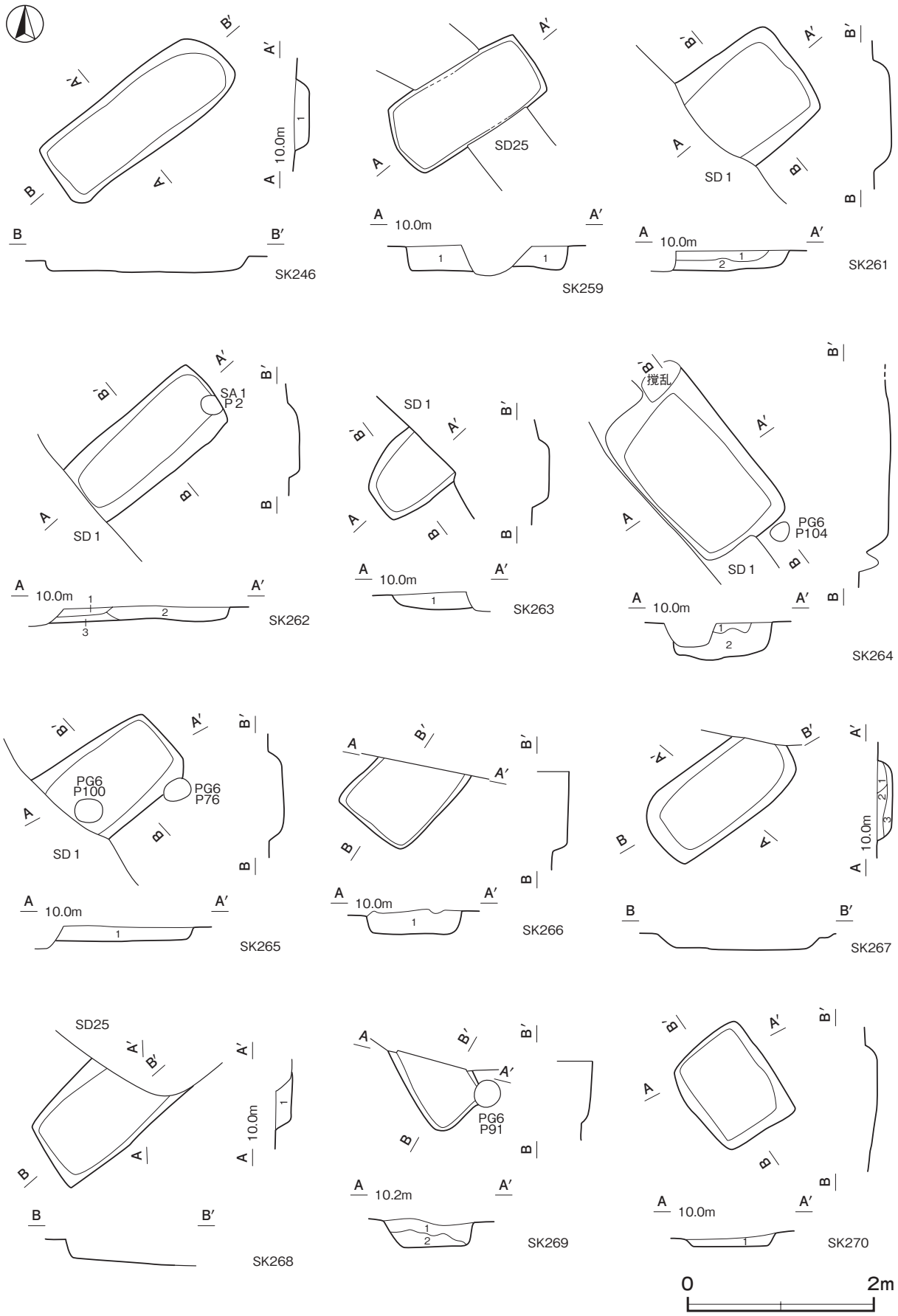
所見　形状や覆土の状況から，墓坑の可能性がある。時期は，出土土器から中世と考えられる。



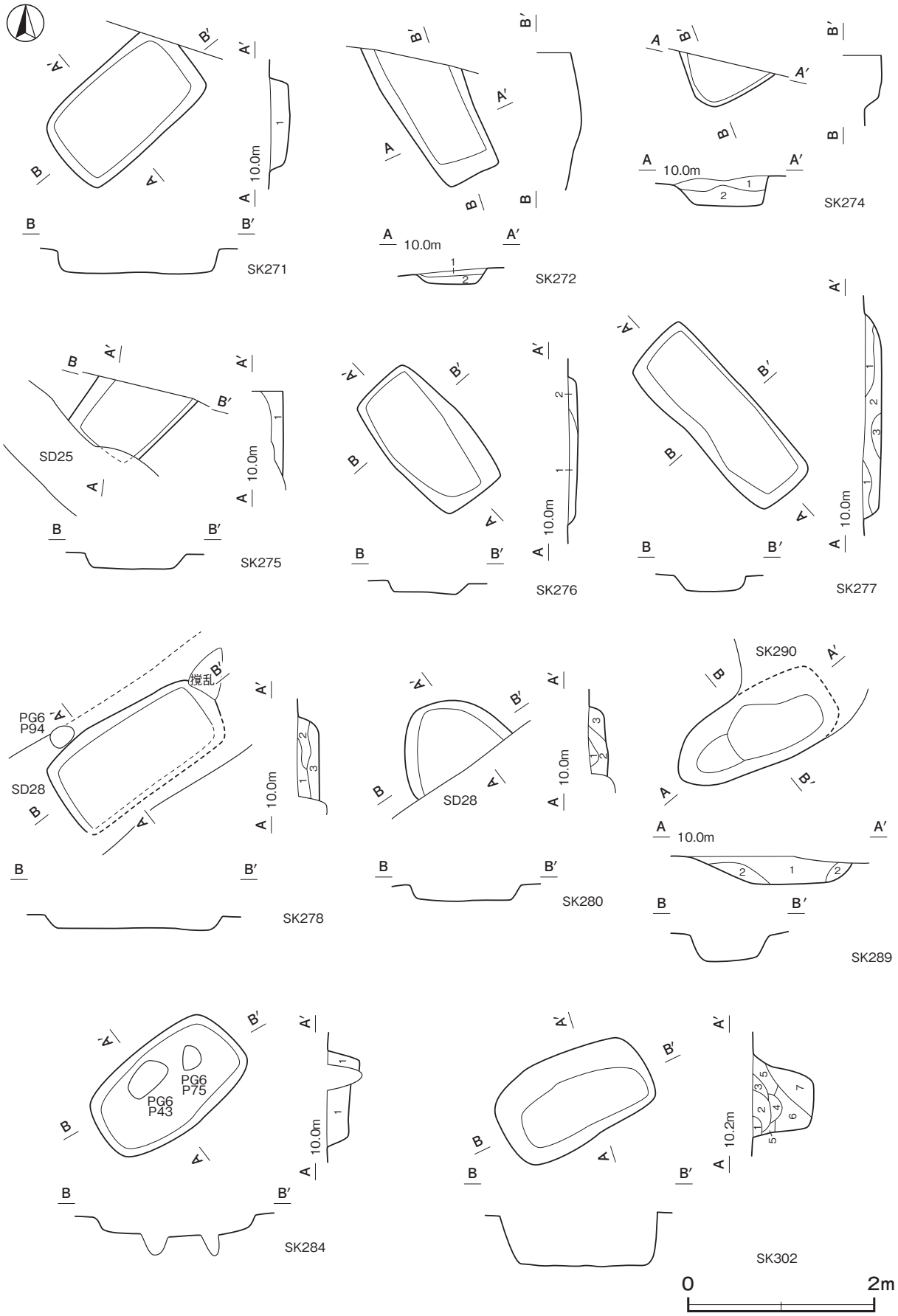
第 19 図　第 283 号土坑・出土遺物実測図

第 283 号土坑出土遺物観察表（第 19 図）

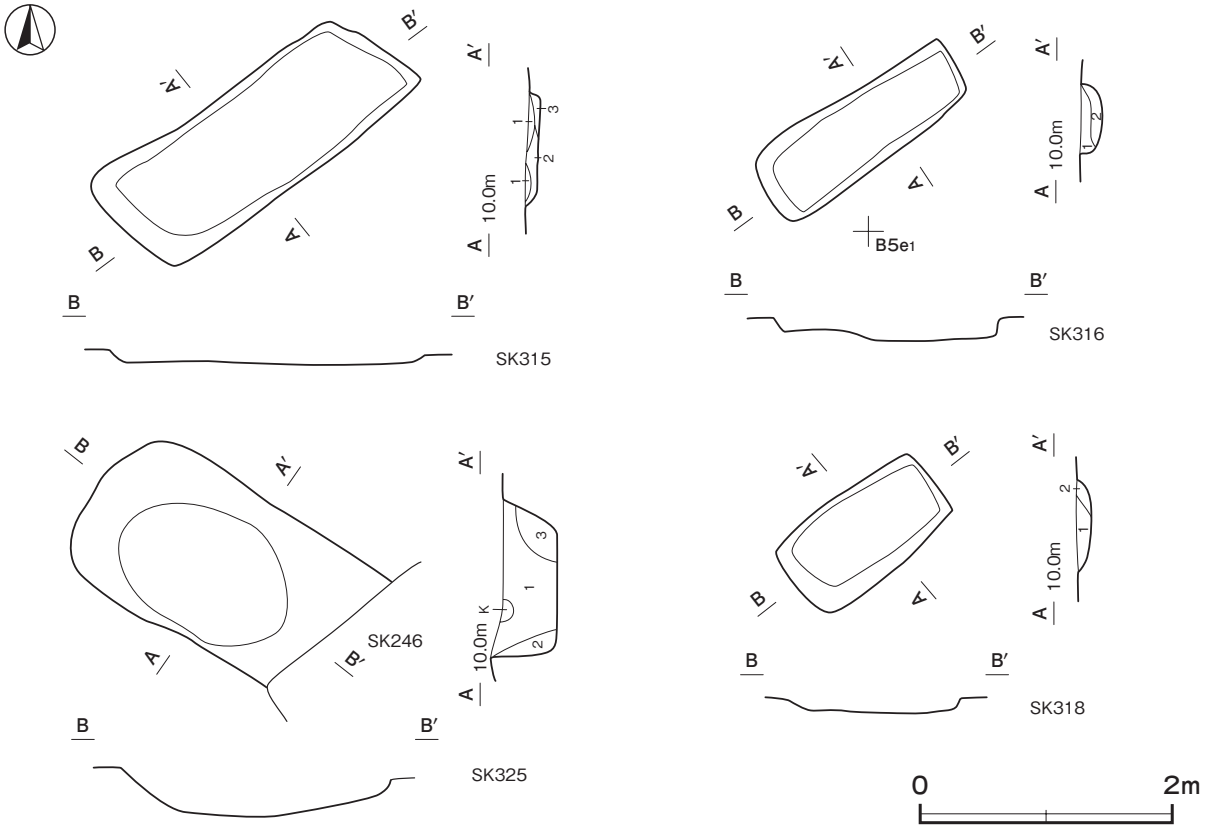
番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
36	陶器	卸皿	－	(0.8)	[6.0]	長石・石英 にぶい黄橙	内面施釉　卸目施文（縦→横）　底部回転糸切り	灰釉	瀬戸	床面	古瀬戸後期第Ⅳ期　PL 6



第 20 図　中世の土坑実測図（1）



第 21 図　中世の土坑実測図（2）



第 22 図　中世の土坑実測図（3）

第 246 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 259 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 261 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量
2　黒　　色　シルトブロック少量

第 262 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック中量
2　黒　褐　色　シルトブロック少量
3　黒　　色　シルトブロック少量

第 263 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 264 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック中量

第 265 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 266 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 267 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量
2　黒　褐　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック中量

第 268 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 269 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量
2　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 270 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 271 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 272 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量
2　黒　褐　色　シルトブロック多量

第 274 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック多量

第 275 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 276 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック中量

第 277 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック微量

第 278 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック少量

第 280 号土坑土層解説
1　暗　褐　色　灰褐色粘土ブロック少量
2　黒　褐　色　シルト粒子少量
3　黒　　色　シルトブロック中量

第 284 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 289 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　灰　褐　色　シルトブロック中量

第 302 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子中量
2　黒　　色　シルト粒子微量
3　黒　褐　色　シルト粒子少量
4　黒　褐　色　シルトブロック少量
5　黒　褐　色　シルトブロック多量
6　黒　褐　色　シルトブロック中量
7　暗　褐　色　シルトブロック中量

第 315 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子微量
2　黒　　色　シルト粒子微量
3　暗　褐　色　シルト粒子中量

第 316 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック中量
2　黒　褐　色　シルトブロック多量

第 318 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック中量
2　黒　褐　色　シルトブロック多量

第 325 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　暗　褐　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック少量

表４　中世土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
245	B４b3	N－55°－E	［長方形］	(1.46) × 0.90	23	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），土師質土器（小皿）	
246	B４b5	N－49°－E	長方形	2.20 × 0.80	14	外傾	平坦	人為		SK325→本跡
259	B４a8	N－59°－E	長方形	1.55 × 0.84	35	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→SD25
261	B４a6	N－52°－E	［長方形］	(1.25) × 1.20	19	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），軽石	本跡→SD１
262	B４b6	N－49°－E	［長方形］	(1.87) × 0.80	14	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→SD１ SA１との新旧不明
263	B４c7	N－49°－E	［長方形］	(0.81) × 0.75	17	外傾	平坦	人為		本跡→SD１
264	B４c7	N－38°－W	［長方形］	1.77 ×［1.09］	40	外傾	平坦	人為		本跡→SD１
265	B４d8	N－52°－E	［長方形］	［1.50］× 0.94	17	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→SD１・PG６
266	B４a9	N－44°－E	［長方形］	(1.10) × 0.90	19	外傾	平坦	人為		
267	B４a9	N－52°－E	［長方形］	1.72 × 0.83	15	緩斜	平坦	人為		
268	B４c0	N－47°－E	［長方形］	(1.72) × 0.95	28	外傾	平坦	人為		HG１→本跡 →SD25
269	B５b2	N－30°－W	［長方形］	(0.93) × 0.70	12	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡 →PG６
270	B５b3	N－31°－W	長方形	1.15 × 0.96	10	外傾	平坦	人為		HG１→本跡
271	B４a6	N－49°－E	長方形	1.58 × 0.98	26	ほぼ直立	平坦	人為		
272	B５b3	N－27°－W	［長方形］	(1.61) × 0.86	14	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡
274	B３j5	N－70°－E	［長方形］	(0.78) × (0.54)	32	外傾	平坦	人為		
275	B４a8	N－40°－E	［長方形］	(1.05) × 0.94	16	外傾	平坦	人為		本跡→SD25
276	B５c1	N－43°－W	長方形	1.61 × 0.90	11	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡
277	B５c1	N－40°－W	長方形	2.18 × 0.81	17	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡
278	B５c3	N－50°－E	［長方形］	1.96 × (0.88)	15	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡 →SD28
279	B４c0	N－51°－E	長方形	1.88 × 0.82	23	外傾	平坦	人為	縄文土器(深鉢)，土製品(羽口)	HG１→本跡
280	B４g8	N－56°－E	［楕円形］	1.23 × (0.83)	17	外傾	平坦	人為		本跡→SD28
283	B４d9	N－67°－E	長方形	1.53 × 0.59	30	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢），陶器（卸皿）	HG１→本跡 →PG６
284	B４d8	N－56°－E	長方形	1.73 × 1.00	25	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），土師質土器（小皿）	HG１→本跡 →PG６
289	B４d0	N－63°－E	［楕円形］	［1.90］× 0.82	28	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG１→本跡 →SK290
302	B４h9	N－63°－E	隅丸長方形	1.70 × 0.99	55	ほぼ直立 外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），石器（剥片）	

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
315	B 5 d3	N－53°－E	長方形	2.50 × 0.57	10	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡
316	B 4 d0	N－52°－E	長方形	1.82 × 0.57	16	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），土師質土器（甕）	HG 1→本跡
318	B 5 d1	N－55°－E	長方形	1.38 × 0.74	8	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1→本跡
325	B 4 b4	N－59°－W	［隅丸長方形］	(2.35) × 1.35	34	緩斜	皿状	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→SK246

3　近世の遺構と遺物

当時期の遺構は，土坑１基，溝跡４条を確認した。　以下，遺構及び遺物について記述する。

(1)　土坑

第 260 号土坑（第 23 図）

位置　調査区西部のＢ３j5 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号溝跡を掘り込んでいる。

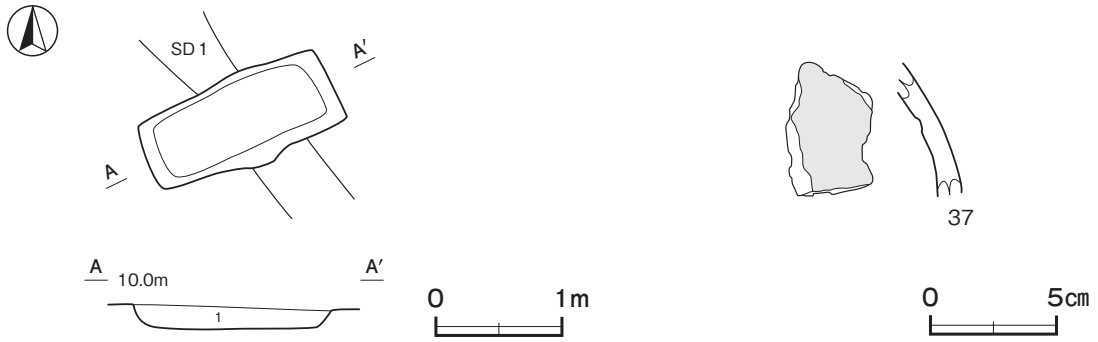
規模と形状　長軸 1.58 m，短軸 0.77 mの長方形で，長軸方向はＮ－ 68°－Ｅである。深さは 20cmで，底面は平坦である。壁は外傾している。

覆土　単一層である。シルトブロックを多く含んでいることから，埋め戻されている。

土層解説
1　暗　褐　色　シルトブロック多量

遺物出土状況　陶器１点（瓶ヵ）が，覆土中から出土している。

所見　形状や覆土の状況から，墓坑の可能性がある。時期は，近世とみられる第１号溝跡を壊しており，それ以降と考えられる。



第 23 図　第 260 号土坑・出土遺物実測図

第 260 号土坑出土遺物観察表（第 23 図）

番号	種別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文様の特徴	釉薬	産地	出土位置	備考
37	陶器	瓶ヵ	－	(5.3)	－	長石・緻密 にぶい黄橙	外面施釉　内面削りによる調整	灰釉	瀬戸・美濃系	覆土中	

(2)　溝跡

当時期の溝跡は，４条確認した。平面図は全体図（付図）に示す。

第１号溝跡（第 27 図）

調査年度　平成 27 年度　南東部は平成 21 年度に調査し，『当財団調査報告書』第 352 集で第１号溝跡として報告している。

位置　調査区西部から中央部にかけてのＡ４j4 区～Ｂ４g0 区，標高 9.8 ｍほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第 261 ～ 265 号土坑，第１号遺物包含層を掘り込み，第 260 号土坑，第 28 号溝に掘り込まれている。第６号ピット群との新旧関係は不明である。

規模と形状　北西部が調査区域外へ延び，南東部で平成 21 年度調査分に接続する。今回確認した長さは 37.42 ｍであった。Ａ４j5 区から南東方向（Ｎ－ 41 °－Ｗ）へ直線的に延びて，Ｂ４g0 区で平成 21 年度調査分に接続する。規模は，上幅 0.40 ～ 0.90 ｍ，下幅 0.18 ～ 0.34 ｍで，確認面からの深さは７～ 34㎝である。断面はＵ字状で，壁は外傾している。底面は，北西から南東方向に傾斜している

覆土　６層に分層できる。不規則な堆積状況を示していることから，埋め戻されている。

土層解説

１　黒　褐　色　シルト粒子少量
２　黒　褐　色　シルト粒子中量
３　黒　褐　色　シルト粒子少量　（シルト質）
４　黒　褐　色　シルトブロック少量
５　黒　褐　色　シルト粒子中量　（シルト質）

遺物出土状況　瓦質土器３点（焙烙），陶器１点（皿）のほかに，縄文土器 12 点（深鉢）が出土している。

所見　直線的に伸びることから，地割のための溝と考えられる。時期は，周囲の遺構との新旧関係や出土土器から近世と考えられる。

第 25 号溝跡（第 24・27 図）

位置　調査区中央部から東部にかけてのＢ４a7 区～Ｂ５b1 区，標高 9.8 ｍほどの低台地緩斜面に位置している。

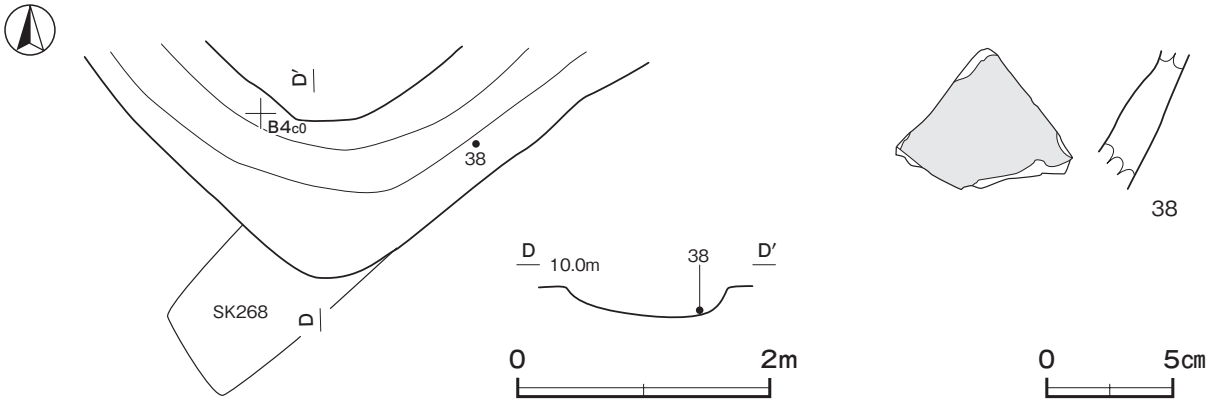
重複関係　第１号遺物包含層，第 259・268・275・288 号土坑を掘り込み，第 26 号溝に掘り込まれている。

規模と形状　Ｂ４a7 区の調査区域外から南東方向（Ｎ－ 47 °－Ｗ）へ直線的に延び，Ｂ４c0 区で北東方向（Ｎ－ 52 °－Ｅ）にＬ字状に屈曲してＢ５b1 で調査区域外に延びている。そのため，長さは 19.52 ｍしか確認できなかった。規模は，上幅 0.66 ～ 1.00 ｍ，下幅 0.20 ～ 0.40 ｍで，確認面からの深さは 12 ～ 24㎝である。断面はＵ字状で，壁は外傾している。底面は北西から北東方向に傾斜している。

覆土　３層に分層できる。シルトブロックが含まれていることから，埋め戻されている。

土層解説

１　黒　褐　色　シルトブロック少量
２　黒　褐　色　シルトブロック微量
３　黒　褐　色　シルト粒子少量



第 24 図　第 25 号溝跡・出土遺物実測図

遺物出土状況　陶器１点（甕）のほか，縄文土器22点（深鉢），軽石１点が出土している。38は，Ｂ４c0区の底面から出土している。

所見　Ｌ字状に屈曲することから，地割のための溝と考えられる。時期は，出土土器から近世と考えられる。

第25号溝跡出土遺物観察表（第24図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
38	陶器	甕	－	(5.5)	－	長石・石英 にぶい赤褐	両面施釉　内面ロクロナデ	錆釉	瀬戸・美濃	Ｂ４c0区 底面	

第26号溝跡（第27図）

位置　調査区中央部から東部かけてのＢ４a0区～Ｂ５c2区，標高9.7ｍほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第281・288号土坑，第25号溝跡，第１号遺物包含層を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｂ４a0区の調査区域外から南東方向（Ｎ－40°－Ｗ）へ小刻みに蛇行しながら伸び，Ｂ５c2区で立ち上がっているため，長さは11.30ｍしか確認できなかった。規模は，上幅0.26～0.80ｍ，下幅0.12～0.44ｍで，確認面からの深さは10～20㎝である。断面はＵ字状で，壁は外傾している。底面は，南東から北西方向に傾斜している。

覆土　単一層である。覆土は締まりが弱く，一度に埋め戻されたと見られる。

土層解説
１　黒　褐　色　シルト粒子微量　（シルト質）

遺物出土状況　縄文土器62点（深鉢）が出土している。

所見　時期は，伴う遺物が出土していないため詳細は不明であるが，近世と見られる第25号溝跡を掘り込んでおり，近世と考えられる。性格は地割を目的としたと見られる。

第28号溝跡（第25～27図　PL２・３）

位置　調査区西部から東部かけてのＢ４h7区～Ｂ５b4区，標高9.7ｍほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第278・280・323号土坑，第１号遺物包含層を掘り込み，第１号溝，第６号ピット群P94に掘り込まれている。

規模と形状　南西部と北東部が調査区域外へ延びているため，長さは35.62ｍしか確認できなかった。また，北東部は掘り込みが浅く，確認面では捉えられなかった。Ｂ４h7区から北東方向（Ｎ－52°－Ｅ）へ直線的に延びている。上幅1.30～2.00ｍ，深さは３～15㎝の逆台形状の溝がまず掘り込まれ，さらに底面の両側の壁際にＵ字状の溝が掘り込まれている。北側の溝は，Ｂ４h7からＢ５c3区まで確認できた。上幅0.20～0.76ｍ，下幅0.08～0.30ｍ，深さは10～21㎝である。南側の溝は，上幅0.36～0.58ｍ，下幅0.10～0.24ｍ，深さは29～41㎝である。壁は外傾し，底面は南西から北東方向に傾斜している。

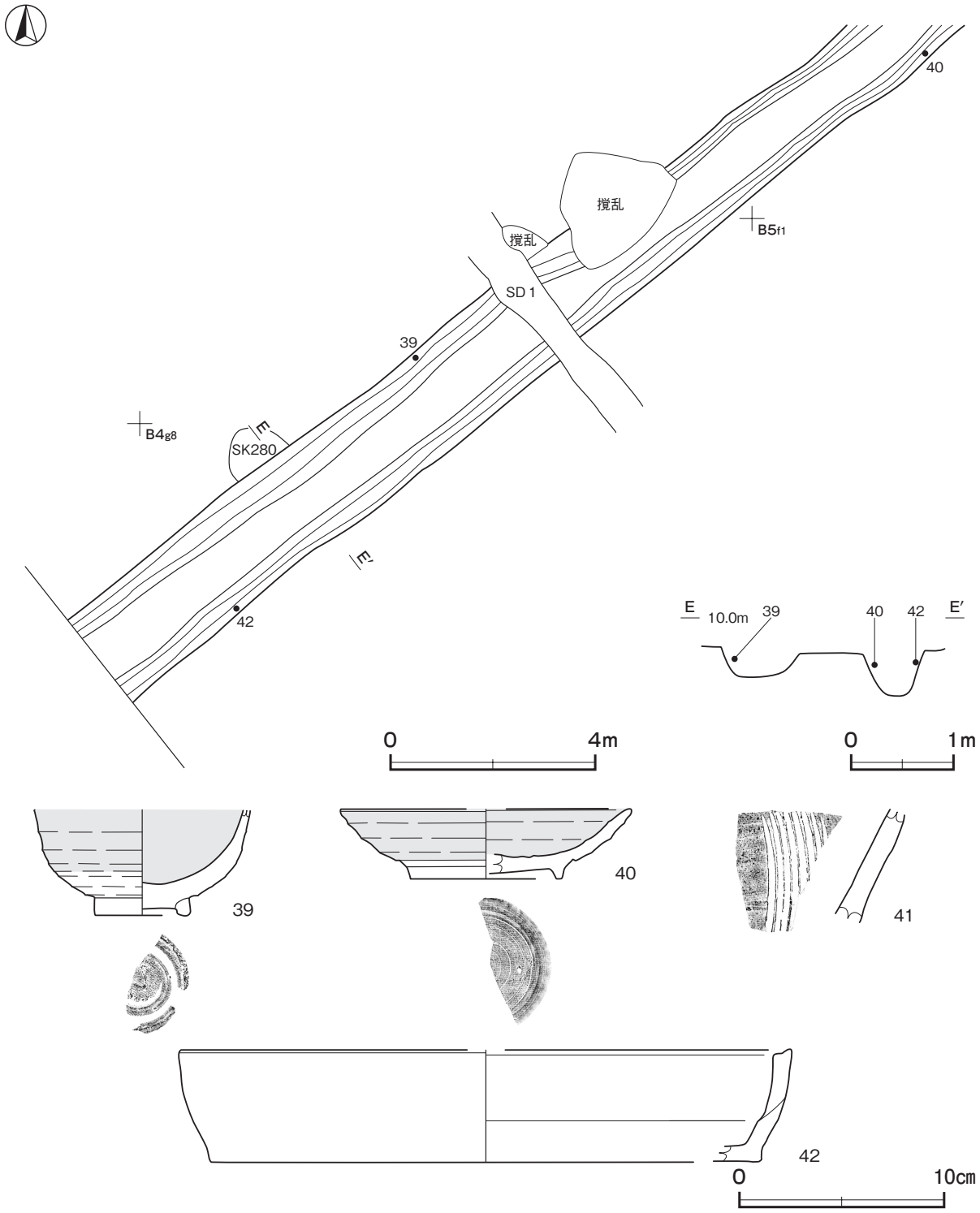
覆土　７層に分層できる。不規則な堆積状況を示しており，埋め戻されたとみられる。

土層解説
１　暗　褐　色　シルト粒子中量
２　黒　褐　色　シルト粒子中量
３　灰　褐　色　シルトブロック・灰褐色粘土ブロック少量
４　黒　褐　色　シルトブロック少量
５　黒　　色　シルト粒子少量
６　黒　　色　シルト粒子中量
７　黒　褐　色　シルト粒子少量

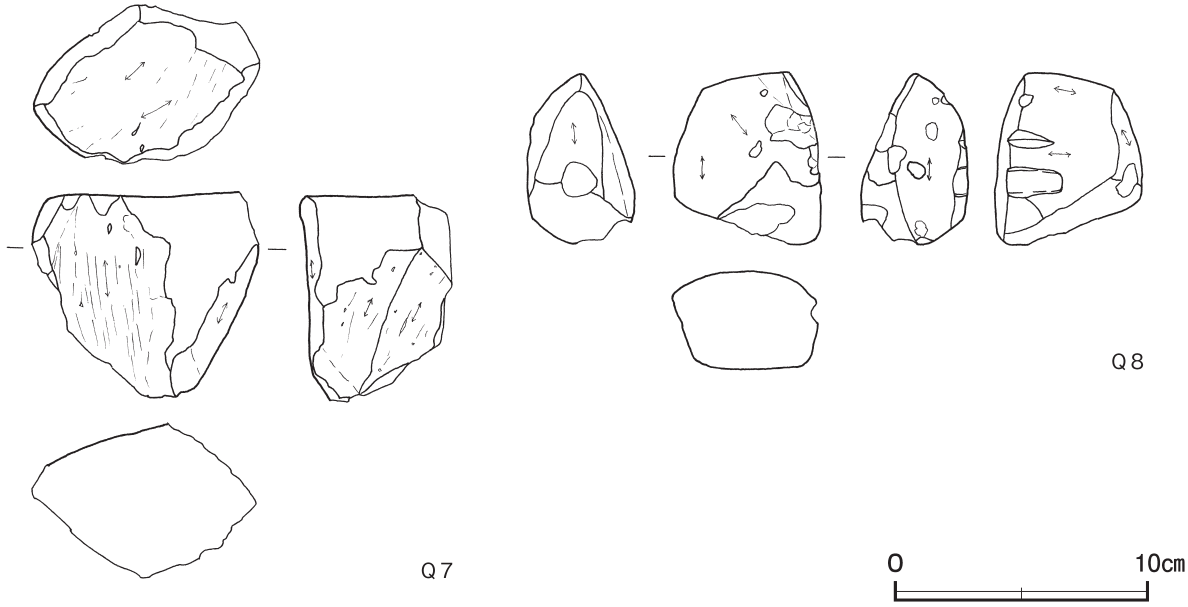
遺物出土状況　瓦質土器１点（焙烙），陶器11点（天目茶碗２，皿１，擂鉢２，不明６），石器２点（砥石），

のほかに，縄文土器 98 点（深鉢），須恵器１点（甕），土製品１点（円筒埴輪），石器･石製品 10 点（板碑片ヵ３，石核７），軽石２点，鉄滓１点が出土している。

所見　断面形状からは３条の溝が重複しているように見えるが，覆土の堆積状況から１条の溝と判断した。両側の溝に囲まれた中央部には，硬化面や柱穴列，道路などの構造物は確認されなかった。調査前の地割と同一であることから地割を目的としたと考えられる。時期は，出土土器から近世に埋没したとみられる。



第 25 図　第 28 号溝跡・出土遺物実測図

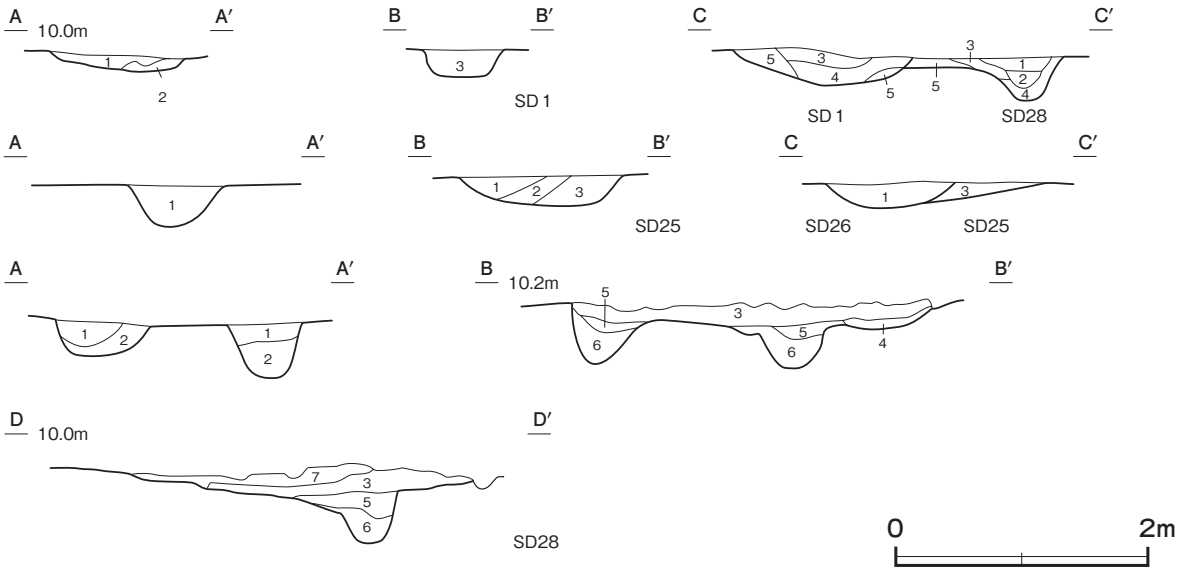


第 26 図　第 28 号溝跡出土遺物実測図

第 28 号溝跡出土遺物観察表（第 25・26 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎土・色調	文　様　の　特　徴	釉　薬	産　地	出土位置	備　考
39	陶器	天目茶碗	－	(5.1)	[4.6]	長石・石英・砂粒・赤色粒子　浅黄橙	外・内面施釉　高台部露胎　高台部貼付	鉄釉	瀬戸	Ｂ４f９区 北側溝覆土中層	大窯Ⅲ期 PL ６
40	陶器	Ⅲ	[14.2]	3.4	[7.4]	長石・緻密 灰白	外・内面施釉　施釉後高台削り出し 内面重ね焼き痕	灰釉	瀬戸	Ｂ５d1 区 南側溝覆土上層	大窯期 PL ６
41	陶器	擂鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・雲母 灰褐	外・内面施釉　内面８本一単位の擂目	錆釉	瀬戸・美濃	南側溝覆土中	PL ６
42	瓦質土器	焙烙	[29.8]	5.5	[26.8]	長石・石英・雲母 灰白	ロクロ成型　外・内面削り　外面下半～底面強い被熱による変色・発泡	－	不明	Ｂ４g8 区 南側溝覆土中層	PL ６

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q７	砥石	(8.2)	(9.1)	(6.1)	(200.15)	角閃石デイサイトｃ	砥面５面	覆土中	
Q８	砥石	(6.8)	5.9	4.3	(102.88)	凝灰岩	砥面５面　研ぎ痕２条　破断面１面	覆土中	



第 27 図　第１・25・26・28 号溝跡実測図

表５　近世溝跡一覧表

番号	位　置	方　向	平面形	規　模				断　面	壁　面	覆　土	主な出土遺物	備　考
				長さ(m)	上幅（m）	下幅（m）	深さ(cm)					
1	A 4 j4 ～ B 4 g0	N － 41° － W	直線	(37.42)	0.40 ～ 0.90	0.18 ～ 0.34	7 ～ 34	U字状	外傾	人為	縄文土器（深鉢），陶器（皿），瓦質土器（焙烙）	SK261～265，HG 1→本跡→SK260，SD28
25	B 4 a7 ～ B 4 c9 B 4 c0 ～ B 5 b1	N － 47° － W N － 52° － E	L字状	(19.52)	0.66 ～ 1.00	0.20 ～ 0.40	12 ～ 24	U字状	外傾	人為	縄文土器（深鉢），陶器（甕），軽石	SK259・268・275・288→本跡→SD26
26	B 4 a0 ～ B 5 c2	N － 40° － W	直線	(11.30)	0.26 ～ 0.80	0.12 ～ 0.44	10 ～ 20	U字状	緩斜	人為	縄文土器（深鉢）	SK281・288，SD25，HG 1→本跡
28	B 4 h7 ～ B 5 b4	N － 52° － E	直線	(35.62)	－	－	－	逆台形 U字状	外傾	人為	縄文土器（深鉢），陶器（天目茶碗・皿・擂鉢），瓦質土器（焙烙），石器（砥石）	SK278・280・323，HG 1→SD 1，PG 6

4　その他の遺構と遺物

今回の調査で，時期が明らかではない掘立柱建物跡３棟，井戸跡１基，柱穴列４条について，本文と実測図を記載する。その他，時期が明らかでない，土坑 37 基，溝跡３条，ピット群１か所については実測図と一覧表にて掲載する。また，表土や遺構に伴わない遺物については，実測図と観察表を掲載する。

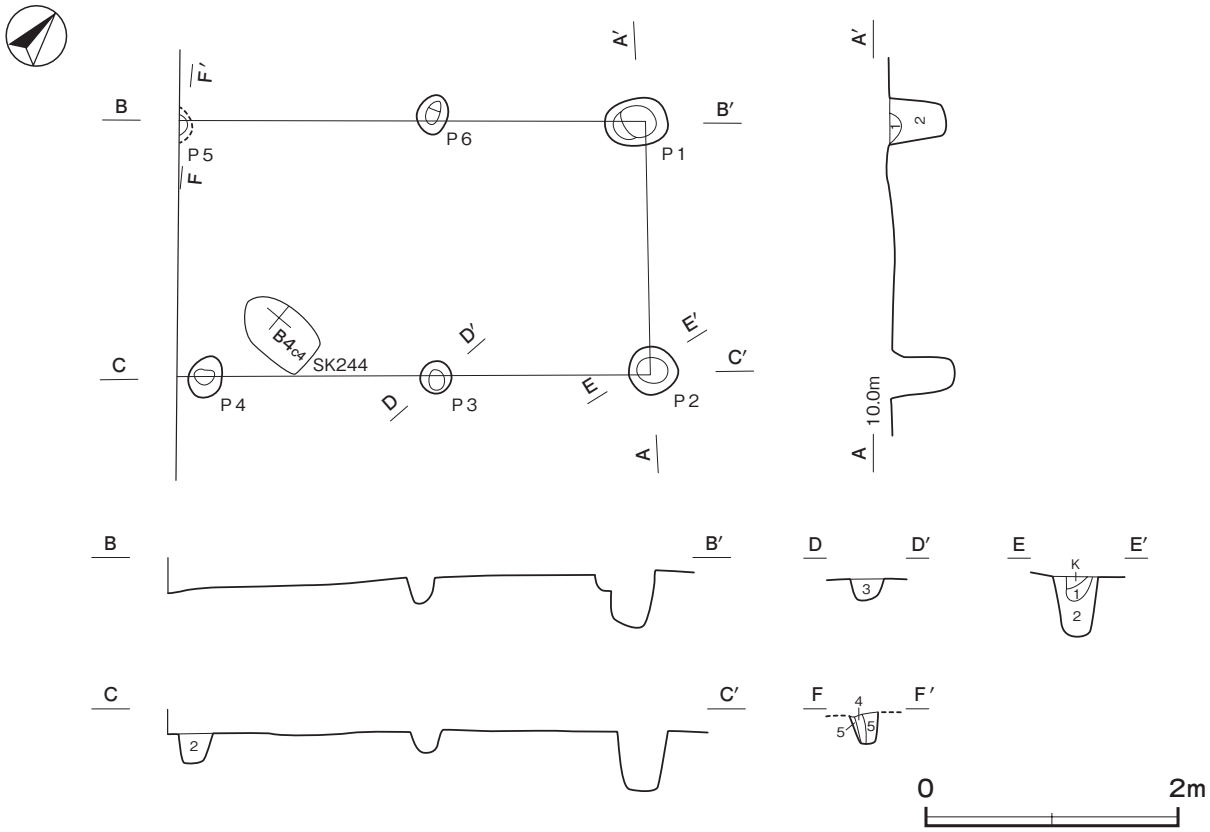
(1)　掘立柱建物跡

第１号掘立柱建物跡（第 28 図）

位置　調査区西部のＢ４b4 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第 244 号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　西部が調査区域外に延びているため，梁行１間で，桁行は２間しか確認できなかった。側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 50 ゜－Ｅの東西棟である。規模は桁行 3.7 m以上，梁行 2.0 mである。柱間寸法は，北



第 28 図　第１号掘立柱建物跡実測図

桁行が東妻から 1.7 m（5.6 尺），2.0 m（6.6 尺），南桁行が東妻から 1.7 m（5.6 尺），1.8 m（６尺），桁行 2.0 m（6.6 尺）で，柱筋はほぼ揃っている。

柱穴　６か所。Ｐ５を除いた平面形は，円形もしくは楕円形で，長径 26 ～ 49㎝，短径 25 ～ 40㎝である。深さは 18 ～ 50㎝である。第１～３層は柱抜き取り後の堆積層で，第４層が柱痕跡，第５層が埋土である。

土層解説

1　黒　　色　明褐色粘土ブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック少量
3　黒　　色　シルトブロック中量
4　黒　　色　明褐色粘土ブロック微量
5　黒　　色　明褐色粘土ブロック中量

所見　時期は，周囲の遺構との関係から中世以降と考えられるが，遺物が出土していないため特定は困難である。性格は，小屋などの簡易的な建物と考えられる。

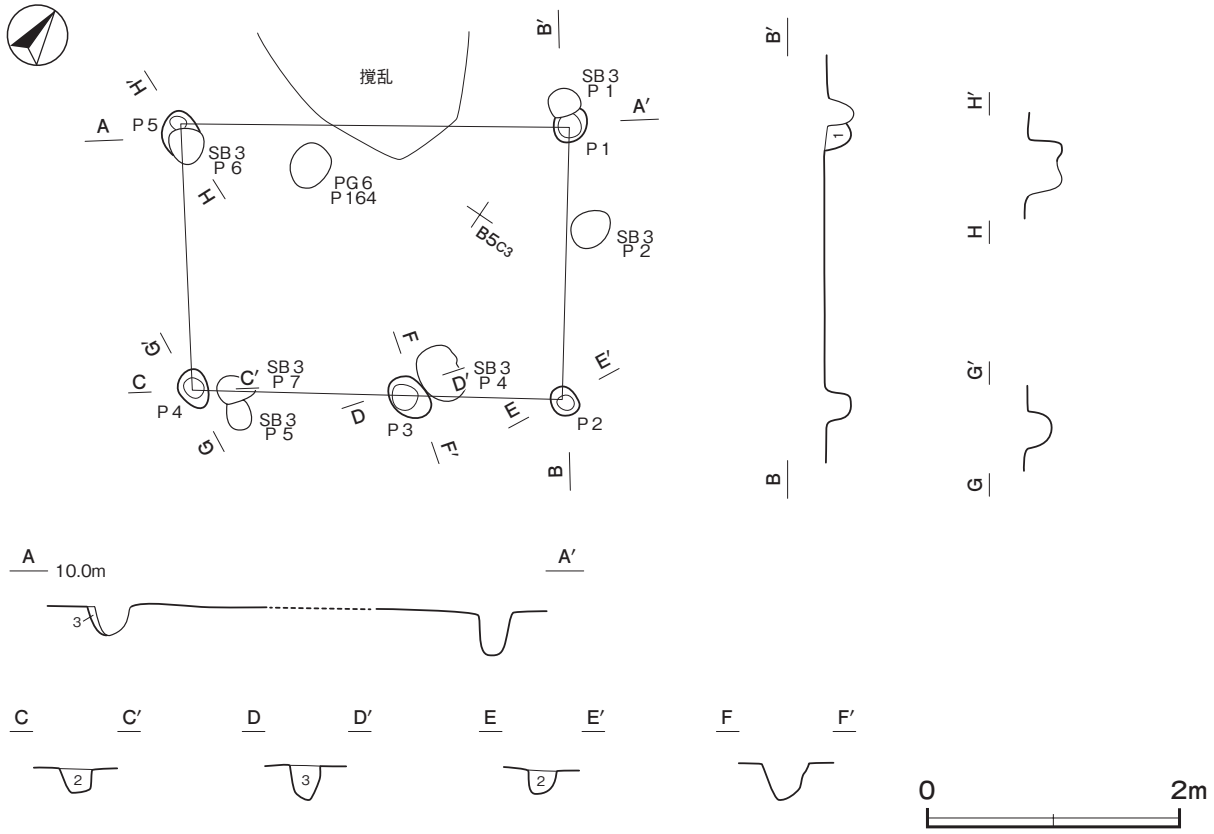
第２号掘立柱建物跡（第 29 図）

位置　調査区東部のＢ５b3 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込み，第３号掘立柱建物に掘り込まれている。第６号ピット群 P164 との新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行２間，梁行１間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 53°－Ｅの東西棟である。規模は桁行 3.1 m，梁行 2.2 mで，面積は 7.22㎡である。柱間寸法は，南桁行が東妻から 1.2 m（４尺），1.7 m（5.6 尺），東梁行が北平から 2.2 m（7.3 尺），西梁行が 2.1 m（７尺）で，柱筋はほぼ揃っている。Ｐ１・Ｐ５の間の柱穴は撹乱により，確認できなかった。

柱穴　５か所。平面形は楕円形で，長径 24 ～ 42㎝，短径 20 ～ 30㎝である。深さは 19 ～ 30㎝である。第１



第 29 図　第２号掘立柱建物跡実測図

～３層は，柱抜き取り後の堆積層である。

土層解説

1　黒　　色　シルトブロック微量
2　黒　　色　シルトブロック中量
3　黒　褐　色　シルトブロック中量

所見　時期は，周囲の遺構との関係から中世以降と考えられるが，遺物が出土していないため特定は困難である。性格は，小屋などの簡易的な建物と考えられるが，不明である。

第３号掘立柱建物跡（第 30 図）

位置　調査区東部のＢ５b3 区，標高 9.8 mほどの低台地緩斜面に位置している。

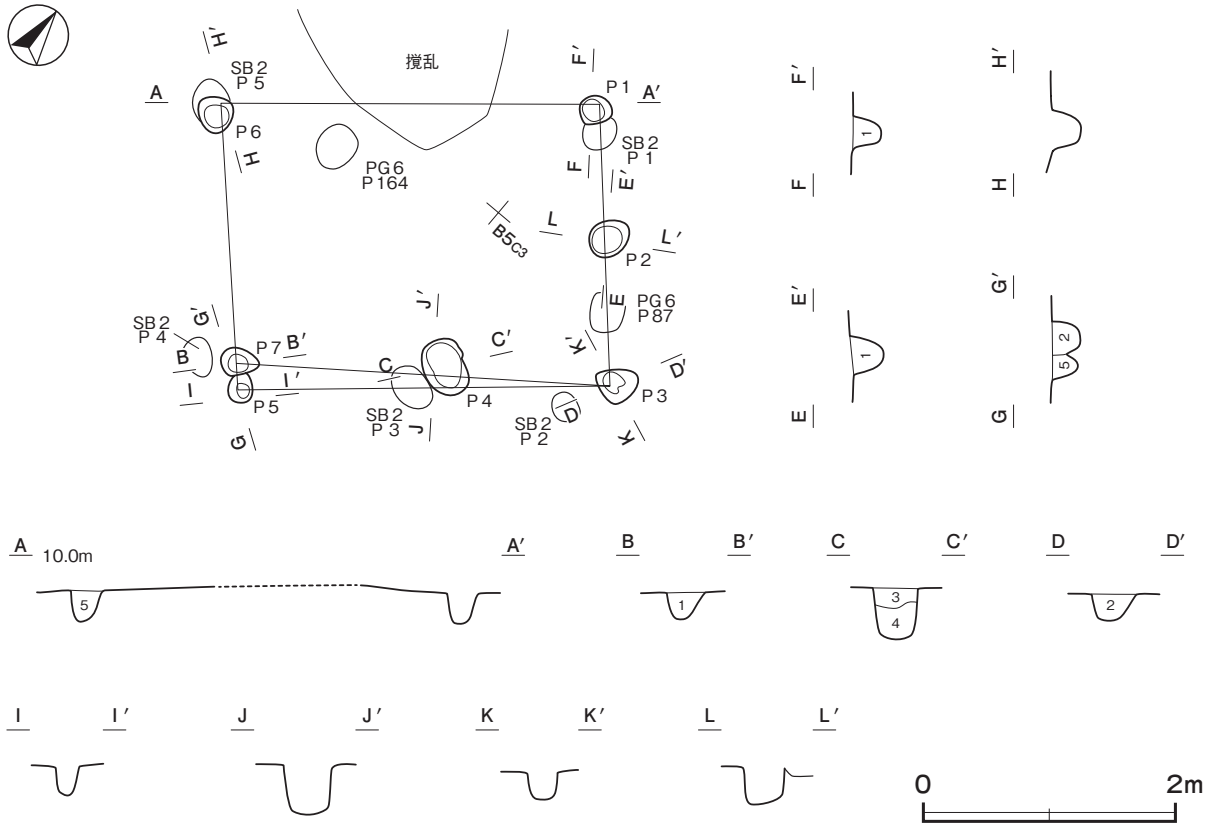
重複関係　第１号遺物包含層，第２号掘立柱建物跡を掘り込んでいる。 第６号ピット群Ｐ 87・Ｐ 164 と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　桁行２間，梁行２間の側柱建物跡で，桁行方向がＮ－ 50゜－Ｅの東西棟である。規模は桁行 3.0 m，梁行 2.3 mで，面積は 6.90㎡である。柱間寸法は南桁行が東妻から 1.3 m（4.3 尺），1.6 m（5.3 尺），東梁行は 1.1 m（3.6 尺）等間で，柱筋はほぼ揃っている。Ｐ１・Ｐ６の間の柱穴は撹乱のために，Ｐ５・Ｐ６の間は精査したが，柱穴を確認できなかった。

柱穴　７か所。柱穴の平面形は楕円形で，長径 24 ～ 47㎝，短径 19 ～ 32㎝である。深さは 21 ～ 39㎝である。第１～５層は，柱抜き取り後の堆積層である。Ｐ７がＰ５を壊しており，Ｐ５からＰ７に建て替えられている。

土層解説

1　黒　褐　色　シルトブロック中量
2　黒　　色　シルトブロック中量
3　黒　褐　色　シルトブロック少量
4　黒　　色　シルトブロック少量
5　極暗褐色　シルトブロック少量



第 30 図　第３号掘立柱建物跡実測図

所見　時期は，時期は，周囲の遺構との関係から中世以降と考えられるが，遺物が出土していないため特定は困難である。第２号掘立柱建物跡から本跡に建て替えられたと見られる。

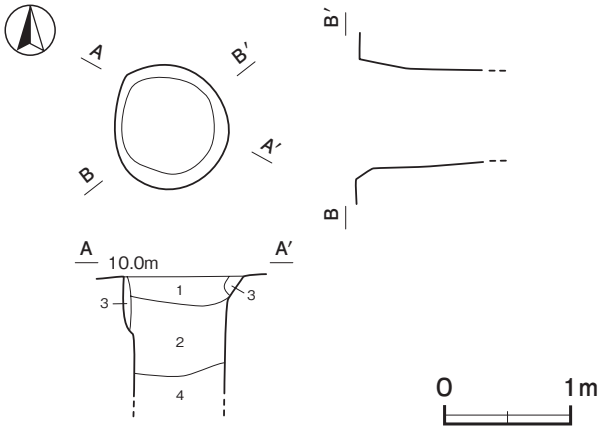
表３　その他の掘立柱建物跡一覧表

番号	位置	桁行方向	柱間数	規模	面積	柱間寸法		柱穴				主な出土遺物	時期	備考
			桁×梁(間)	桁×梁（m）	(㎡)	桁間(m)	梁間(m)	構造	柱穴数	平面形	深さ(cm)			
1	B 4 b4	N－50°－E	(2)× 1	(3.7) × 2.0	－	1.7～2.0	2.0	側柱	6	円形・楕円形	18～50		中世以降	SK244とは新旧不明
2	B 5 b3	N－53°－E	2 × 1	3.1 × 2.2	7.22	1.2～1.7	2.1～2.2	側柱	5	楕円形	19～30		中世以降	HG 1→本跡→SB 3
3	B 5 b3	N－50°－E	2 × 2	3.0 × 2.3	6.90	1.3～1.6	1.1	側柱	7	楕円形	21～39	縄文土器(深鉢)	中世以降	HG 1，SB 2→本跡

(2)　井戸跡

第22号井戸跡（第31図　PL ３）

位置　調査区中央部のＢ４g9区，標高9.8ｍほどの低台地緩斜面に位置している。



規模と形状　確認面は径1.00ｍの円形で，円筒状に掘り下げている。深さ1.00ｍまで掘り下げたが，湧水による崩落の危険性のために下部の調査を断念した。

覆土　４層に分層できる。不規則な堆積状況を示し，シルトブロックを含んでいることから埋め戻されている。

土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック少量
3　暗　褐　色　シルトブロック中量
4　黒　　色　シルトブロック微量

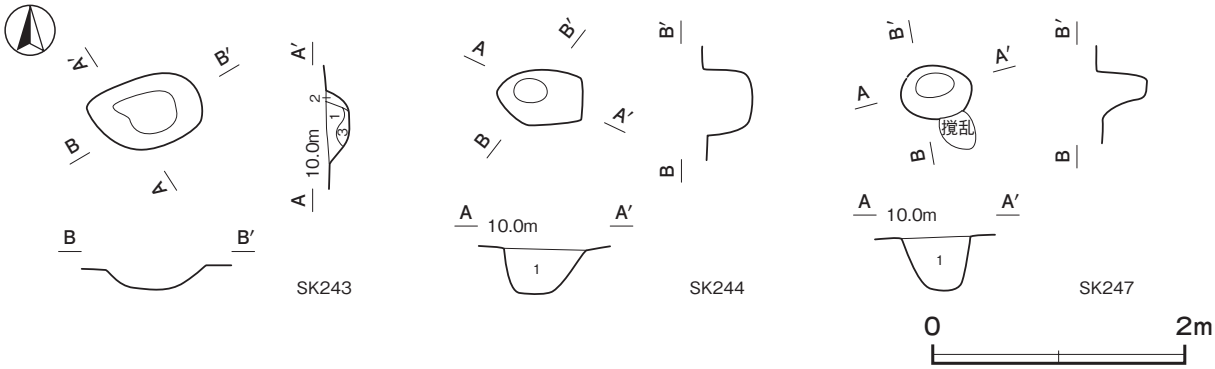
第31図　第22号井戸跡実測図

遺物出土状況　縄文土器１点（深鉢），石器１点（石皿）が出土している。縄文土器は細片のため図示できない。

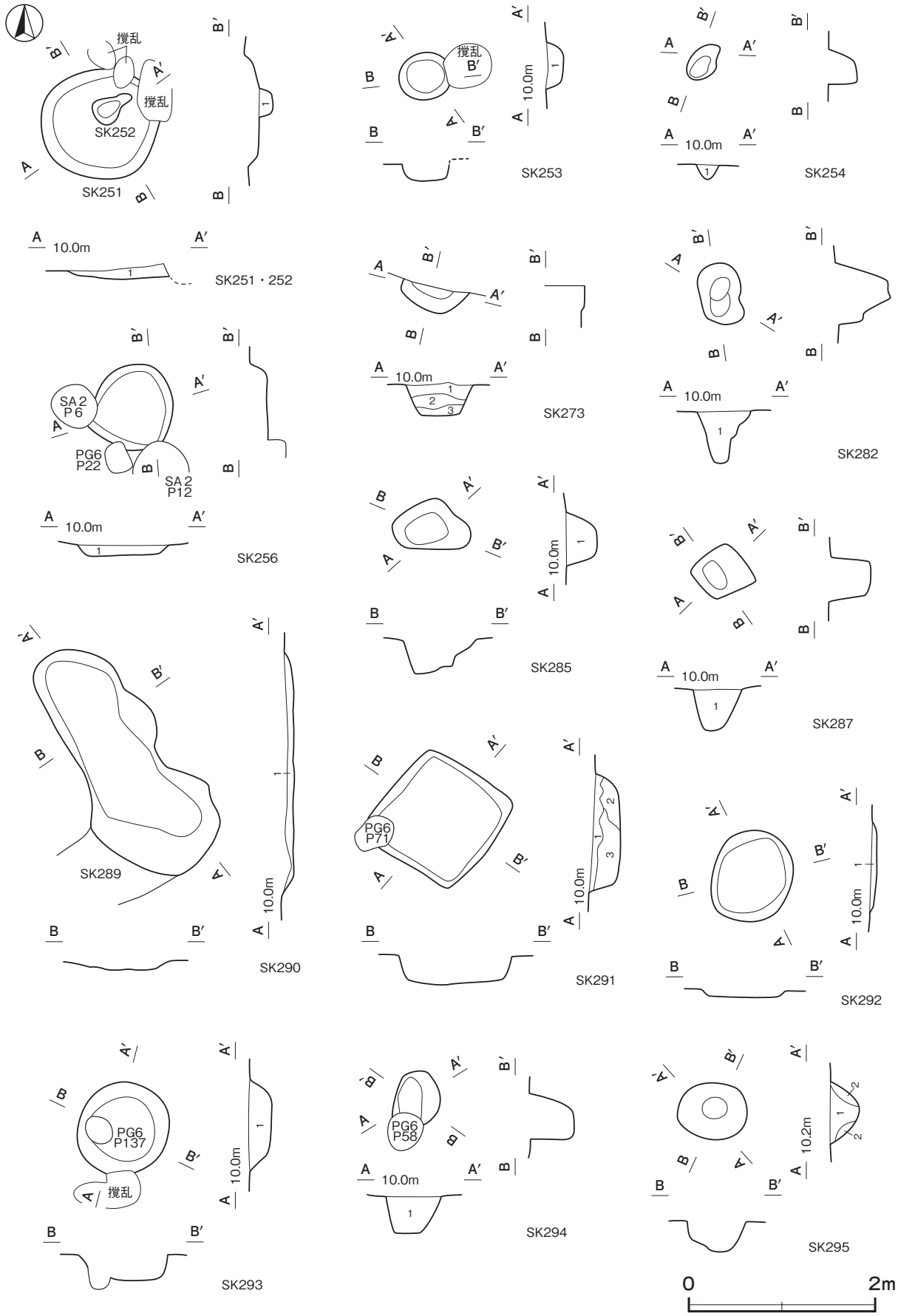
所見　素掘りの構造である。時期は，伴う遺物が出土していないため不明である。

(3)　土坑

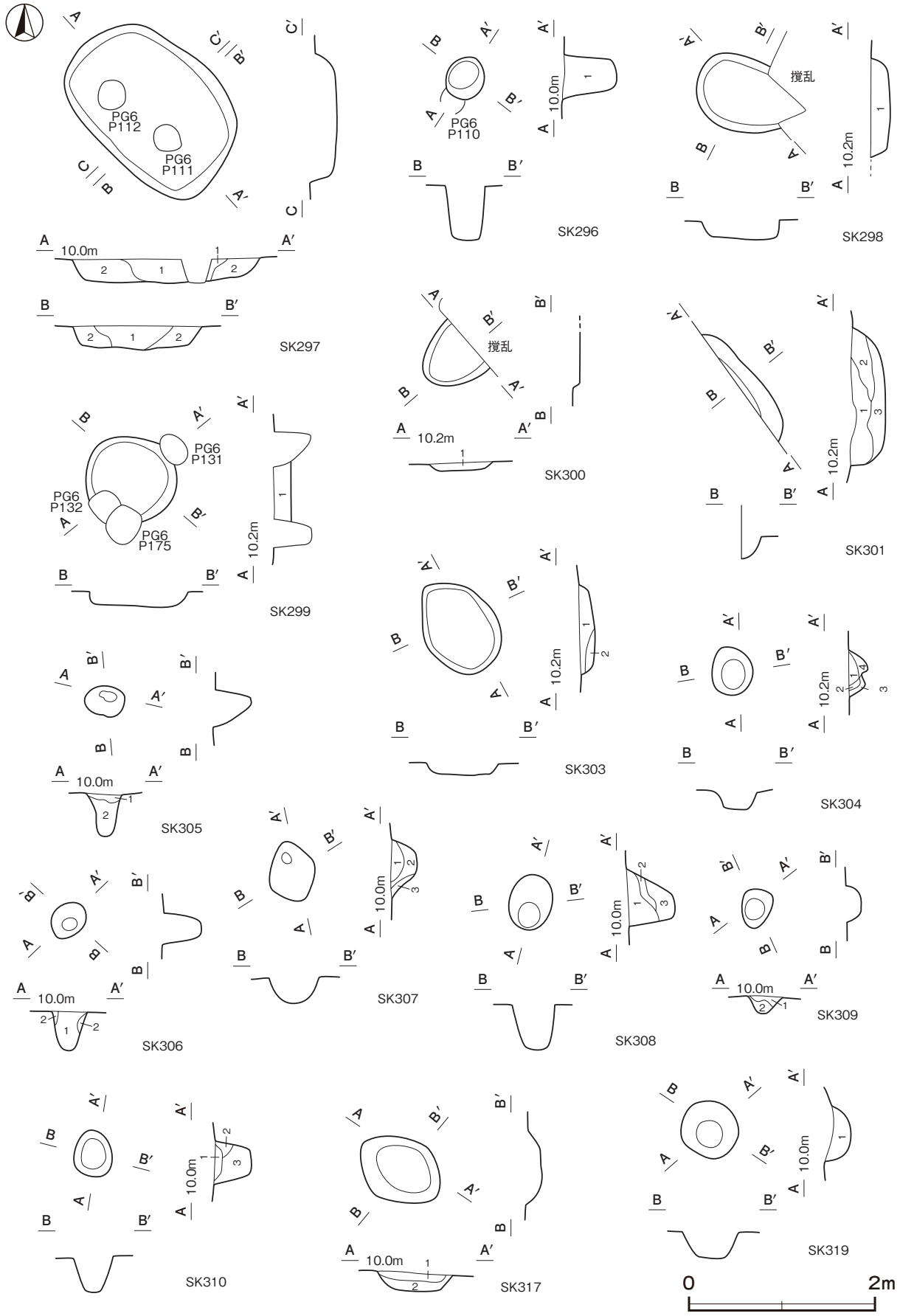
今回の調査で，性格や時期がともに不明な土坑37基が確認されている。これらの土坑については規模と形状等について実測図（第32～35図）と土層解説，一覧表を掲載する。



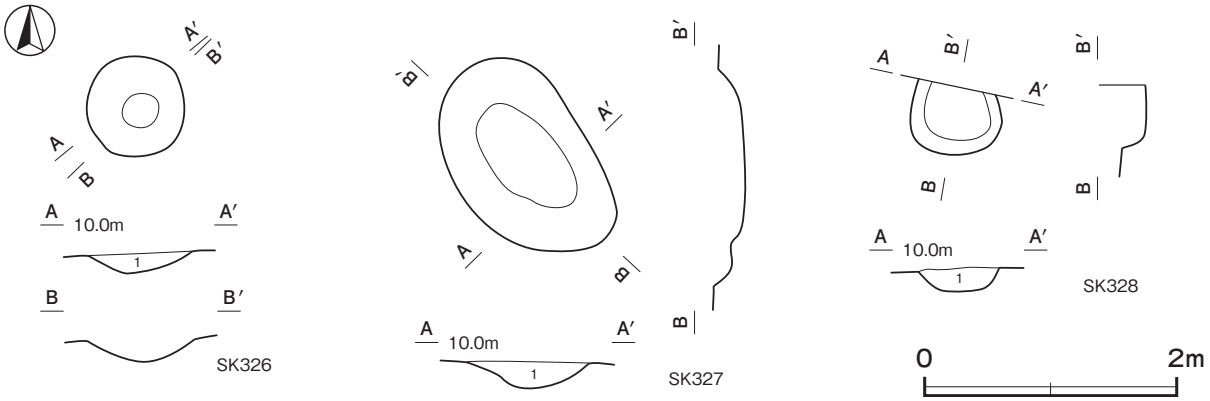
第32図　その他の土坑実測図（１）



第 33 図　その他の土坑実測図（2）



第 34 図　その他の土坑実測図（3）



第 35 図　その他の土坑実測図（4）

第 243 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック中量
2　黒　褐　色　シルトブロック少量
3　黒　　色　シルトブロック微量

第 244 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 247 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 251 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 252 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 253 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 254 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック中量

第 256 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 273 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック微量
2　黒　褐　色　シルトブロック少量
3　黒　　色　シルトブロック少量

第 282 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 285 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　炭化粒子・シルトブロック・灰褐色粘土ブロック少量

第 287 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 290 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック・シルト粒子少量

第 291 号土坑土層解説
1　褐　灰　色　シルトブロック少量
2　黒　褐　色　シルト粒子中量，シルトブロック少量
3　黒　褐　色　シルト粒子中量，シルトブロック微量

第 292 号土坑土層解説
1　灰　褐　色　シルト粒子・灰褐色粘土ブロック少量

第 293 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 294 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 295 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　焼土粒子・シルトブロック少量
2　暗　褐　色　シルト粒子少量

第 296 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルト粒子少量

第 297 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック微量
2　黒　　色　シルトブロック少量

第 298 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 299 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量，灰褐色粘土ブロック微量

第 300 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック・灰褐色粘土ブロック少量

第 301 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック多量
2　黒　褐　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック中量

第 303 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子中量
2　暗　褐　色　シルト粒子中量

第 304 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子少量
2　黒　褐　色　シルトブロック少量
3　黒　褐　色　シルトブロック多量
4　黒　褐　色　シルトブロック中量

第 305 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　褐　色　シルト粒子中量

第 306 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　暗　褐　色　シルト粒子中量

第 307 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　褐　色　シルトブロック中量
3　暗　褐　色　シルトブロック中量

第 308 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　暗　褐　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック少量

第 309 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子少量
2　黒　褐　色　シルト粒子中量

第 310 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量
2　黒　　色　シルトブロック中量
3　黒　　色　シルトブロック少量

第 317 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルト粒子中量
2　暗　褐　色　シルト粒子中量

第 319 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

第 326 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 327 号土坑土層解説
1　黒　褐　色　シルトブロック少量

第 328 号土坑土層解説
1　黒　　色　シルトブロック少量

表７　その他の土坑一覧表

番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
243	B 4 b6	N－62°－E	楕円形	0.79 × 0.57	19	緩斜	平坦	人為		
244	B 4 c4	N－63°－W	楕円形	0.70 × 0.47	37	外傾	平坦	人為		SB 1 と新旧不明
247	B 4 b5	N－70°－E	楕円形	0.55 × 0.43	36	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	
251	B 4 c5	－	円形	1.22 × 1.22	13	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→ SK252
252	B 4 c5	N－63°－E	不整楕円形	0.44 × 0.26	16	外傾	平坦	人為		SK251 →本跡
253	B 4 d5	－	円形	0.53 × 0.52	18	外傾	平坦	人為		
254	B 4 d5	N－32°－E	楕円形	0.44 × 0.26	29	外傾	平坦	人為		
256	B 4 d5	N－21°－E	楕円形	0.91 × 0.85	18	外傾	平坦	人為		本跡→ SA 2，PG 6
273	B 5 c6	N－57°－W	［長方形］	0.60 ×（0.27）	34	外傾	平坦	人為		HG 1 →本跡
282	B 4 c7	N－18°－W	楕円形	0.66 × 0.45	53	外傾	平坦	人為		
285	B 4 c8	N－70°－W	不整楕円形	0.80 × 0.50	37	外傾	平坦	人為		HG 1 →本跡
287	B 4 c8	－	方形	0.53 × 0.53	40	ほぼ直立	平坦	人為		HG 1 →本跡
290	B 4 c0	N－33°－W	隅丸長方形	2.70 × 1.14	8	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	SK289，HG 1 →本跡
291	B 4 e9	－	方形	1.23 × 1.23	16	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	HG 1 →本跡→ PG 6
292	B 4 c6	N－33°－E	楕円形	1.01 × 0.87	8	外傾	平坦	人為		
293	B 4 d7	－	円形	1.02 × 0.95	24	外傾	平坦	人為		本跡→ PG 6
294	B 4 d6	N－10°－E	［楕円形］	0.55 × 0.48	47	外傾	平坦	人為		本跡→ PG 6
295	B 4 f7	N－86°－W	楕円形	0.74 × 0.62	34	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢），土師質土器（甕）	
296	B 4 d7	N－30°－E	楕円形	0.47 × 0.41	58	直立	平坦	自然		PG 6 →本跡
297	B 4 e7	N－44°－W	楕円形	2.00 × 1.39	26	外傾	平坦	人為		本跡→ PG 6
298	B 4 e8	N－73°－W	［楕円形］	（1.22）× 0.81	21	外傾	平坦	人為		
299	B 4 e7	－	［円形］	1.00 ×（0.75）	17	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	本跡→ PG 6
300	B 4 f8	N－47°－E	［楕円形］	（0.60）× 0.70	7	外傾	平坦	人為		
301	B 4 h8	N－36°－W	［楕円形］	（1.41）×（0.22）	35	緩斜	平坦	人為		
303	B 4 g9	N－35°－W	楕円形	1.10 × 0.79	12	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	
304	B 4 g0	N－15°－W	楕円形	0.52 × 0.45	20	外傾	平坦	人為		
305	B 4 f0	N－67°－W	楕円形	0.43 × 0.32	40	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	
306	B 4 f0	N－40°－E	楕円形	0.45 × 0.36	42	ほぼ直立	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	

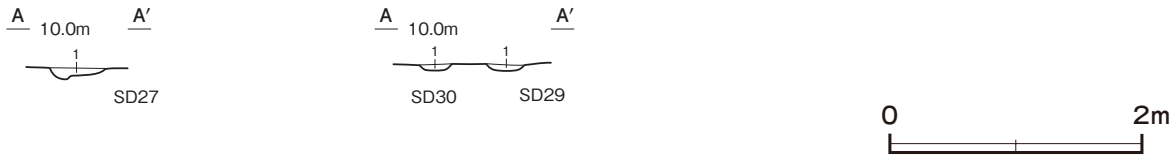
番号	位置	長径方向	平面形	規模		壁面	底面	覆土	主な出土遺物	備考
				長径×短径（m）	深さ（cm）					
307	B 5 g1	N－12°－W	楕円形	0.65 × 0.52	28	外傾	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	
308	B 5 g1	N－13°－E	楕円形	0.60 × 0.46	50	外傾	平坦	人為		
309	B 5 g1	N－7°－E	楕円形	0.43 × 0.32	18	外傾	平坦	人為		
310	B 4 f0	N－6°－W	楕円形	0.50 × 0.41	38	外傾	平坦	人為		
317	B 4 e9	N－53°－W	楕円形	0.99 × 0.73	13	緩斜	平坦	人為	縄文土器（深鉢）	
319	B 4 d5	－	円形	0.62 × 0.60	27	外傾	平坦	人為		
326	B 4 e5	－	円形	0.83 × 0.78	18	緩斜	平坦	人為		
327	B 4 a4	N－41°－W	楕円形	1.73 × 1.09	22	緩斜	平坦	人為		
328	A 4 j3	N－80°－W	［楕円形］	0.74 ×（0.54）	19	外傾	平坦	人為		

(4) 溝跡

今回の調査で，性格や時期が不明な溝跡３条が確認されている。これらの溝については，規模と形状等について，平面図を全体図（付図）に掲載し，実測図（第 36 図）と土層解説，一覧表を下記に掲載する。

第 27 号溝跡土層解説
1 黒　　色　シルトブロック少量，灰褐色粘土ブロック微量

第 29・30 号溝跡土層解説
1 黒　　色　シルト粒子少量



第 36 図　その他の溝跡実測図

表８　その他の溝跡一覧表

番号	位置	方向	平面形	規模				断面	壁面	覆土	主な出土遺物	備考
				長さ（m）	上幅（m）	下幅（m）	深さ（cm）					
27	B 5 d5～B 5 c6	N－40°－E	直線	(3.36)	0.32～0.45	0.19～0.25	2～8	U字状	緩斜	人為		HG 1→本跡
29	B 5 d3～B 5 e3	N－65°－W	直線	(4.88)	0.20～0.36	0.10～0.19	3～9	U字状	緩斜	自然		HG 1→本跡
30	B 5 d3	N－65°－W	直線	2.62	0.23～0.30	0.11～0.20	4～7	U字状	緩斜	自然		HG 1→本跡

(5) 柱穴列

第１号柱穴列（第 37 図）

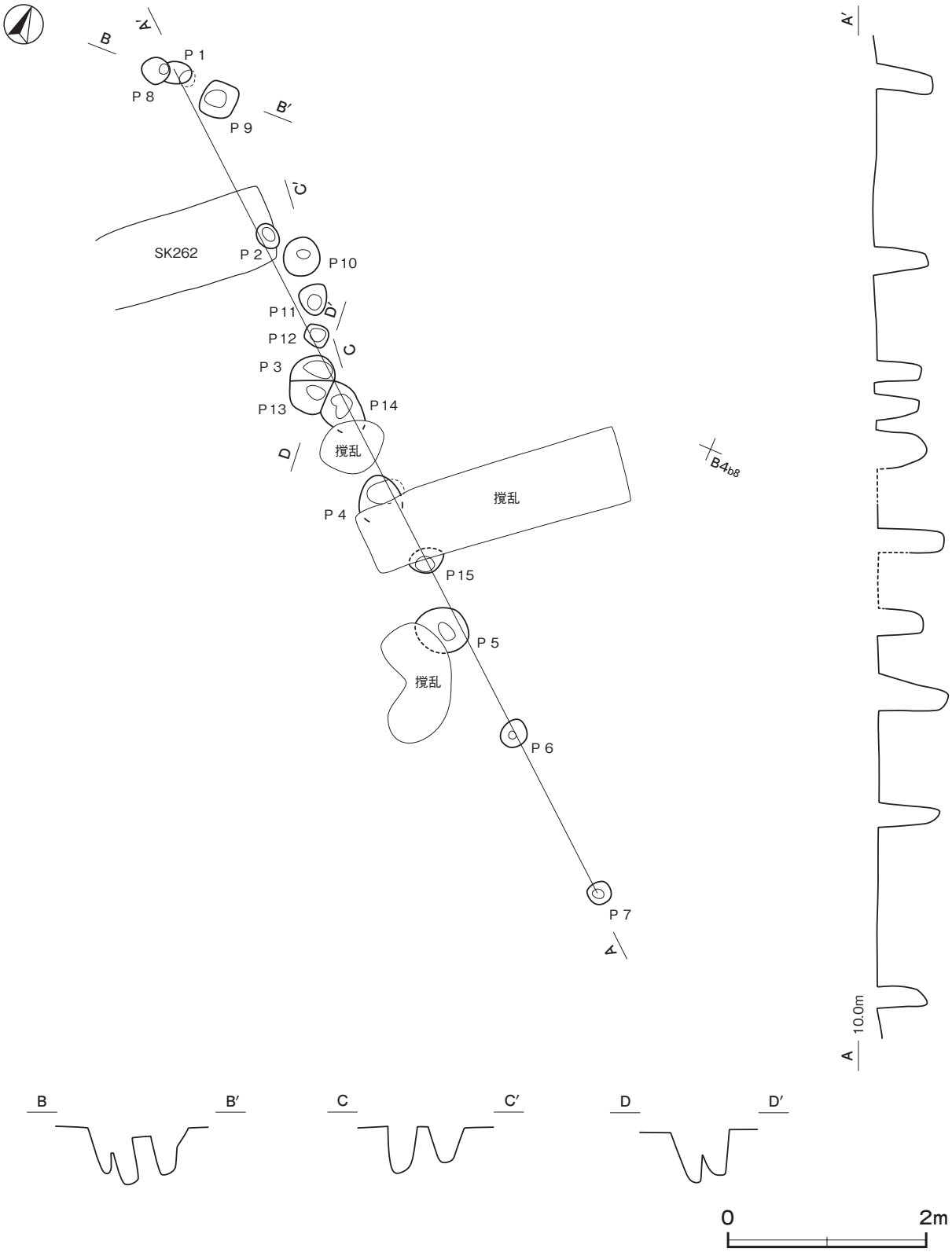
位置　調査区西部から中央部のＢ４a6～Ｂ４c8 区，標高 9.9 mほどの低台地平坦部に位置している。

重複関係　第１号遺物包含層を掘り込んでいる。 第 262 号土坑と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　Ｂ４a6 区から南東方向（Ｎ－50°－Ｗ）へ直線的に並ぶ柱穴 15 か所を確認した。Ｐ１～Ｐ７までの長さは 9.30 mで，柱間寸法は 1.2 m（４尺）～ 1.8 m（６尺）である。柱筋はほぼ揃っている。Ｐ１～Ｐ７の間に位置する，Ｐ８～Ｐ 15 は列上の周辺に位置するため，建て替えを想定して第１号柱穴列に含めた。

柱穴　平面形は円形もしくは楕円形で，長径 23 ～ 49cm，短径 20 ～ 40cmである。深さは 38 ～ 70cmである。

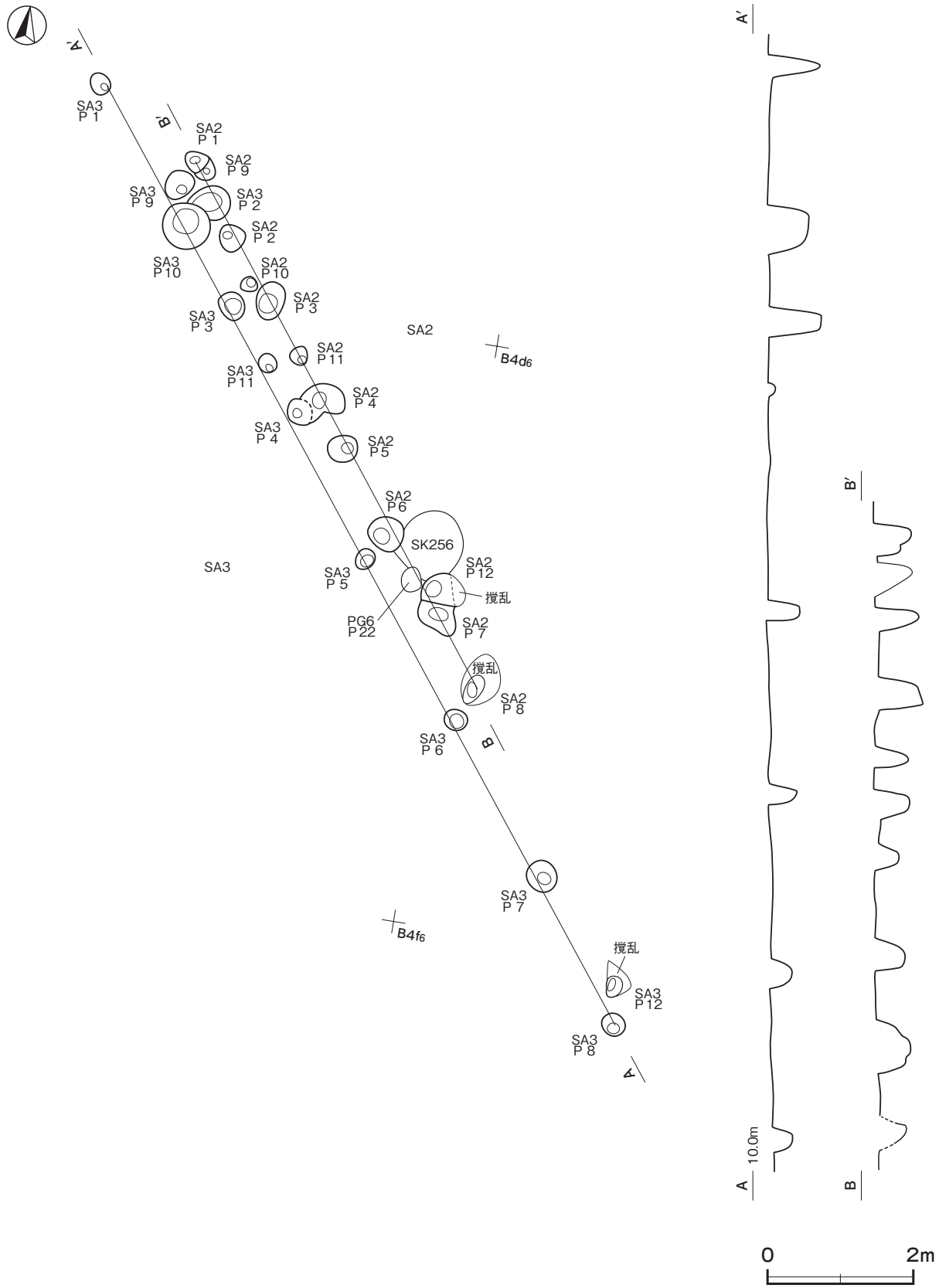
所見　遺物は出土していないため，時期は不明である。



第 37 図　第 1 号柱穴列実測図

第２号柱穴列（第 38 図）

位置　調査区西部のＢ４c4 ～Ｂ４e6 区，標高 9.9 mほどの低台地平坦部に位置している。



第 38 図　第２・３号柱穴列実測図

重複関係　第256号土坑を掘り込んでいる。また，第３号柱穴列及び第６号ピット群Ｐ22も重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　Ｂ４c4区から南東方向（Ｎ－40°－Ｗ）へ直線的に並ぶ柱穴12か所を確認した。Ｐ１～Ｐ８までの長さは8.20ｍで，柱間寸法は0.8ｍ（2.6尺）～1.5ｍ（５尺）である。柱筋はほぼ揃っている。Ｐ１～Ｐ８の間に位置しているＰ９～Ｐ12は列上に位置しているため，建て替えの可能性を想定して，第２号柱穴列に含めた。

柱穴　平面形は円形または楕円形で，長径21～52㎝，短径21～44㎝である。深さは32～60㎝である。

遺物出土状況　陶器２点（不明）が出土している。いずれも細片のため，図示できない。

所見　遺物が細片で伴うものか不明であるため，時期は不明である。本跡と第３・４号柱穴列は，近接しており，建て替えられた可能性がある。

第３号柱穴列（第38図）

位置　調査区西部のＢ４c4～Ｂ４f6区，標高9.9ｍほどの低台地平坦部に位置している。

重複関係　第２号柱穴列と重複しているが，新旧関係は不明である。

規模と形状　Ｂ４c4区から南東方向（Ｎ－38°－Ｗ）へ直線的に並ぶ柱穴12か所を確認した。Ｐ１～Ｐ８までの長さは14.60ｍで，柱間寸法は1.5ｍ（５尺）～2.5ｍ（8.3尺）である。柱筋はほぼ揃っている。Ｐ１～Ｐ８の間に位置しているＰ９～Ｐ12は列上に位置しているため，建て替えの可能性を想定して，第３号柱穴列に含めた。

柱穴　柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で，長径27～67㎝，短径22～63㎝である。深さは20～70㎝である。

所見　遺物が出土しておらず，時期は不明である。本跡と第２・４号柱穴列は，近接しており，建て替えられた可能性がある。

第４号柱穴列（第39図）

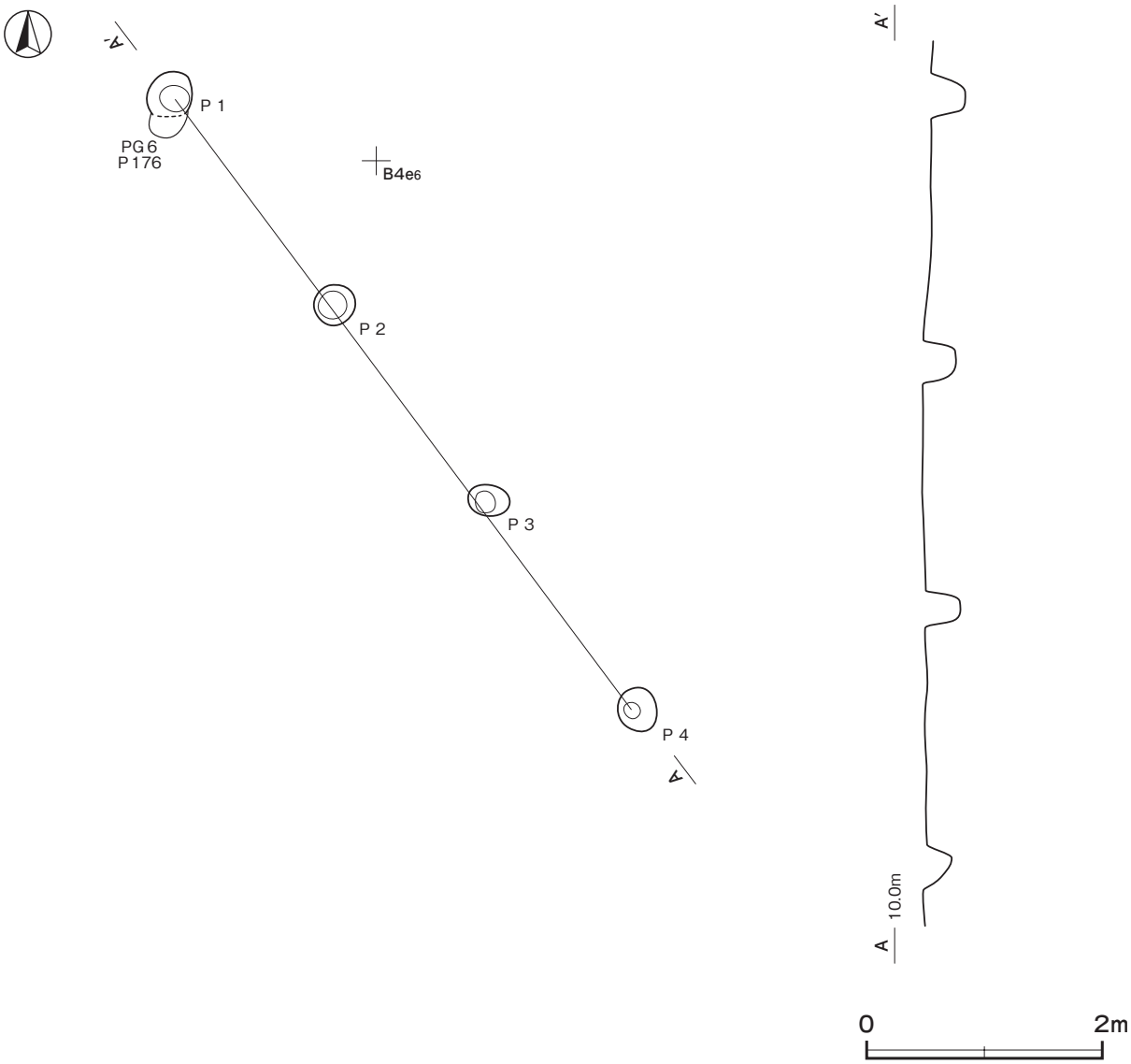
位置　調査区西部のＢ４d5～Ｂ４f6区，標高9.9ｍほどの低台地平坦部に位置している。

重複関係　Ｐ１が第６号ピット群Ｐ176を掘り込んでいる。

規模と形状　Ｂ４d5区から南東方向（Ｎ－37°－Ｗ）へ直線的に並ぶ柱穴４か所を確認した。Ｐ１～Ｐ４までの長さは6.45ｍで，柱間寸法は2.1ｍ（７尺）である。柱筋は揃っている。

柱穴　柱穴の平面形は円形もしくは楕円形で，長径26～37㎝，短径27～38㎝である。深さは23～31㎝である。

所見　遺物が出土しておらず，時期は不明である。本跡と第２・３号柱穴列は近接しており，建て替えられた可能性がある。しかし，第２・３号柱穴列と比べ，柱穴の平面形や深さ，柱間寸法が揃っており，西側の調査区域外に延びる掘立柱建物跡の可能性もある。



第 39 図　第 4 号柱穴列実測図

表 6　その他の柱穴列一覧表

番号	位置	主軸方向	長さ（m）	柱間（m）	柱穴					主な出土遺物	備考
					柱穴数	平面形	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)		
1	B 4 a6～B 4 c8	N－50°－W	9.30	1.2 ～ 1.8	15	円形・楕円形	23 ～ 49	20 ～ 40	38 ～ 70		HG 1 →本跡 SK262 と新旧不明
2	B 4 c4～B 4 e6	N－40°－W	8.20	0.8 ～ 1.5	12	円形・楕円形	21 ～ 52	21 ～ 44	32 ～ 60	陶器（不明）	SK256→本跡, SA 3・PG 6 と新旧不明
3	B 4 c4～B 4 f6	N－38°－W	14.60	1.5 ～ 2.5	12	円形・楕円形	27 ～ 67	22 ～ 63	20 ～ 70		SA 2 と新旧不明
4	B 4 d5～B 4 f6	N－37°－W	6.45	2.1	4	円形・楕円形	35 ～ 37	27 ～ 38	23 ～ 31		PG 6 →本跡

(6)　ピット群

今回の調査で，ピット群1か所を確認した。調査区全域南北 28 m，東西 47 mの範囲の中に広がり，154 個のピットが確認された。平面形は円形もしくは楕円形を基本としている。配置状況から建物跡は想定できない。出土した遺物は，いずれも細片で，遺物から時期を判断することはできない。全体の配置図は，全体図（付図）に掲載し，ピットの計測表のみを提示する。

表９　第６号ピット群一覧表

ピット番号	位置	形状	規模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
2	Ｂ３a3	円形	31	29	28
3	Ｂ４a4	楕円形	30	27	16
6	Ｂ４b4	円形	40	39	30
7	Ｂ４a5	楕円形	38	31	26
8	Ｂ４b5	楕円形	35	26	29
9	Ｂ４d7	楕円形	32	28	29
10	Ｂ４d7	楕円形	37	30	20
11	Ｂ４d7	円形	29	29	23
16	Ｂ４d5	円形	38	36	33
20	Ｂ４c5	楕円形	37	33	41
21	Ｂ４d7	楕円形	28	24	25
22	Ｂ４d5	楕円形	33	27	20
23	Ｂ４a7	楕円形	33	28	41
24	Ｂ４a7	円形	37	34	30
25	Ｂ４a7	楕円形	40	18	25
26	Ｂ４a7	楕円形	31	24	22
27	Ｂ４a7	楕円形	45	22	33
28	Ｂ４a7	楕円形	47	23	40
29	Ｂ４a7	楕円形	38	30	43
30	Ｂ４a7	楕円形	48	41	34
31	Ｂ４a7	楕円形	39	28	36
32	Ｂ４a7	楕円形	35	30	32
33	Ｂ４a8	楕円形	47	28	32
34	Ｂ４b8	楕円形	34	27	44
36	Ｂ４c8	楕円形	35	28	42
37	Ｂ４c8	楕円形	33	23	47
38	Ｂ４c8	不整楕円形	43	36	41
39	Ｂ４c8	楕円形	29	24	46
40	Ｂ４c8	不整楕円形	36	24	40
41	Ｂ４c9	楕円形	34	28	37
42	Ｂ４c9	円形	21	21	35
43	Ｂ４d8	隅丸長方形	46	28	37
44	Ｂ４c5	不整楕円形	32	28	21
45	Ｂ４b6	楕円形	58	25	34
46	Ｂ４c5	楕円形	36	24	53
47	Ｂ４c6	円形	48	45	40
48	Ｂ４c6	不整楕円形	37	32	14
49	Ｂ４c6	［楕円形］	［51］	43	28
50	Ｂ４c6	［楕円形］	50	［39］	28
51	Ｂ４d6	楕円形	57	38	28
52	Ｂ４c6	［円形］	(38)	37	34
53	Ｂ４d7	楕円形	35	30	43
54	Ｂ４d7	楕円形	45	38	31
55	Ｂ４d7	［円形］	39	37	35
56	Ｂ４d6	楕円形	53	36	33
57	Ｂ４d6	楕円形	46	34	28
58	Ｂ４e6	楕円形	41	37	45
59	Ｂ４e6	不定形	68	33	31

ピット番号	位置	形状	規模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
60	Ｂ４e7	楕円形	40	22	30
61	Ｂ４e7	楕円形	31	26	33
62	Ｂ４f7	楕円形	25	21	36
63	Ｂ４f7	円形	33	33	20
64	Ｂ４f7	楕円形	57	45	20
65	Ｂ４f8	楕円形	40	36	34
66	Ｂ４g8	円形	28	26	35
67	Ｂ４g8	楕円形	37	33	29
68	Ｂ４d9	円形	31	31	32
69	Ｂ４e9	楕円形	44	35	29
70	Ｂ４e9	楕円形	36	31	34
71	Ｂ４c9	楕円形	45	34	58
72	Ｂ４d9	楕円形	40	33	50
73	Ｂ４b9	楕円形	45	41	30
74	Ｂ４d9	楕円形	33	30	45
75	Ｂ４d9	円形	25	25	24
76	Ｂ４d8	楕円形	31	23	32
77	Ｂ４c9	楕円形	28	25	47
78	Ｂ４d0	円形	31	29	47
79	Ｂ４d0	円形	40	35	48
80	Ｂ４d9	楕円形	27	23	40
81	Ｂ４b8	楕円形	31	26	38
82	Ｂ５b2	円形	14	14	21
83	Ｂ５b2	楕円形	31	26	25
87	Ｂ５c3	楕円形	33	27	38
91	Ｂ５b2	円形	30	28	35
94	Ｂ５c3	楕円形	26	21	21
98	Ｂ４d9	楕円形	25	20	40
99	Ｂ４d9	円形	25	25	24
100	Ｂ４d8	楕円形	30	27	22
101	Ｂ４c8	楕円形	26	21	25
103	Ｂ４c8	楕円形	36	29	33
104	Ｂ４c7	楕円形	22	18	34
105	Ｂ４b7	(円形)	(26)	(25)	31
106	Ｂ４b7	［楕円形］	28	(14)	19
107	Ｂ４a6	円形	25	24	34
108	Ｂ４a6	楕円形	33	24	35
110	Ｂ４d7	楕円形	29	24	48
111	Ｂ４e7	楕円形	33	28	35
112	Ｂ４e7	円形	31	31	37
113	Ｂ４e7	楕円形	28	20	24
114	Ｂ４e6	楕円形	30	23	39
115	Ｂ４e6	不定形	30	28	37
116	Ｂ４e6	楕円形	40	36	35
118	Ｂ４e6	楕円形	36	28	25
120	Ｂ４f7	楕円形	50	37	35
121	Ｂ４f7	楕円形	43	35	24
122	Ｂ４f6	楕円形	25	21	25

ピット番号	位置	形状	規模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
123	Ｂ４f6	円形	30	29	16
125	Ｂ４f6	楕円形	33	29	25
126	Ｂ４e7	楕円形	26	22	32
127	Ｂ４e7	楕円形	24	20	38
128	Ｂ４e8	楕円形	43	25	45
129	Ｂ４e7	楕円形	45	35	37
130	Ｂ４e7	楕円形	42	33	40
131	Ｂ４e7	楕円形	34	26	45
132	Ｂ４e7	［円形］	30	(27)	42
133	Ｂ４e7	楕円形	54	35	45
134	Ｂ４e7	円形	43	40	42
135	Ｂ４e7	円形	29	28	37
136	Ｂ４f6	円形	20	20	25
137	Ｂ４d6	楕円形	31	28	20
138	Ｂ４g7	楕円形	26	23	25
139	Ｂ４g7	楕円形	29	20	32
140	Ｂ４g7	円形	30	28	20
141	Ｂ４g7	不定形	46	22	30
142	Ｂ４g7	楕円形	27	23	30
143	Ｂ４g7	楕円形	33	27	26
144	Ｂ４g7	楕円形	35	23	35
145	Ｂ４f8	円形	45	44	48
146	Ｂ４f8	楕円形	34	24	45
147	Ｂ４f8	円形	37	35	48
148	Ｂ４f8	円形	27	25	39
149	Ｂ４f8	楕円形	36	26	26
150	Ｂ４f8	楕円形	30	21	30
151	Ｂ４f8	楕円形	38	34	44
152	Ｂ４f8	楕円形	35	31	35
153	Ｂ４h8	楕円形	42	37	25
154	Ｂ４g0	楕円形	38	34	22
155	Ｂ５f1	楕円形	37	30	49
156	Ｂ５c5	楕円形	33	29	20
157	Ｂ５c5	楕円形	37	31	18
158	Ｂ５c4	円形	25	22	12
159	Ｂ５c5	円形	22	21	10
160	Ｂ５d3	楕円形	38	29	25
161	Ｂ５d3	楕円形	37	22	15
162	Ｂ５d4	楕円形	37	29	23
164	Ｂ５c2	楕円形	36	30	34
165	Ｂ５c1	楕円形	53	27	18
166	Ｂ４e6	楕円形	34	26	27
167	Ｂ４e6	円形	21	20	28
168	Ｂ４e6	楕円形	34	26	31
169	Ｂ５e3	楕円形	30	26	58
170	Ｂ５e2	楕円形	40	28	12
171	Ｂ５e2	不定形	43	33	40
172	Ｂ４f0	円形	41	39	38

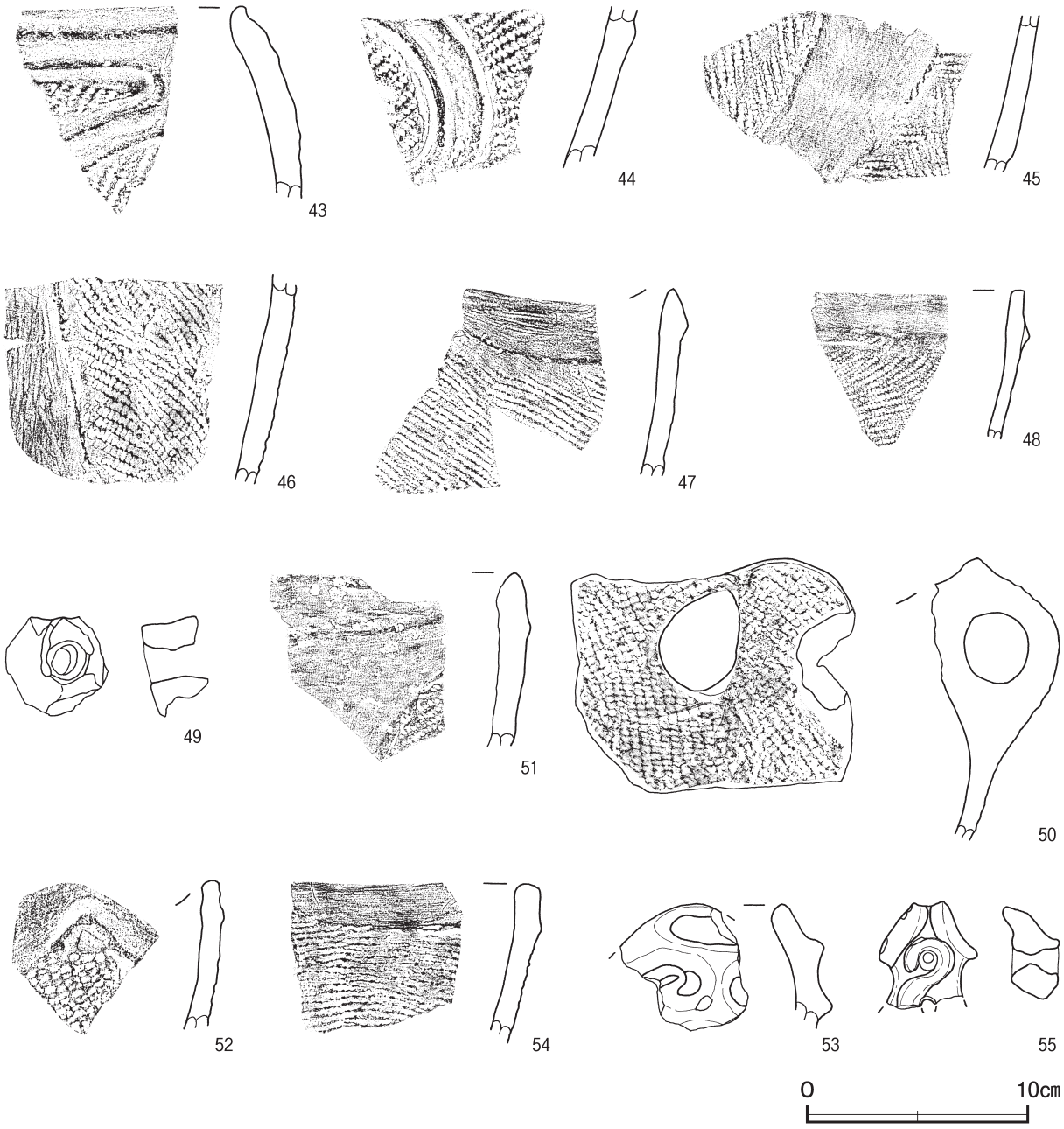
ピット番号	位　置	形　状	規　模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
173	B 5 f1	楕円形	33	27	46
174	B 5 f1	楕円形	31	28	30
175	B 4 e7	楕円形	40	36	43
176	B 4 d5	[楕円形]	30	(20)	20

ピット番号	位　置	形　状	規　模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
177	B 4 d8	楕円形	37	30	40
178	B 4 d7	楕円形	34	28	27
179	B 4 b8	不整楕円形	55	44	78
180	B 4 e7	円形	39	39	50

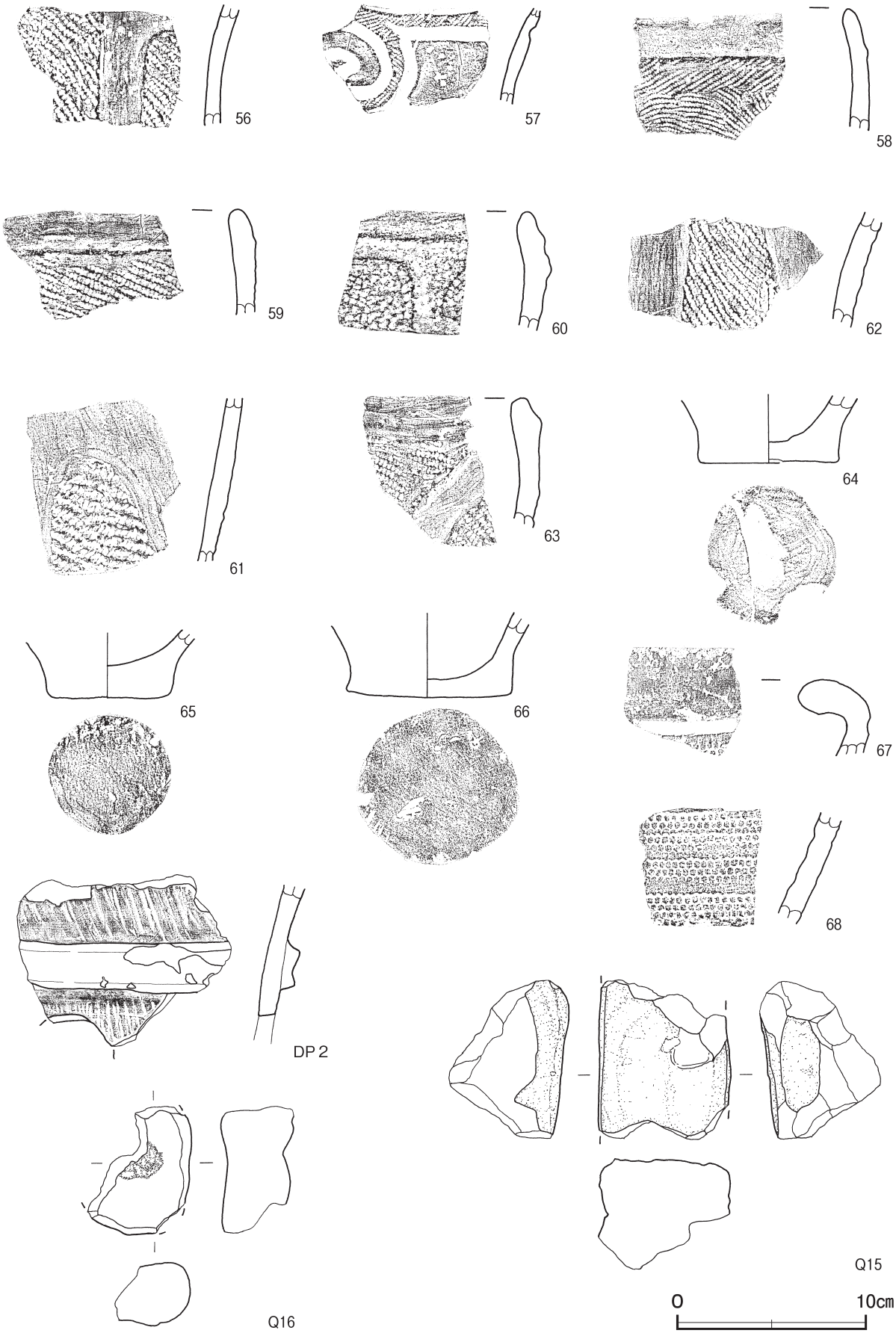
ピット番号	位　置	形　状	規　模（cm）		
			長軸(径)	短軸(径)	深さ
181	B 4 e8	楕円形	40	24	27
182	B 4 e6	円形	31	29	37

(7)　遺構外出土遺物

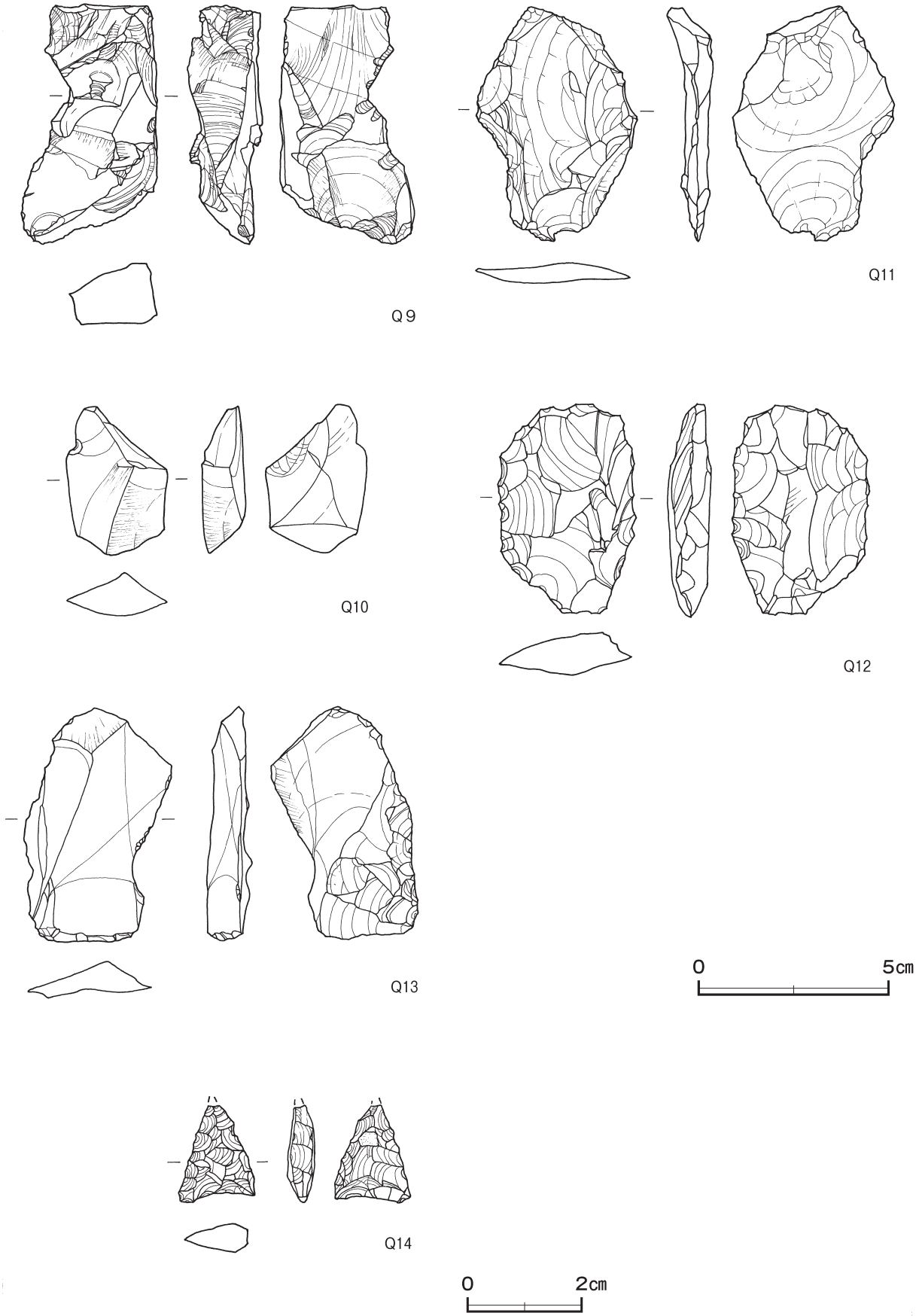
今回の調査で出土した遺構に伴わない遺物については，実測図（第 40 ～ 42 図）と観察表を掲載する。



第 40 図　遺構外出土遺物実測図（1）



第 41 図　遺構外出土遺物実測図（2）



第 42 図　遺構外出土遺物実測図（3）

遺構外出土遺物観察表（第 40 ～ 42 図）

番号	種　別	器種	口径	器高	底径	胎　　土	色　調	焼成	手　法　の　特　徴　ほ　か	出土位置	備　考
43	縄文土器	深鉢	－	(8.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文 RL　口縁部隆線による無文帯	SD25 覆土中	中期末葉 PL 5
44	縄文土器	深鉢	－	(7.3)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	沈線を伴う隆線による円弧文→単節縄文 RL を充填→円弧文内磨消	表土	中期末葉
45	縄文土器	深鉢	－	(7.2)	－	長石・石英・雲母	橙	普通	隆線による弧状文→単節縄文 LR を充填→弧状文内を縦位の磨消	SD26 覆土中	中期末葉
46	縄文土器	深鉢	－	(9.5)	－	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	隆線による懸垂文→単節縄文 LR を充填→懸垂文内を磨消	SD26 覆土中	中期末葉
47	縄文土器	深鉢	－	(8.6)	－	長石・石英	橙	普通	隆線による区画→無節縄文 L を充填　口縁部無文帯　内面ナデ	SD26 覆土中	中期末葉 PL 5
48	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	隆線による区画→単節縄文を充填→口縁部隆線による無文帯　内面磨き	SD26 覆土中	中期末葉 PL 5
49	縄文土器	注口土器	－	(4.5)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	注口部　隆帯貼付　剥離痕	SD26 覆土中	中期末葉 千歳窪類型
50	縄文土器	深鉢	－	(12.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	把手部貼付→単節縄文 LR →把手部ナデによる整形　内面磨き	SD28 覆土中	中期末葉 PL 5
51	縄文土器	深鉢	－	(7.9)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄褐	普通	隆線による区画→単節縄文 LR を充填→隆線内を磨消　口縁部隆線による無文帯	表土	中期末葉 PL 5
52	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文 LR →口縁部隆帯による無文帯	表土	中期末葉 PL 5
53	縄文土器	深鉢	－	(5.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい赤褐	普通	隆帯間を太い沈線による渦巻文　内面磨き	表土	中期末葉
54	縄文土器	深鉢	－	(7.3)	－	長石・石英・雲母・赤色粒子	にぶい橙	普通	無節縄文 R →口縁部隆線による無文帯	表土	中期末葉 PL 5
55	縄文土器	把手	－	(4.2)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	隆帯による渦巻文を前後に貼付け　中央部穿孔　正面・側面丁寧な磨き	表土	後期初頭
56	縄文土器	深鉢	－	(6.4)	－	長石・石英・雲母	にぶい褐	普通	隆線による懸垂文→単節縄文 LR を充填→懸垂文内を磨消　内面ナデ	表土	中期末葉
57	縄文土器	深鉢	－	(5.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	２本１単位の深い沈線　単節 LR を充填部と磨消による無文帯の繰り返し　渦巻文	表土	後期初頭　称名寺Ⅰ式期　PL 5
58	縄文土器	深鉢	－	(6.5)	－	長石・石英・雲母	明赤褐	普通	単節縄文 LR を充填　口縁部隆線による区画　口縁部無文	表土	中期末葉 PL 5
59	縄文土器	深鉢	－	(5.6)	－	長石・石英・雲母	褐	普通	単節縄文 LR を充填　口縁部隆線による区画　口縁部無文　内面横位のケズリ	表土	中期末葉
60	縄文土器	深鉢	－	(6.3)	－	長石・石英	にぶい褐	普通	隆線によるＴ字状文→複節縄文 RLR を充填→Ｔ字状文内磨消　口縁部隆線による無文帯	表土	中期末葉
61	縄文土器	深鉢	－	(8.7)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	複節縄文 LRL →浅い沈線による逆Ｕ字文→逆Ｕ字文内を磨消　内面磨き	表土	中期末葉
62	縄文土器	深鉢	－	(6.2)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	単節縄文 LR →隆線による懸垂文→懸垂文内を磨消　内面磨き	表土	中期末葉
63	縄文土器	深鉢	－	(6.8)	－	長石・石英・雲母	にぶい橙	普通	隆線による円弧文→単節縄文 LR を充填→円弧文内を磨消　口縁隆線による区画　ナデによる無文　内面ナデ	表土	中期末葉
64	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	7.4	長石・石英・赤色粒子	明赤褐	普通	底面ナデ	表土	
65	縄文土器	深鉢	－	(3.6)	6.3	長石・石英・赤色粒子	にぶい橙	普通	底面削り後ナデ　側面削り	表土	
66	縄文土器	深鉢	－	(4.5)	8.5	長石・石英・赤色粒子	にぶい赤褐	普通	底面削り後ナデ　工具による圧痕あり　内面指ナデ	表土	
67	瓦質土器	火鉢	－	(4.1)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面太い沈線による口縁部区画　回転印刻文　内面ヘラナデ	表土	68 と同一個体ヵ 近世
68	瓦質土器	火鉢	－	(6.0)	－	長石・石英・雲母	にぶい黄橙	普通	外面回転印刻文　内面ヘラナデ	表土	67 と同一個体ヵ 近世

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	胎　土	色　調	特　　徴	出土位置	備　考
DP 2	円筒埴輪	(8.5)	(11.3)	1.1	(155.99)	長石・石英・赤色パミス	橙	外面凸帯貼付　縦位のハケ目　凸帯上下ナデつけ　透孔あり　内面ヘラナデ	SD28 覆土中	PL 6

番号	器　種	長さ	幅	厚さ	重量	材　　質	特　　徴	出土位置	備　考
Q 9	石核	6.3	3.5	1.9	37.14	黒曜石	各面複数剥離痕　残核	SD28 覆土中	
Q 10	剥片	3.9	2.7	1.1	10.22	チャート	打面は単剥離面　背面別方向の剥離痕	SD26 覆土中	
Q 11	剥片	6.2	4.2	1.2	17.34	チャート	打面は単剥離面　背面複数方向の剥離痕	SD28 覆土中	
Q 12	ｽｸﾚｲﾊﾟｰ	5.6	3.7	1.1	23.96	チャート	片面縁部刃部加工	SD28 覆土中	
Q 13	剥片	6.2	3.9	1.3	21.34	チャート	打面は単剥離面	表土	
Q 14	石鏃	(1.7)	1.3	0.5	(0.71)	黒曜石	無茎平基鏃　先端部破損　片面押圧剥離　背面片方のみ押圧剥離　未成品ヵ	表土	
Q 15	石皿	(8.5)	(7.0)	(5.9)	(137.01)	角閃石デイサイトヵ	使用面わずかに凹む　使用痕有	SE22 覆土中	
Q 16	凹石	(6.8)	(5.6)	3.9	(107.88)	砂岩	凹み箇所１か所	表土	

第４節 ま　　と　　め

１　はじめに

平成27年度の調査（以下「今回調査区」とする）では，掘立柱建物跡３棟（不明），井戸跡１基（不明），火葬施設１基（中世），土坑76基（縄文時代８・中世30・近世１・不明37），溝跡７条（近世４・不明３），柱穴列４条（不明），ピット群１か所（不明），遺物包含層１か所（縄文時代）を確認した。確認した遺構は，縄文時代の集落跡や中世の墓域の一部と考えられる。『当財団調査報告』第352集では，平成21年度調査区（以下「東側調査区」とする）及び平成22年度調査区（以下「西側調査区」とする）から，竪穴建物跡２棟（縄文時代），井戸跡21基（中世12・不明９），火葬施設４基（中世），方形竪穴遺構８基（中世），土坑224基（縄文時代２・中世47・近世55・不明120），堀跡１条（近世），溝跡20条（不明），ピット群５か所（不明）が報告されている。ここでは，時代順に前回調査と併せながら，各時代の遺構と出土遺物について概観し，若干の考察を加えることでまとめとしたい。

２　遺跡の様相

⑴　縄文時代

当時代の遺構として，遺物包含層１か所とそれを掘り込む土坑８基を確認した。遺物包含層からは加曾利ＥⅣ式の土器が出土していることから，中期末葉が主な形成時期と考えられ，土坑はそれ以降に位置付けられる。前回の調査では，東側調査区から加曾利ＥⅡ～ＥⅢ式期の竪穴建物跡２棟，土坑２基を確認している。

当遺跡の周辺は，赤堀川開削以来の洪水や河川改修，現代の土地改良事業によって，現況では極めて平坦な地形を呈しているが，旧地形は北西から南東方向に延びながら傾斜する台地に，現在の利根川沿いの北側の低地から谷が樹枝状に別れながら南西に入り込んでいたと考えられる[1)]。当遺跡付近にも谷が存在し，その斜面に遺物を含んだ土が堆積することで，今回確認された遺物包含層が形成されたと考えられる。

集落の変遷や構成については確認された遺構数が少ないため不明であるが，集落の存続は加曾利ＥⅡ～ＥⅣ式期にかけてと考えられる。また，今回も前回と同様に縄文時代以外の遺構の覆土や表土中からも多くの縄文土器が出土しており，周辺に遺構が展開するものと思われる。

中期の遺跡は，町域の北部に多く立地していることがこれまでも指摘されている[2)]。勝坂式～加曾利Ｉ式期の小手指貝塚，加曾利ＥⅡ～Ⅳ式期の土坑５基が調査された宿北遺跡，加曾利ＥⅢ式期の集落跡が調査された上原遺跡などとともに，当遺跡も中期後葉から末葉にかけて，人々がこの地を生活の場所にしていたことが確認された。

出土した土器は，大部分が中期後葉から末葉に位置づけられる加曾利ＥⅢ～ＥⅣ式であり，ついで後期初頭の称名寺式が少量出土し，前期の黒浜式，後期の加曾利Ｂ～曽谷式がわずかに出土している[3)]。

第281号土坑出土のＰ１は４単位の波状口縁を持ち，波頭部が２か所上部に摘まみ上げられている。文様構成は，沈線で対向Ｕ字文が互いに接してＨ字文に変化した文様を施している。第313号土坑のＰ４も同様な文様構成が見られる。近隣では，栃木県小山市寺野東遺跡や埼玉県松伏町浅間東遺跡の出土土器に類似している。近年，中期末葉から後期初頭の土器編年については調査研究が進められ，称名寺式に併行する加曾利Ｅ系の土器の存在が明らかになっている。事例の増加とともに，加曾利Ｅ式の影響がみられる土器については，加曾利ＥＶ式を設定して後期初頭に位置づけることも議論されている[4)]。この研究成果

も併せると，称名寺式期の土器や千歳窪類型の注口土器が出土していることから集落の存続がさらに後期まで延びる可能性も存在している。

⑵　古墳時代

当時代の遺構は確認できなかったが，近世の第 28 号溝跡から円筒埴輪が 1 点出土している。当遺跡の西側に位置する小手指・川妻地区は，町域内で古墳が集中している地域である。当遺跡の南西約 500 mに存在する伊勢塚古墳は，前方後円墳と言われており，円筒埴輪が採集されている。周辺には四十八塚と呼ばれる古墳群が存在していたと伝えられている[5)]。今回出土の埴輪は摩滅が少なく，近隣からの流れ込みと考えられ，当遺跡の周辺にも，埋没したり削平されたりした古墳が存在している可能性がある。

⑶　中世

当時代の遺構は，火葬施設 1 基，土坑 30 基を確認した。

土坑は，全容が不明なものも存在するが，長軸 1.80 m前後，短軸 0.80 m前後の長方形の土坑を 25 基確認することができた。覆土は，シルトブロックを含んだ黒色または黒褐色を呈し，人為的に埋め戻されている。土坑からの出土遺物は極めて少なく，第 283 号土坑から陶器の卸皿が出土しているほかは，３基の土坑から土師質土器の小皿や甕が確認されたのみである。骨片や六道銭とみられる銭貨等は確認できなかったが，前回調査や近隣の調査事例から墓坑と考えられる。第 283 号土坑出土の卸皿が 15 世紀後半と考えられる以外は，詳細な時期は不明である。主軸方向が南北軸と東西軸に分けることができるが，形状が長方形に限られているために，ほぼ同一時期に営まれたと考えられる[6)]。

斉藤弘氏は，北関東における中世墓地について「14 世紀頃に庶民層も造墓が始まり，15 世紀～ 16 世紀には一部で集団墓地が形成される。また, 中世墓地には火葬施設や井戸, 及び地下式坑が伴う事例が多い。」と述べている[7)]。今回調査区では，火葬施設 1 基が確認されたのみで，地下式坑や井戸跡は確認されていないが，遺物がないために時期不明とした井戸跡が伴う可能性や，調査区外に展開していることも想定される。

西側調査区で，当期の井戸跡 12 基，火葬施設 4 基，方形竪穴遺構 8 基，土坑 47 基を確認し，主に墓域としての土地利用が想定されている。遺構から少量であるが，常滑６ａ～６ｂ型式の甕や片口鉢が出土しており，13 世紀後半を中心とした時期と報告されている。今回調査区と時期差が見られ，関連については再度検討が必要であるが，墓域として断続的にこの地域が利用されていた可能性が高い。

また，前回報告では，当期の土地利用について墓域のみならず，方形竪穴遺構の性格について，工房や倉庫の可能性を想定しているが，今回の調査ではそれを補強するような遺構は確認されなかった。

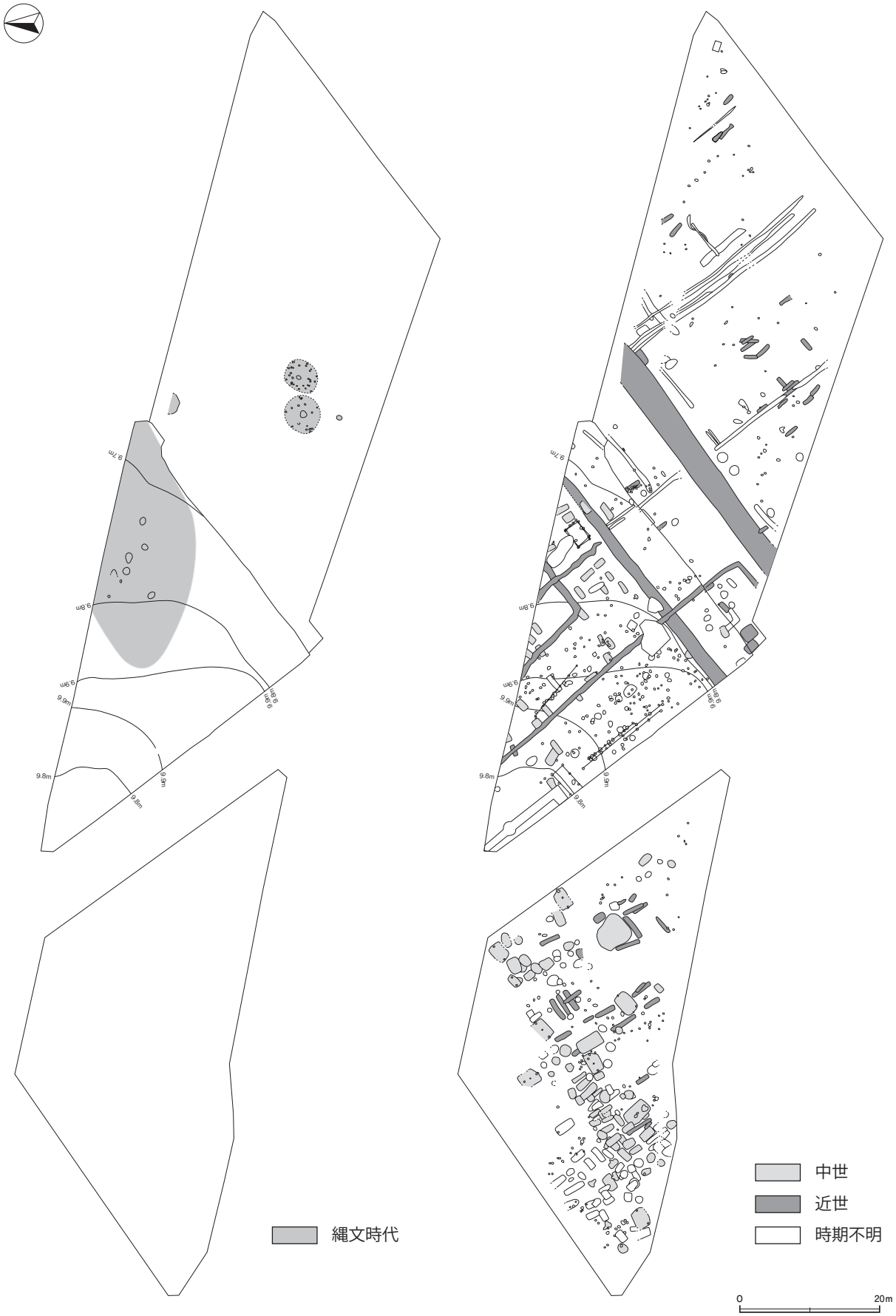
⑶　近世

当時代の遺構は，土坑 1 基，溝跡 4 条を確認した。

遺構の新旧関係から，第 25･28 号溝跡，第 1 ･26 号溝跡，第 260 号土坑の 3 時期に分けることができる。最も古い時期の第 28 号溝跡からは，16 世紀～ 17 世紀にかけての陶器が出土しており，その時期に機能していたと考えられる。その他の遺構は，それ以降の時期と考えられる。

東側調査区では，土坑 30 基，堀跡 1 条が，西側調査区では土坑 25 基が確認されている。また，東側調査区で，今回確認した溝跡と同一方向や直交する向きに延びている時期不明の溝跡も当期に該当する可能性がある。

当遺跡が存在する両新田地区は，元和 7 年（1621），赤堀川の開削により，釈迦村・前林村が北側の本村と南側の飛地に分断されたことにより成立した。飛地へは，船で渡り耕作していたが，江戸時代後半に



第 43 図　釈迦新田遺跡遺構配置図

なると集落が成立したと見られている[8)]。明治18年作成の迅速測図には，北西と南西側に集落が存在し，今回の調査区周辺は畑と記載されている。確認された溝跡が地割を目的としていることや，遺物の出土量も極めて少ないことと併せると，近世においても同様に耕作地として利用されていたと考えられる。

一方で，最も新しい時期の第260号土坑は，墓坑の可能性がある。周辺には同期の遺構は見られず，継続的に墓域としては利用されていないと考えられる。単独で立地していることから，中世における共同化した墓地様相とは異なっている[9)]。

3　まとめ

以上，当遺跡の遺構と出土遺物について，前回の調査結果も併せて，時代別に概観してきた。

確認された遺構は少ないが，縄文時代の中期の土器が調査区域から広く出土しており，調査区周辺に中期後葉から末葉にかけて集落が営まれていたと考えられる。遺構は確認できなかったが，前期や後期の土器も出土しており，周辺での土地利用が想定される。中世に入ると，主に墓域として土地利用されている。近世には，赤堀川開削がこの地域に大きな影響を与え，洪水対策も兼ねた堀が作られ，耕作地として主に利用されていたと考えられる。

当遺跡の調査は，堤防拡張に伴い遺跡の一部に過ぎない。調査区域外に伸びる遺構もあり，遺跡の全容が明らかになった訳ではない。今後も，近隣地域の調査の積み重ねや他遺跡の調査事例との比較により分析を進める必要がある。今回の調査成果が当地域における歴史解明に繋がることを期待したい。

註

1）五霞町史編さん委員会『町史　五霞の生活史　水と五霞』　五霞町　2010年３月
2）金井忠夫「氷河性海面変化と五霞村の貝塚」『埼玉研究』第12号　埼玉県地域研究会　1966年３月
3）大川清・鈴木公雄・工楽善通編『日本土器事典』雄山閣　1996年12月
4）横浜市博物館編『称名寺貝塚と称名寺式土器：公益財団法人三菱財団平成27年度人文科学研究助成：横浜市歴史博物館企画展「称名寺貝塚」関連シンポジウム』横浜市ふるさと歴史財団　2016年３月
5）大谷徹「瓢箪塚古墳表採埴輪」『立正考古』第28号　立正大学考古学研究会　1989年３月
6）宿北遺跡で確認された室町時代の墓坑と見られる土坑と類似している。時期は16世紀前半と報告されている。
近江屋成陽「宿北遺跡　宿東遺跡　寺山遺跡　首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書２」『茨城県教育財団文化財調査報告』第383集　2014年３月
7）斉藤弘「中世後期の墓地－下野を中心に」『栃木県考古学会誌』第18集　栃木県考古学協会　1996年11月
8）五霞町史編さん委員会『町史　五霞の生活史　地誌』　五霞町　2013年３月
9）瀬沼遺跡で確認された近世の墓坑の状況と類似している。
本橋弘巳「同所新田遺跡２　瀬沼遺跡２　一般国道468号首都圏中央連絡自動車道新設事業地内埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第312集　2009年３月

参考文献

・坂本勝彦「釈迦新田遺跡　首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書1」『茨城県教育財団文化財調査報告』第352集　2012年３月
・齋藤弘道「茨城県の縄文土器」『茨城県立歴史館叢書９』　茨城県立歴史館　2006年３月
・谷藤保彦・関根愼二編『第28回縄文セミナー　縄文後期注口土器の諸様相』縄文セミナーの会　2015年２月
・金井忠夫『利根川の歴史』日本図書刊行会　1997年２月
・橋本澄郎・荒川善夫編『東国の中世遺跡－遺跡と遺物の様相－』随想舎　2009年２月
・石守晃「所謂中世土坑墓について：その基本的な形態についての覚書」『群馬の考古学』群馬県埋蔵文化財調査事業団1988年11月
・愛知県史編纂委員会『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　瀬戸系』愛知県　2007年３月
・愛知県史編纂委員会『愛知県史　別編　窯業２　中世・近世　常滑系』愛知県　2012年３月
・両角まり「内耳鍋から焙烙へ－近世江戸在地系焙烙の成立－」『考古学研究』第42巻第４号（通巻168号）1996年３月
・成島一也「石畑遺跡　12県単道改第12－03－261－0－052号埋蔵文化財調査報告書」『茨城県教育財団文化財調査報告』第192集　2002年３月
・佐藤一也「新田遺跡　上原遺跡　殿山塚　首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書３」『茨城県教育財団文化財調査報告』第395集　2015年３月

写　真　図　版

調 査 区 全 景

第 281 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第 313 号 土 坑
遺 物 出 土 状 況

第１号遺物包含層
遺 物 出 土 状 況

第１号遺物包含層
遺 物 出 土 状 況

第 28 号 溝 跡
遺 物 出 土 状 況

第 28 号　溝　跡
遺 物 出 土 状 況

第 28 号　溝　跡

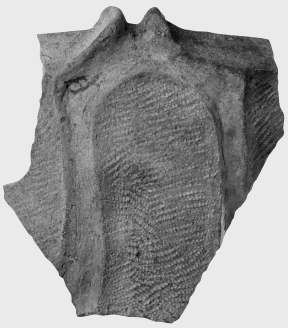
第 22 号　井　戸　跡

PL4

SK 281-1

SK 281-3

SK 281-2



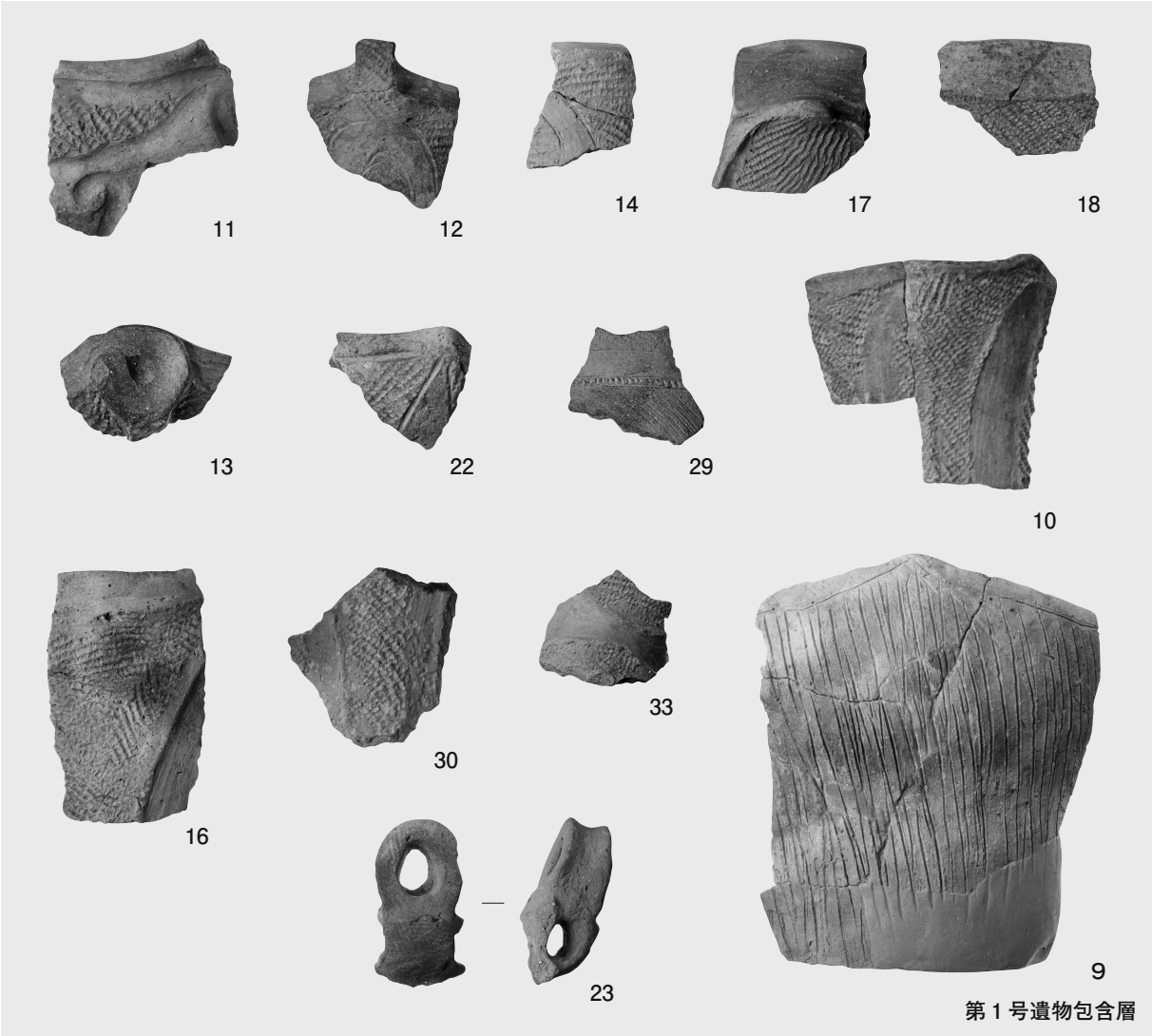
SK 313-4

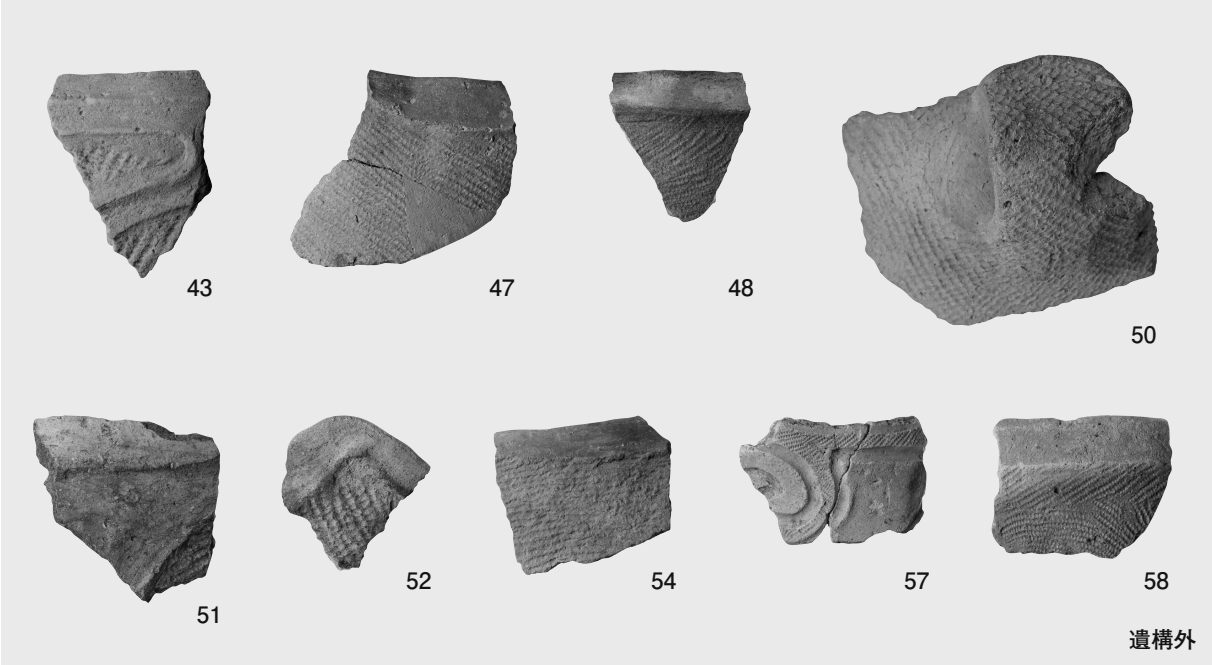
SK 314-5

SK 321-6

SK 322-8

第281・313・314・321・322号土坑出土土器





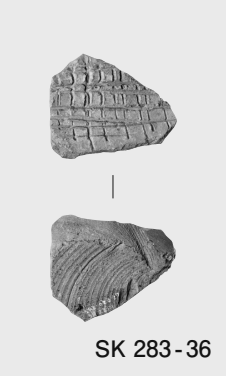
第１号遺物包含層・遺構外出土土器

SD 28-39

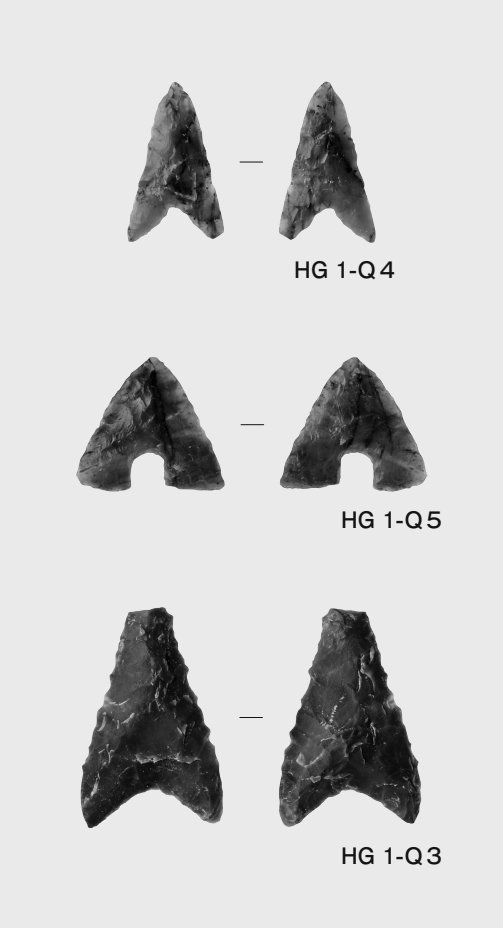
SD 28-40

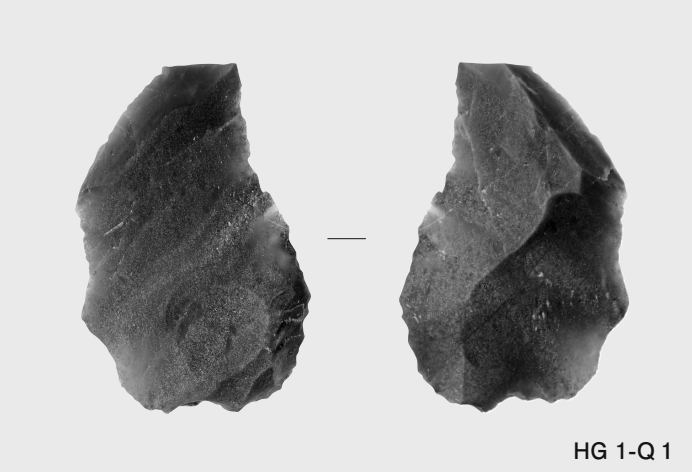
SD 28-42

SD 28-41


SK 283-36

遺構外-DP2


HG 1-Q4
HG 1-Q5
HG 1-Q3


HG 1-Q1

第1号遺物包含層・第283号土坑・第28号溝跡・遺構外出土遺物

抄　　録

ふりがな	しゃかしんでんいせき２
書　　名	釈迦新田遺跡２
副　書　名	首都圏氾濫区域堤防強化対策事業地内埋蔵文化財調査報告書４
シリーズ名	茨城県教育財団文化財調査報告第 418 集
著　者　名	大久保芳紀
編 集 機 関	公益財団法人茨城県教育財団
所　在　地	〒 310 － 0911　茨城県水戸市見和１丁目 356 番地の２　　ＴＥＬ 029 － 225 － 6587
発　行　日	2017（平成 29）年３月 15 日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード	北緯	東経	標高	調査期間	調査面積	調査原因
釈迦新田遺跡	茨城県猿島郡五霞町大字釈迦字地蔵前 2411 － 1 番地ほか	08542 － 028	36 度 7 分 37 秒	140 度 44 分 36 秒	9.6 ～ 10.0 m	20150901 ～ 20151031	1,351 ㎡	首都圏氾濫区域堤防強化対策事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
釈迦新田遺跡	集落跡	縄文	土坑　8 基 遺物包含層　1 か所	縄文土器（深鉢），石器（スクレイパー・鏃・磨石・剥片）	
	墓域	中世	火葬施設　1 基 土坑　30 基	土師質土器（小皿・甕），陶器（卸皿），土製品（羽口）	
	その他	近世	土坑　1 基 溝跡　4 条	瓦質土器（焙烙），陶器（皿・天目茶碗・甕・擂鉢・瓶ヵ）石器（砥石）	
		時期不明	掘立柱建物跡　3 棟 井戸跡　1 基 土坑　37 基 溝跡　3 条 柱穴列　4 条 ピット群　1 か所	縄文土器（深鉢・注口土器），瓦質土器（火鉢），石器（スクレイパー・鏃・石皿・凹石・石核・剥片），土製品（円筒埴輪）	

要　　約	縄文時代から近世にかけての複合遺跡である。縄文時代の集落跡は，前回調査と併せると中期後葉の加曾利ＥⅡ～ＥⅣ式期と見られる。中世は，火葬施設や墓坑と考えられる長方形を呈する土坑が確認でき，墓域として土地利用されている。

印　刷　仕　様

編　　集	ＯＳ	Microsoft Windows 10
		Home Premium ServicePack1
	編集	Adobe InDesign CS6
	図版作成	Adobe Illustrator CS5
	写真調整	Adobe Photoshop CS6
	Scanning	EPSON ET－X980
		図面類　RICOH imagio MP W4001
使用Font	OpenType	リュウミンPro・L
写　　真	線数	モノクロ175線以上　カラー210線以上
印　　刷	印刷所へは，Adobe InDesign CS6でレイアウトして入稿	

茨城県教育財団文化財調査報告第418集

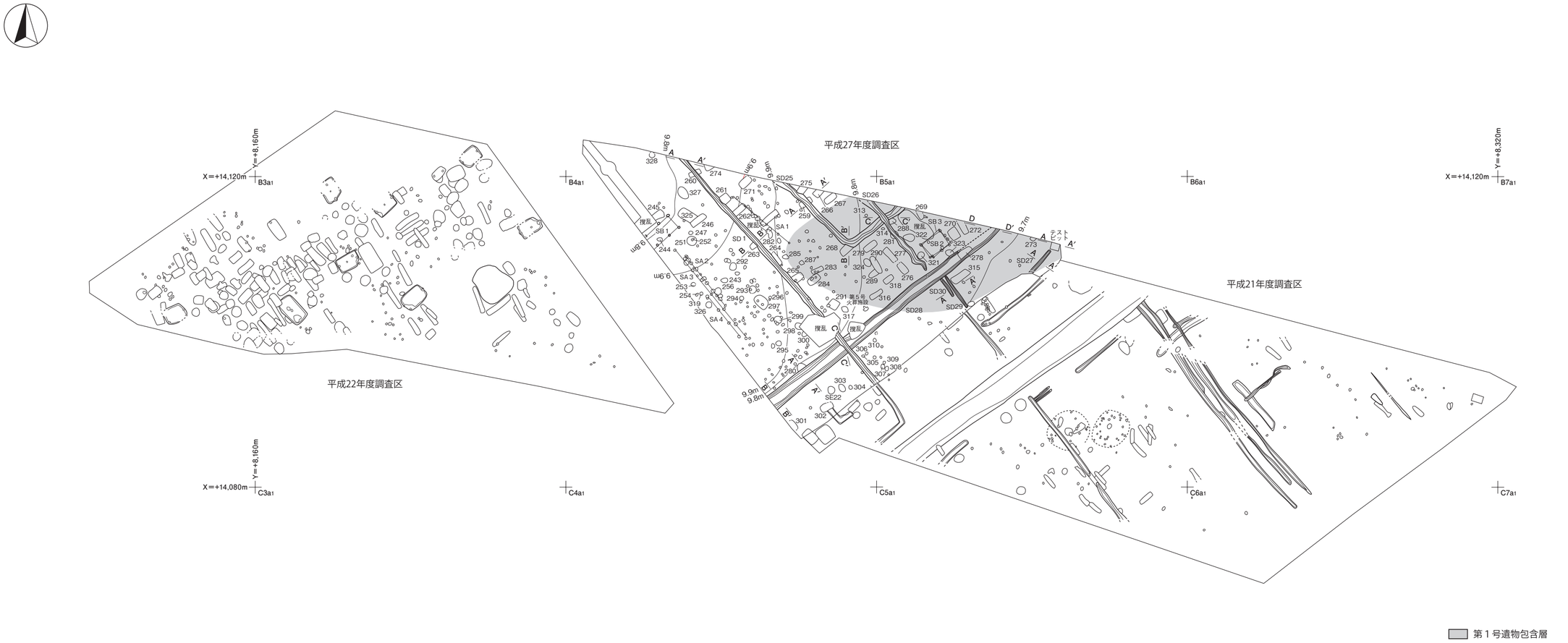
釈迦新田遺跡２

首都圏氾濫区域堤防強化対策
事業地内埋蔵文化財調査報告書４

平成29（2017）年　３月15日　印刷
平成29（2017）年　３月17日　発行

発行　公益財団法人茨城県教育財団
〒310－0911　水戸市見和１丁目356番地の２
茨城県水戸生涯学習センター分館内
TEL　029－225－6587
ＨＰ　http：//www.ibaraki-maibun.org

印刷　（有）川田プリント
〒310－0041　水戸市上水戸４丁目６－53
TEL　029－253－5551



付図　釈迦新田遺跡遺構全体図　（『茨城県教育財団文化財調査報告』第 418 集）